

庄内川の語り部

— 次世代に伝えたい、きれいだったあの頃 —

令和2年3月
矢田・庄内川をきれいにする会

目次

はじめに 2

【語り部として登場する人々（五十音順）】

犬飼 一夫 氏 5

大石 正司 氏 10

鹿嶋 清光 氏・鹿嶋 武人 氏 12

加藤 剛之 氏・小林 鉦年 氏 16

加藤 登代子 氏 20

加藤 紀夫 氏 23

加藤 福光 氏 25

川原 一雄 氏・加藤 實 氏 31

柴田 明芳 氏 36

長谷川 庸子 氏 40

服部 繁治 氏 42

坂野 一博 氏 47

宮田 照由 氏 49

R. I 氏 52

渡辺 文夫 氏 61

まとめ 67

はじめに

庄内川は岐阜県恵那市夕立山(727m)から発し、愛知県の春日井市、瀬戸市などを貫流、名古屋市北、西の縁辺を巡り、伊勢湾に注ぐ都市河川である。県境から下流の渓谷を玉野川と呼ぶことがある。流域面積は1,010km²【注1】、流路延長は96kmの1級河川としては小さい方の河川である。普段の流れは木曾川の利水の落ち水を含み、近年の平水量で15.5m³/sと比較的多い。矢田川は瀬戸市猿投山付近に発し、名古屋市西区で庄内川に合流する流域面積115km²、流路延長23kmの左支川である。

両川とも上流で古くから陶磁器や珪砂産業が盛んで、戦後20年まで白濁水となっていた。また薪炭採取のため、江戸末期から進行していた山の荒廃は全国三大禿山と言われるほどになった。明治の治山、砂防工事に続き昭和初期の改修を経て昭和32年洪水ののち大改修が行われた。

庄内川及び支川矢田川は陶土・珪砂排水で白濁化し、一度死んだ。さらにその排水が水質汚濁防止法の成立で大いに改善されつつある頃、中流春日井市に立地した王子製紙春日井工場の昭和52年6月の操業開始で製紙パルプ排水により汚水量192千m³/日、水質COD【注2】 60 mg/Lの大量汚濁負荷が加わった。パルプ排水独特の硫黄化合物の垂れ流しで、川の生き物や漁業に与える影響は大なるものがあって、漁業協同組合は懸命の放流努力にもかかわらずやや経過して平成19年3月に解散した。川は2度死んだ。

さらに高度成長経済で市街化は進行し、家庭汚水の増加に伴いこれに加わり、川は3度死んだ。しかしやや遅れて整備がすすめられた下水道により、川は徐々にきれいになって行った。また工場も一定の努力をし、水質は改善、また悪臭防止法の施行により平成7年(18年に改正)に、遅ればせながら施行された同法に基づく県条例の効果が発揮され、悪臭も減じた。しかし水質等の改善は最悪値を示した昭和48年を過ぎることほぼ50年でも、いまだにその環境基準の類型【注3】C、Dしか達成していない。ようやく戻ってきたアユなども異臭で食えない。(巻末参照)

45年間わが矢田・庄内川をきれいにする会は性懲りもなく“食えない魚釣り大会”を行っている。アユ100万匹週上大作戦を標榜しているが、いまだ量・質とも達成できていない。“きれいな水に魚棲まず”という、BOD【注2】3mg/Lは里川の目標水質であると言われる。今般、類型が県において見直されたが、それでも類型C以下の水域が都市河川を中心に全体の46%と多く残っている。県の1級河川では、庄内川水系だけが依然C、Dの水域を有することとなった。全国的に見てもワースト10に入っていると思われる。

王子製紙春日井工場の汚濁負荷は会社努力で若干改善されているものの、依然として庄内川汚濁負荷の44%(2017年)→57%(2027年)(水分橋地点、BODベース、2019愛知県予測)を占め、この改善がなされない限り、下水道の整備が進んで行間、ますます顕在化し、類型Bどころか、河村名古屋市長も主張する水泳のできる類型Aなどは望むべくもないだろう。水質の現状や将来は巻末のグラフを参照。

わが会は人と川の生き物の共生する水質として類型B(BOD<3mg/L)以上を求めている。しかし水質行政を担う県や春日井市は積極的に動かない、つまり施策を打たない。下水道整備も春日井市や瀬戸市では遅々として進まない。新自由主義下の工場は協定を守るだけの姿勢である。水産行政を預かる県はそもそも内水面漁業に対して軽視ないし無策である。

庄内川では落差工や堰に魚道【注4】は設置されているものの、その機能が十分なものほとんどない。矢田川も国区間で1つ、県区間で3つ以上未設置である。これでは庄内川・矢田川および小支川は生き物に対していまだ死んだまま、蘇生していない。魚の住処を預かる河川管理者も、落差工の魚道設置・改善等にあまり積極的でない。

戦後75年庄内川などを熟知している古老はいなくなりつつある。川はきれいだったと言われる昭和34年の伊勢湾台風のころ、15歳だった最後の川ガキたちはたぶん庄内川の自然を満喫したことであろう。

今、彼らは76歳である。18人の中老・古老を訪ねて、「昔の川はどうでした?」とヒアリングをした。水質だけで

なく、川遊び、魚を中心とした川の生き物、魚の捕り方、魚料理・食文化、漁協、行政に言いたいことをそれぞれ2時間ほど聞いた。昔の川はきれいだったとかよく遊んだとかよく聞くが、だんだんと原風景のイメージアップができなくなっている。古老たちの語りをまとめて冊子にすることにより昔の川のイメージを特に若者と共有したい。そして何でもよい、川で五感の原体験をしてもらって、川を楽しみながら、かつ川を蘇生する活動の主人公になってもらいたいと願っている。“絶滅危惧種”の子供たちも然り、親共々もって川で遊ぼうと呼びかけている。昔の庄内川を知ってこれを目標に、漁業・漁協の復活、川魚料理の復活、泳げる川の復活など川文化の再生を目指したい。

伝手を求めて対象の人を芋づる式に輪を広げた。しかし遅かった。その多くの人たちは故人となっていた。もう少しこの企画を早くすべきだったと悔やんでいる。

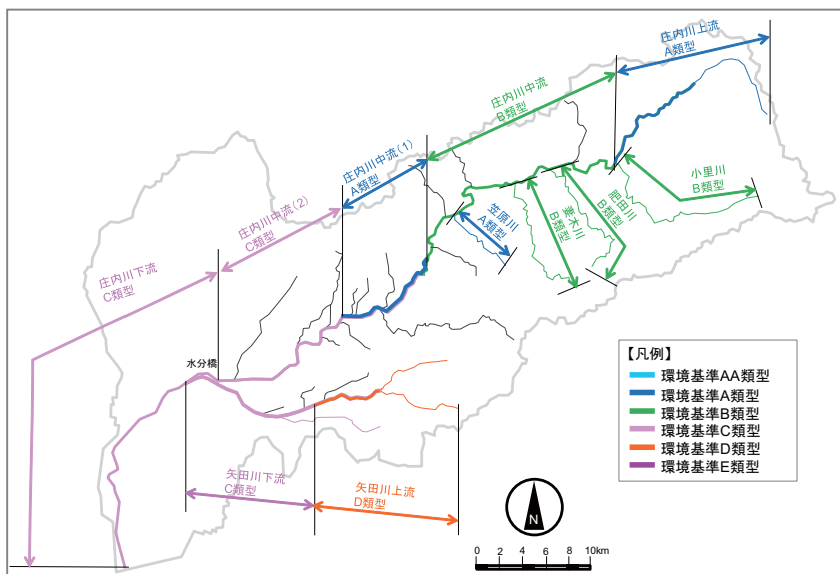
また関係の文献をできるだけ集め、ヒアリングの便とした。多くの昔の庄内川のモノクロ写真も見た。いずれ機会を得て写真展もやってみたい。蟹江町で川魚料理も食してみた。川魚料理を食する会もやってみたい。

本冊子出版には2016.9構想、2018.3語り部候補者名簿作成、2017.12ヒアリング開始、2018. テープ起こし、2019.12語り部の皆様に照会、2020.3印刷・発行と3年あまりかかった。

語り部の皆様には多くを語っていただきましたが、紙面の都合でやむなく省いたところもあります。また事前に一応原稿を見ていただきながら、なお尽くせぬ点があろうかと存じますが、どうぞ寛容ください。まだ語り足らぬことがありでしょう。いつまでも長生きをしていただき、ぜひ再度お会いし、またお話を聞きたいものです。

この企画に協力いただいた語り部の皆様に感謝致します。ありがとうございました。

【注1】流域図・水質類型図



【注2】COD:化学的酸素要求量、BOD:生物学的化学的酸素要求量 いずれも水質の汚れを示す指標、大きいほど汚れている。河川の汚れはBODで表す。

【注3】生活環境の保全に関する(水質)環境基準 :河川

表. 生活環境の保全に関する(水質)環境基準

項目類型	利用目的の適応性	基準値				
		水素イオン濃度 (pH)	生物化学的酸素要求量 (BOD)	浮遊物質質量 (SS)	溶存酸素量 (DO)	大腸菌群数
AA	水道1級 自然環境保全及びA以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	1mg/L 以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	50MPN/ 100mL以下
A	水道2級 水産1級 水浴及びB以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	2mg/L 以下	25mg/L 以下	7.5mg/L 以上	1,000MPN/ 100mL以下
B	水道3級 水産2級 及びC以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	3mg/L 以下	25mg/L 以下	5mg/L 以上	5,000MPN/ 100mL以下
C	水産3級 工業用水1級及びD以下の欄に掲げるもの	6.5以上 8.5以下	5mg/L 以下	50mg/L 以下	5mg/L 以上	—
D	工業用水2級 農業用水 及びEの欄に掲げるもの	6.0以上 8.5以下	8mg/L 以下	100mg/L 以下	2mg/L 以上	—
E	工業用水3級 環境保全	6.0以上 8.5以下	10mg/L 以下	ごみ等の浮遊が認められないこと。	2mg/L 以上	—

【注4】河床に落差があって魚などが上流に登れない場合魚が遡上できるようにする階段、1種の近自然工法

犬飼 一夫さん

ヒアリング日:2018.2.16

【プロフィール】

昭和6年12月生まれ、名古屋市市中川区下之一色町在住。庄内川と新川に挟まれたかつて大きな漁師町だった下之一色町で代々漁を生業とする家に長男として生まれる。昭和38年に防潮堤建設工事による漁業補償受け入れ漁業をやめる。その後は父親から受け継いだ漁業や当時の暮らしを下之一色最後の漁師として市博物館やビジターセンターで漁具や写真を展示し語り伝えている。



犬飼一夫さん

■代々漁師だということですが、漁業権放棄した昭和38年以降は漁業はしていないのですね。

生まれた時は親が漁師で、親子代々漁師やってたもんで。止めてしまっ。あとは会社勤めして、会社休みにグループで固まって遊びで魚捕まえてやっと思った。

2年ぐらい前(今なら5年前)まで遊びの船でやりおったけどな。沖、名古屋港の中や。まだ島あるで、そういう中洲…。岸壁の浅瀬やそういうところで、ちょこちょこそういうところで、石が残るととこで、のぼって貝なんか捕る。

■漁師のお父さんから昔はもっとよかったという話を聞かれたことはありませんか？

あまり、聞かなんだな。うちは、おやじの親が、下之一色で一番難儀をした。長生きをした。昭和34年伊勢湾台風の年に死んでいる。自分は覚えがあるで。おやじは昭和63年の4月23日に亡くなった。

■犬飼さんが漁師を止める前におじいさんは亡くなられたのですか。ご兄弟は7人という話でしたが、漁師をされたのは？

弟と二人。すぐ下の弟と俺と親父と三人、一緒だわ。

■これまでどんな漁をされてきたのですか？

親父の若い時分は、「川建網」「刺し網」って言って、庄内川、日光川専門で、網張って、魚をとってたわな。

■川建網が3つあって、庄内川全幅いっぱい張って、庄内川全部閉め切る。一人二人では無理ですね。

シラオオを獲る網だ。広げたら網3つで全部。細かい魚はなんでも入る。結構捕れとるわな。大きな網だ。そんなもんあるだろーな。3網張ると庄内川いっぱいになってまうね。業者はくじ引いて先に乗る。ええとこを先に取りに行くわけだわな。市場に出していたわな。

■犬飼さんが漁業で得意だったのは何漁でしたか？

最後に3枚網【注】に行きよったけどな。そういう張り切りの奴と違って、背の高いので、写真あると思うがな。網でとりまわしてまっ、竿でぼったる(追う)と、かかった魚の重さで網が下がる。

■3枚網を操るのが得意で、よく捕れたのですか。3枚網を誰がやっていいか、くじで決めるとか、権利があるんですか？

一色で5杯まで出来ただけだ。5隻がやっていた。許可書は、県の許可書が必要で組合の推薦で決まる。

■3枚網もそうですけど、網は自分で編まれていたのですか。網屋のMさんをご存知ですか？

あそこで網を買ってたわな。ナイロンの網が出来たのでそれ(1反、150メートルの網)が出来た。

使ったもんで、一反もんを買ってきて自分で作るんだ。それでナイロンの色を白網より染めたらーと思って、いろんな色で染めたわ。そしたら、赤一番、無難。他の水の色と一緒に水色に染めても、やっぱり、水の中に入れると黒い。赤は一番無色に近い。

■長良川の河口の漁師さんが、刺し網で獲れることがあるのですが、これまでにサツキマスって捕ったことがありますか？たまにこういう網に掛かったりしませんでしたか？

時による。一年に、5回か、6回。取っとうることあるな。海で。一日に2匹も、3匹も捕まるのではなくて、たまに一匹

ずつ捕まえた。今日一匹捕まえたって。船に保管して、一匹だけで売りよった。

■名古屋市の博物館に、犬飼さんのおもちになった漁具とかが展示してありまして、一写真を見ながら一ここにある、凄く大きな竹製のジョレンって言うんですか、こんなん身の丈よりもでっかいのをどうやって使ったんですか？

人間で引く張ってやったな。まんだ、船の上からやりおったわな。棒がしっかりしている。船に備えつけて、それで舟でそのまま引くん。背の足らんとこは、みんな、あれだね。違うものでやる。さっき言った籠は、こういう船。昭和の始まりからとつとるで。

■シジミなんかはもっと上の方まで取れましたか？枇杷島ぐらいまで捕れたんでは？

あんだけ上まで捕りに行くとればな。俺は、シジミ採ってめし食ったこと無いでな。

■ビジターセンター前の飛行機を下す滑走路の先でかつて蛤が沢山とれたところと書いてありますが、いい知恵があったら教えてもらえないでしょうか。桑名の蛤買って生き延びるかどうか、3年間調べたのですが失敗しています。

貝でめし食ったことないでよ。漁師は下之一色でも25、26種類ある魚を専門、専門で。一人一人がみるが2種類、3種類あるわな。それ以上に道具がないわ。あれもこれも持ってるっていうのは。同じ漁師でも。シジミならシジミを専門に捕ってるとか、貝を専門でとってるとか。

■下之一色漁協は、沿海漁業っていうか沖合までというか伊勢湾の真ん中辺までは行かれたのですか？

沖合の権利のある所までは行ってるわ。野間まで。

■犬飼さんは何が専門だったんですか？

浮魚を捕ったり。浮き魚って言ったら、ボラとか、セイゴとか、中間に泳いでいる。それから世の中、あんまようなくなってきたら、魚は臭いとかなんとかなって、食わんようになってきて、エビや、貝を食べるようになってきて、野間の方まで行きよったわ。

■ボラとか、ズズキで生計を立てれるころがあったんですね。

高級品なもんであれば、尾張ではボラったら高級品でボラに醤油つけて、葬式があったって、人が集まったら一ボラ雑炊とか。今でも食ってるよ。

■ボラ雑炊、イナ饅頭とかありましたね。ボラは当時は臭かったでしょうね。

魚自体が臭い。臭い匂いはしとつたわな。魚そのものの匂いは違ってるで。ボラはボラの、セイゴはセイゴの匂いがするし、で、所によって相場が違うもんだで、ボラは尾張地方では有名なもんだで、不思議にいくらでも売れとつた。

■他の魚はどうでしたか？

コハダなんかを捕まえるとき秋になると名古屋では売れえせん、東京へ行くときコハダは売れる。下之一色では鉄道が無いで、扱う商人もおらんで、四日市に駅と港がくっついてるもんだで、四日市で水揚げして、東京へ送りよった。

■名古屋からではなく、四日市経由ですか？

四日市の富田浜。

■下之一色魚市場に水揚げされる魚ってのは、どういうものが多かったんですか？

地元で捕ったボラ、マダカ、エビ、カニ、貝類等のほかに熊野や遠州灘から時々運んでくる船があった。

■下之一色から漁に出て、場合によっては四日市に水揚げして、またここに帰ってくるという感じですよ。加工から、なんでもやる町ですね。

どんな魚でも。

■この写真を見ると海苔の養殖やカキの養殖をしているようですが、なぜダメになったんですか？海苔は立派に育てていたのですか？

高潮防波堤と埋立てによりだめになっただけで、それまではできとつた。

■カキも皆さんが補償をもらってやめる前まではやっていたのですか？

うん。補償をもらうまではやっていた。年2回ほど、このカキは杭を打っていただけだって。その代わり養殖は昔からやってあって、古いわな。カキは海苔より古い。自分の家から、代からやっているわな。

■種はやっぱり三陸から持ってくるのですか。

三陸から持ってきたり、自生のものを使い、土管の中で育てる、土管が転がらないよう杭で止める。

■鰻の話聞かせてください。クロコウナギが西枇杷島あたりに結構いるんです。網に入るんです。下之一色ではウナギのシラスの漁をやった人はいなかったのですか？

いや、おらん。専業ではおらん。夜になると出てる。明かりをつけてやるわな。

■昔、ウナギはあんまり獲らなかつたんですか？

いや、おらん。専業ではおらん。夜になると出てる。明かりをつけてやるわな。

■昔はこの辺でも自家消費として家に持って帰って食べていたんでしょう。

今でも、夜になると釣りに今でも出てるぞ。どうしてるか知らんけどな。ウナギはいろんなもんで捕まえとるわな。いろんな道具でのやり方あるわな。

■職業としての漁として捕ったのは別として、今言ったように自分たちで食べるような目的で庄内川や新川で。

おもしれーで。

■ほかに何か捕ったものはありますか。例えばハゼはどうでしたか？

ハゼもやったな。甘露煮にして食べる。ハゼなんか庄内川の水でええような気がするがあれが、庄内川におらんようになってきちゃったで。

■海苔ができるということは、庄内川は昔は汚くなくなつたということですよな。

戦後しばらくは、下之一色にも造り酒屋もあった。庄内川の水汲んで、庄内川の水で造り酒屋があったって。

■犬飼さんはここで泳いだことはありますか？

今の新川では泳ぐと親父が学校で叱られよったわ。学校が止めとったわ。新川は水が汚いで。庄内川は黙認しとったわ。

■いつ頃まで庄内川で泳ぎましたか？

学校以来だもんで終戦後しばらくまでだな。

■【写真を見て】すごい写真ですね。水泳してる。昭和2年は立派に泳げたんですね。飛び込み台もこしらえて…。これが庄内川だ。松蔭公園。昭和の始まりは水は良かったで。

■庄内川の水、どう思われます？新川の上流、真つ黒な水が流れていましたよね。あれは戦前からそうなんですか？

戦争中は、良かったわ。昭和26年ごろまで。庄内川の漁業組合としては、上で出た汚水は新川の方へ、新川は黙認して新川に流すようにしていた。

一方、庄内川は手を付けんようにしていた。庄内川に流さないように止めてまっ。いつまでも川を生かしておった訳だわ。組合の方で話して、組合と向こうと。

■昭和38年に皆さん陸(おか)へ上がられて、戦後すぐはきれいやったと聞いてますけど、昭和27年頃に王子製紙が来たんですね。それから10年ぐらいかけて徐々に生産量が上がって行って、王子製紙の水も汚くなっていったと聞いてますが、37年頃までは王子製紙の排水も少ないので、魚も食べてましたか？

庄内川の水は魚を食べんようにしていた。そんなことにならん前から徐々に悪るなってるで。魚は徐々にワヤだった。全体的に食わなんだ。

■庄内川で捕れた魚は売れなかつたっておっしゃってましたね。

そりゃー。やっぱり捕れたところが分かれば誰も買えせん。

■やっぱり、汚い川だという意識があったんですかね？
皆さん貧乏している時代でも。

うん、ま、とにかく名古屋港の魚はうん。金出して食う
気にはなっとらんわな。

■伊勢湾台風のと、名古屋港整備するために漁業
が続けられないということで漁業補償を受け漁業権を
放棄し漁を止めた。その時期王子製紙の生産量が上
がり、水が汚くなったと聞いています。その頃の庄内川
の水質について教えてください。

昭和44年なら一番汚いとき、昭和36、37年まではよか
った。38年からやめることになっていっぺんに真っ白に
なってきた。あの水になった。漁師が切り上げたらあーな
った。

■漁を止めず続けておいたらよかったのでは。にらみ
がきいていたのでは？よく似た東京湾ではまだ漁業を
まだやっているでしょう。

うん、まだやっている。東京の地形とほんとによう似て
いるだわ。遠浅のところ、一番奥が遠浅になっておっ
て、東京湾でも、三番瀬の方は。

■昔から庄内川本川には漁協ってなかったですか？よ
その川にはありますよね。

庄内川だけはない。川を管理してたのは、組合でやっ
とただけだ。アユなんか、商売でしてる人もなかった
わな。

■回遊魚だから下之一色は通過しているだけですか
らね。

アユが庄内川、下之一色の方から上って行ってる。下之
一色の漁師でアユ捕まえて商売してる奴は一人もいな
い。川を上ること知らんわ。商売になるほど捕まらん。そん
なにぎょうさん上らんでな。商売で捕まえるのはおらん
でな。

■僕らがアユの友釣り大会始めて7年目で初めて今年
上流の高蔵寺でアユが6匹釣れました。(今年：2017年
のこと)

漁師やってる時分、アユが川を上っているって知らな

んだ。最近、新聞に出てるもんだで。

■ここ最近、河口や藤前で生息魚種や数が減ってきて
いると感じていませんか？

この河口に、魚は平均に減ったな。ここ10年ばっかの
間に、ぐっと減ってきているな。昔、藤前でも、いろんな種
類以上の魚がおったが、だんだん少くなったな。捕る方
法を変えても、変えてもだ。

■水は目で見た水はよくなったけれど、やっぱり減って
いると感じておられるのですね。

一概に言えんしな。その年によって、水のええ年だつた
ら回遊している魚がおったり、全然おらん年があったり。

■愛知県海苔もさんざんでしょ。アサリがもう駄目
になったし今後どうなるでしょうか？

昔と違って海苔養殖は元手がかかって、便利もような
ったけど元手がかかる。愛知県のアサリは去年からだ
たではなかったかな。

■この辺って、名古屋港で昔アサリって取れましたか？

はー、今でも残ってる場所は残るとる。ちょっとした
瀬があるだけで、砂浜、大きな浜辺になっとらせんか。

■【資料or写真を見ながら】これじゃないですか。アユ
の道探として、このふち沿いずーっと。ここに洲がつい
とって。この辺には砂浜ある。

いろんな魚、捕まえたな。

■ぐるっと名古屋市を取り囲んでいるこんな川が、魚は
おるけど獲った魚が食べないというかにも残念です。
ずいぶんいろんなことをされてきて感慨ひとしおかも
しませんが、今後どうしたらいいと思いますか？

あれ、どういうだ、庄内川で生えとるヨシだとか、草だ
とかそんなもんをもっと大事にして、採って商売にしよう
な、どうだか。それを野放図にしてるところがあるんで、庄
内川は。

■ヨシや草は確かに水を浄化するけども、枯れたまま
ほっておくと溶けてしまう。草とかヨシは刈りだして焼き

だして灰は畑へ。そうしないと水質の浄化にはならないとおっしゃっていると思います。

そういう。県の方から許可書もらって、注意しにくる人が、あるわな。

■犬飼さんがおっしゃっているのは、ヨシを残しておいた方がいい？ヨシをもっと生やせでしたか？

生やせじゃなくてね…。刈る時期を考えなくっては。

■監視役というか、ヨシを刈る運動をしている人がいます、これから本格的に、やっていこうかということになってるみたいです。

そこに笛がある、そこに。これに腰に浸して。これ今年、琵琶湖から。琵琶湖の方ではこうして使ってるのはヨシだね。(琵琶湖の葦で作った笛がお宅にあったので吹いてみました。

■庄内川でいろいろ活動していますが、昔の庄内川はまだまだよく分かりません。知っている人は本当にどんどん減ってきてしまい、お友達とか、俺の後輩とか、話を聞いてやってくれという人はいませんか？

おらん。みんな死んじまったで。結局よ、自分が頭で船を動かした人間じゃないと、肝心なことはわからんだわな。親について行っただけの人間ではよ。

【注】底刺し網の一種で、いろいろなサイズの魚を捕ることができる漁具、中央には内網があり内網(小目)を両方から挟むように外網(大目)があるため、魚が外網を通り内網で抜けられず魚がかかる構造

大石 正司さん

ヒアリング日:2018.3.28

【プロフィール】

小牧市在住。生年月日と生誕地は昭和15年7月20日、大阪市大淀区梅田駅裏の造り酒屋に生まれた。戦時中は母の実家富山に疎開した。父は戦争に行かず三菱重工富山工場に勤める。ついて名古屋の三菱重工に転勤した。私が6歳の時でその後大須小学校に通う。名古屋港管理組合の職員となる。60歳で定年退職し、外郭団体の水族館の無料休憩所に再雇用され68歳で2度目の退職をした。



大石正司さん

■矢田・庄内川をきれいにする会との付き合いは？

名古屋港職員労働組合書記長で「名古屋港を考える会」事務局長のOさんが矢田・庄内川をきれいにする会の丹羽会長（初代会長）に春闘学習会の講師をお願いをして話をしてもらった。私たちは、今まで自分たちの利害だけを考えて行動してきたが、話を聞いて目からうろこが落ちた。これからは公務員として奉仕の精神で、子供たちの未来のために市民の立場になって活動しようと決意した。地域に出て行って、地域の人たちの問題を一緒になって考える行動をし、名古屋港を考える会の中で活かして行った。それでも丹羽会長を呼んで話を聞くといつも叱咤激励された。春闘の時や選挙の時に協力してくれと言いながら、終わったら住民には何の返答もないと・・・。

庄内川まつり（釣り大会）の最初からずーっとお付き合いしてきた。庄内川まつりに寄付して参加、また庄内川で筏下りの費用を出して参加（30数年前）した。王子製紙にトイレットペーパーを1円上乘せした価格で売り、その金で排水をきれいにする処理場を作れと一緒に運動した。しかし、世の中が豊かになり組合も政党もダメになった。

■このあたりが一斉行動デーの始まりですか。

そうだね。

■川や海の魚を犠牲にして豊かになった。それを反省

しないといけない。筏下りはどうしてやめになったのですか。

川底が上がってきたことや些細な事故があったりした。

■今我々は一斉行動デーで、庄内川や名古屋港の水質や環境について意見を言ってきているのですが、名古屋港管理組合は、港湾の開発が主で環境には無関心のようです。管理組合として環境についてどのように取り組んでいるのですか。

「名古屋港を考える会」があったときは、きれいにしないといけないとヘドロを調査したり浄化するための船も用意して取り組んでいた。会がなくなってそのようなこともやっていない。

■名古屋港を考える会はどのようにしてできたのですか。

自治労の働きかけで名古屋港や中川運河をきれいにする目的で、名古屋大学のN先生が会長になり、自治労の名古屋ブロックには4つの労働組合（港職労・名古屋市職労・名水労・学事労）があって、それぞれの単組が1課題を定めて住民運動を”立ち上げた”。私たちのころは、組合員が支えてくれて活動ができた。昨今は会もなくなり、はっきりした目的もなく、組合員に還元するものもなくなった。

■庄内川・新川から港へ汚水が流れ込みますね。

川から海にかけての活動がなくなった。

■環境基準を上げようという運動、エスチュアリー（河口の汽水域）としての大切など、そこを一緒にきれいにしようという運動の協働の相手はいませんか。

・・・。辻さんたちがやっていた藤前干潟をきれいにする運動にも協力するように要請してきた。

■名古屋港の水質などの時代の変化はどう感じていますか。

魚が臭いというのは王子製紙ができてから。以前はぜんぜん臭くなかった。釣りでいろいろな川に行くけど、その頃の庄内川の昔のイメージは他のきれいな川とほとんど変わらんもね。水質そのものは。

■陶土規制のせいでしょうか…。

矢田・庄内川をきれいにする会の魚釣り大会には最初から参加している。最初のころはヘドロがあり汚くて臭かった。

■汚い川での魚釣り大会にどうして参加しましたか。

名古屋港を考える会の事務局長になったので担当として丹羽さんに会いに来た。

■王子製紙は港に工場を建てる計画もあったようですが…。

…。

■東海製鉄の温排水については？

感知していない…。

■日間賀島漁協の青年グループが、名古屋港で魚を捕ってくれましたよね。

防潮堤の内側に漁船を出してくれて魚を取った。どんな魚がいるかまた捕った魚を焼いて市民に食べてもらった。ボラは腹を裂くと黒くて臭かった。35年前だけど3年間くらいやった。

■そんな前にやっていたのですか。どうしてやめたんですか？

Sさんという人が中心になってやってくれたが心臓病で亡くなった。Sさんには弟がいた。

■その弟さんに会いに行つて当時の事を聞きたい。一緒に活動を復活させたい。藤前干潟の二枚貝調査に参加しないか名古屋港管理組合に要望したいと思います。

…。私たちが名古屋港を考える会で活動していたころは、リーダーのO書記長がしっかりしていた。活動提案を本山市長が受け入れ、名古屋港管理組合に回していた。

しかし今はない。

■「公害」と『環境』とでは市民の受け取り方が違うように思いますが。大石さんは魚釣りが好きですか。

食べるのを楽しみに海釣りはする。就職するときはどういう組織かわからなかったが名古屋港管理組合に勤めて、楽しく働き、いい人生を送らせてもらった。

■ほかの人の川の話と変わっていましたが良かったです。ありがとうございます。

体をいたわって元気に末永くやりましょう。

(故)鹿鷹 清光さん

ヒアリング日:2018.2.20

【プロフィール】

昭和14年生まれ。庄内川橋近くの名古屋市西区稲生町で息子の武人さんと理髪店を経営。子どものころから庄内川で泳いだり、魚を捕ったりした経験が豊富。アユ釣りが趣味で岐阜県長良川の郡上に毎年通っていた。矢田・庄内川をきれいにする会が開催した第4回庄内川天然アユ釣り大会(2014年9月15日)にも参加し、大きなアユを捕り逃がした話で会場を大いに盛りあげた。

鹿鷹 武人さん

【プロフィール】

清光さんの息子さん。家の前を流れる庄内川で泳いだり、釣りをした経験が豊富。



鹿鷹清光さん(左)と鹿鷹武人さん(右)

■清光さんの生い立ちと、現在経営されている散髪屋のことを教えてください。

香春町で生まれた。その頃の香春町はタカラ町と言った。7人兄弟の次男。散髪屋は昭和37年2月に自分が開業した。23歳の時、中卒で。大須のスケート場北側の常磐町へ7年間修行に行った。

【注】回答のメインは清光さんで、武人さんの発言は(武人さん)と表した。

■庄内川で遊んだ話を聞かせてください。

小さい時から地元で育った。終戦前後の昭和20年頃、小学校低学年から、夏は朝から晩まで川につかって遊んでいた。庄内(川)橋すぐ上手まで中堤防が伸びていた。ゴルフ場の関係で半分削ったみたいだけだね。中堤防にちょっとしたスペースがあって、夏には浄心あたりから海に行けない人がみんな庄内川に泳ぎに来た。

終戦前は泳いどって、艦載機に銃撃を受けた。川に飛び込んで反対側の土手に潜って逃げた。すると玉がパシパシと走るんだね。まともに殺すつもりで操縦していたのではなく、子どもを脅すためにやったんだと思う。笑っていて、その顔まで見えた。向こうはニターとしてね。頭すれすれまで低空飛行してきた。あそび心で機銃掃射したと思う。

■昭和20年頃の小田井堰堤付近の様子を教えてください。

堰堤はまだ何もできていなかった。矢田川の方は瀬戸との関係で少し濁っていた。庄内川はものすごくきれいだった。真っ白な砂地でとつてもきれいだった。水もものすごくきれいだった。ゴミがほとんどなかった。川の水を飲んでいた。水筒は持っていわずに。砂が真っ白い砂で、とつてもきれいだった。

北側は水深2~4mぐらいあった。橋の下は4mぐらいあった。橋げたは花崗岩で、水面より3~4m高かったからみんなそこから飛び込んで遊んだ。花崗岩の(橋げたの)底のほうにエビがたくさんいた。近くでミズをほって、テグスが昔は高かったので、普通の糸に竹藪で笹切ってきて、繫いで、テナガエビを釣った。

庄内川の底が砂だったので、泳いで上流に向かって踵でずーと砂をほると、スナグジ(カマツカ)が足の下にもぐりこんできた。たくさん棲んでいた。

■捕った魚やエビは食べていましたか?他の人たちはどうでしたか?

おおばあちゃん(曾祖母)は捕ったエビを食べるのがとつてもすきだった。おおばあちゃんは何でもよろこんで食べてた。まったく臭くなかった。

周りの人も、四つ手網で、コイ、ナマズ、ウナギをとっていた。あと、アユにそっくりなアイという魚がおった。アイはアユと形は似ているが、味がちがう。もつとおいしい。それをおおばあちゃんがいちばんよろこんだ。20cmより大きい。アユモドキとは違う。泳ぎがものすごく速い。竹の棒で水面をたたくと川のへちの草のところににげこむ。手でつかむ。よくとれた。

庄内(川)橋の下に、自然にごろた石がたくさんあって、(流れが)波打っていた。そこにたくさん付いていて、行くとサーと逃げる。ウナギもたくさん捕った。とくにシラスウナギ、メソね。てぬぐいで掬えるほどいた。

昭和37年ころから海を見ていたが汚くて臭いもしていた。昭和50年ころからきれいになってきた。昭和51〜2年ころ透明度もよくなってきた。

■庄内川の水が悪くなり始めたと感じたのはいつごろですか？

中学の頃、昭和27、8年の頃はまだきれいだった。中学出てからは、ほとんど庄内川とは縁が切れちゃった。

臭いがついたのは王子製紙の関係の廃液だね。大気の臭いではなく、水の臭い。一時は小田井の堰の下は泡だらけだった。

昭和50年ごろにまた川を見るようになったが、印象はだいぶ変わったね。汚れがひどかった。

■昭和50年頃は泳いでいましたか？

庄内川がきれいなころはすごい人が水泳に来た。水泳場みたい。堤防という堤防にアイスクリーム屋さんならんだ。一本3円だった。この辺はとくにきれいだった。海水浴に行かずに、庄内(川)橋へきた。砂がだんだん埋まって、泥底になったんだね。

最近はお田井へんでも泥が流れて砂がでてきた。だいぶん浄化されたのかね。魚は庄内川より矢田川のほうが多かった。少し汚れたほうが魚には棲みやすいのかね。いまの洗堰ね、あそこはふしぎと川底が粘土質だった。お尻をつくつと滑り台に乗っているようだった。洗堰がまだきっちりしたものはなかった。護岸はまだしてなかった。粘土層が出ていた。滑り台のかわりになるのでよく遊びに行った。

[武人さん]

僕は小田井で泳いでいました。泡の中で泳いでいた。一緒に泳いでいる友達もいた。

■庄内川に漁業協同組合があったと聞きましたが・・・

庄内川のこの近辺には組合はなかった。僕の親類でひとまわり大きな四手網でコイを捕っている人がいた。

今生きていれば100歳越えている。使っていた四手網は2〜3倍の大きさ、一辺2mぐらい。3名ぐらいでいきなされた。

■息子さんはよく釣りをしていましたか？

[武人さん]

ライギョ釣り、当時友人と一日10本ぐらい釣ったこともあった。今はそんなにいない。

当時フナが多かった。エサになっていた。いまはフナがいない。吸い込み釣りするとフナがたくさん釣れたけど、当時コイはなかなか釣れなかった。

ライギョは多かった。釣ったライギョは逃がしていた。食べてはいなかった。ルアーブームだった。(昭和)54年頃。毎週末は庄内川でライギョ釣り。中州に並んで堰に向けてルアーを投げていた。ルアーが高価だったので、引っかかるのと水に入って取りにいっていた。フナ釣のおじさんはライギョが釣れると殺していた。

今はスズキがよく遡上してくる。大きいのは70cmぐらいまでである。アユの遡上と一緒に上がってくる。

■昔のアユ釣りの話を聞かせてください。

庄内川橋のあたりではアユ釣りしている人はいなかった。堰の下にゴロタがあるのでアユはいたはずだけど、だれも釣りはしていなかった。すれば釣れたはず。

長良川は毎週行っているが、去年は例年にくらべて天然アユがたくさんいた。小さいアユ。後半、お盆過ぎに釣れ始める。毎週郡上に行く。昔は和歌山の日高川、日置川、古座川なんかも遠征していたけれどもね。

■アユの遡上について知っていることがあれば教えてください。

アユは条件が悪いと上へのぼる。帯状になってのぼってくる。上るときは右岸をのぼる。どこの川でも右岸。左岸は全然上らない。

それは自然現象で、アユは右岸を遡上する。長良川でも右岸をまっすぐのぼってくる。くだりは逆に左岸を下る。昔からアユで生活してきた漁師がそう言っている。どこの河川でもいっしょ。左岸で投網を打っても遡上してくるアユが捕れないはず。左岸から遡上してきたという話はまじり聞いたことがない。ヤナで権利を取るのは左岸側。三重県の櫛田川漁業でも右岸で捕って上へ運んでいる。

■昨年のアユ釣り大会でアユが6尾釣れました。庄内川のアユ釣り大会にもぜひ参加してください。

日曜日にはなかなかいけな。庄内川では、定光寺の

すぐ上手の大きな堰堤、あそこがアユ止まりだね。

定光寺の橋の上下流がいい。庄内川のアユ釣り大会ではアユを掛けただけけれど、とり込めなかった。大きすぎた。はじめ掛かった時はコイかと思った。やりとりして、アユだと判った。タモに入れる時に逃げた。

月、火曜日であれば参加できる。岐阜県世界アユ友釣り大会は平成元年から10年間続いた。第4回、第7回で優勝した。第2回は3位入賞した。ゼッケンナンバーNo.1をもらったことがある。愛知県内水面漁連から愛知代表で頑張ってくれと言われていた。

地元の人が、(アユ釣り大会の本部を設営しているところは)ウが大群で来るので、だめだと言っていた。カワウがいると食っちゃうからね。いままでは名城の堀の近辺でカワウがうろついていた。いまは小魚を捕れる場所を見つけたのか、飛んできるとね。アユ漁師はカワウを撃退するためにカワウを首吊りにしてつるす。あれやると絶対来ん。鉄砲を撃つより効く。

[武人さん]

最近カワウが多い。小田井の堰の下なんかもすごい。

■お父さんから庄内川について何か話を聞いたことはないですか？

親父はあまり川に親しんでいなかった。(私が)川に行くのと弟がついてきてしまう。弟はカナヅチで、水に突き落とすと泳げない。家に帰ると唇を真っ青にしているので、仕事から帰ったおやじに「また連れていったのか」とビンタされた。

■学校では川に行くことを禁じられていませんか？

音楽のときに、みんな音楽が嫌だったので「格闘ごっこいぞ」といって、男全員で庄内川の堤防までいって、堤防の草の上に服を脱いで、飛び込んで、庄内川で泳いで帰っていた。一番怖い先生に廊下に並ばされて、本で叩かれた。

川の事故は1回だけあった。昭和26年頃。下級生だけれども。庄内川に行く途中で矢田川があり、濁りがあるけれども川から飛び込んでしまう。そうすると杭があって、そこに腹を。庄内橋自動車学校のコースのど真ん中あたり。深かったので海水パンツ一つで走って飛び込みたが。飛び込んだ時に腹に刺さった。(岸から水面まで)2mぐらいの高さがあった。濁っていて杭があることを忘れちゃったんだね。今

ならたいへんなことになる。

■ボート屋さんがあったと聞きましたか？

ボート屋さんは、庄内川橋の100mほど上手、7、8隻ほどあったが、客が少なかったのですね。橋の下は4mぐらいの深さがあった。堰はまだなかった。

だいたい橋の下手まで行って、ぐるっともどってくる。手漕ぎボート。あそびのボート。弟に時計をかしたら、ボートから川に落としてきちゃった。(ボート屋さんがあったのは)昭和35、6年頃。

■昔の庄内川橋はどのような橋でしたか？

赤い橋。山が2つあった。上からだいたいぶん高いわね、水面までは。その橋げたの下だけ、深かった。いちばん北側が飛び込みにむいていた。そこが4mあった。

[武人さん]

右岸側の魚道は昔だけの階段だった。下がえぐれていて、2mぐらいの深さがあったと思う。背が立たなかった。潜って石を拾ってくる遊びをしていた。

■昔と比べて水の量はどうですか？

堰ができたために淀んでしまったけれども、水量は今の方がちょっと深めになっているよう。ぼくらの小さい頃は、河岸から徐々に深くなって、北側に行くほど深く背が立たない。向こうで泳ぐ子はいなかった。みんな真ん中より手前で泳いでいた。泳ぎの上級者だけが橋げたのところまで泳いでいた。

■上下流はどの辺まで遊びに行ったりしましたか？

上流は、龍泉寺までは遊びに行った。下流はハゼ釣りに、庄内堤防を自転車ですーと下って、その頃は自転車1台分ぐらいの幅しかなかった、草ぼうぼうで。一色まで行った。5〜6人でよく釣りに行った。(ハゼは)食べたと思う。

■貝拾いはしましたか？

シジミは庄内川にほとんどいなかった。新川にはいた。新川はドウピン(ドブガイ?)がたくさんいた。カラス貝みたいな大きな貝。特に、平田橋上流。あのへんで。塩水はあそこまでは、どうだろうね。矢田川にはシジミがたくさん

いた。マジミだね。昔は潜って、泥の中を探るとシジミがいた。あまり持って帰った記憶がない。

■サツキマスは見たことがありますか？矢田川にもアマゴがいたという人もいますが。

上(流)のほうはもともと天然だろうね。サツキマスはみたことがない。だいたい長良川でシラメを放流すると、斑点がないやつ、銀毛したやつ、あれが降海性で降りていて、次の年に帰ってくるみたい。

[武人さん]

92歳になるアユのガリ釣り名人のIさんは小田井堰堤の下で投網でサツキマスを2尾捕った人を見たことがあると言っていた。5～6年前か、もう少し前の話。

■庄内川に昔いたけれど、今はあまり見ないという魚がいれば教えてください？

昔洗堰のすぐ左側に溜まり池があって、昔チョウセンキンギョと言っていた、ちょっと熱帯魚みたいな。それもおらんようになったけど、縦縞があって、金魚の品種ではない、小さいミズを付けて釣るとよく釣れた。色は七色、ブルーギルではない。そんなのはおったね。庄内川でほんとうに多かったのはスナクジ。うまいんじゃないかね。身がころころ取れておいしいんじゃないかね。

■庄内川の今後について思うところがあれば聞かせてください。

庄内川の堰の下にゴロタ石を入れてもらったら、アユがたくさん付くはず、何年かかるかわからないが、堰堤の真下に石がたくさん入っていた。

■矢田川の成願寺の堰堤の下にも玉石がありますね。

むかし一本橋があったところ、下に淵があってモロコがうじゃうじゃおった。今は淵はなくなった。一本橋を自転車で渡っていてよく川に落ちたりした。大きな石は埋まってるはず。下を2m程掘ると石が出てくると思う。

庄内川もだいたい砂地が戻ってきたね。ぼくら小さい頃は庄内(川)橋の右岸の堤防から手を洗えるぐらい水が出た。2回ほどでた。大きな材木がぶつかってね。あの頃は材木が欲しいので、消防団の若い連中が庄内(川)橋からロープ付けて飛び込んで、流れてきた材木にひっ

かけて。消防団が飛び込むから、飼い犬まで飛び込んで、枇杷島近辺まで流されて、ずっと追いかけて名前読んだら(岸に)たどり着いたもんね。

■今後、庄内川がどのような川になってほしいですか。

小さい子どもが、遠くへ行かなくても、近くの川で遊べるようになればいいね。今「よい子はここで遊ばない」と書いてある。逆だね。「よい子はここで遊びましょう」にしたいね。

矢田川は今澄んで、浅くて、子どもを遊ばしておけば、水の事故なんてほとんど起きないだろうし。漁具でちょっと魚捕って、観察して、自然を教えるといちばんいいだろうけどね。

[武人さん]

今は子どもを連れていくと危ないから、と言われる。僕らの時は行っちゃだめと言われても行ったけど、今は行っちゃいかんという、行かない。先日、庄内川で泳いでいる中学生がいた。嬉しくなった。

加藤 剛之さん

【プロフィール】
昭和34年生まれ。玉野御嶽神社の神主。

小林 鉦年さん

【プロフィール】
昭和17年生まれの76歳。生まれてから昭和35年頃まで玉野に居住し、庄内川で魚捕りや水遊びをした経験が豊富。その後、名古屋に一時転居したが、50年ほど前に玉野に戻り、電気工事の仕事をしていた。



加藤剛之さん(左)と小林鉦年さん(右)

■庄内川をきれいにする運動で「昔のようなきれいな川にしる」と言っているが、実は昔はどうだったかあまりよくわかっていません。昔の庄内川の話聞かせてください。

昔は本当にきれいだっただ。泳いだし、魚も捕った。千歳(楼)の下段に大きなウケをかけて、KTさんの漁場で捕った。飼野の鹿乗橋のほうでもKMという人が三本松から下ったホテルの裏の辺りや鹹川のどこにもヤナをかけた。こっちの方の漁業組合は発電所の水路の落とし口でもヤナをかけた。

やなとウケは竹の大きいので川の流れるところにボーンとかけて、普通の落ちアユみたいな優しいものではないよ、一網打尽に捕る。ウケで受けてコイとかも捕る。

ヒノキのこんなやつを2本、岩にかけてここに組む。その間に竹をパターンと割って落としてダダッと渡して一番元のところを石をドドッとようけ落として、そうすると水はザーッと落ちる。

木曾川でも、上流へ行くとかヤナ場かけるけど。こちらは千歳(楼)の下のほうでは流れの落ちるところで上から落ちてくる30cmぐらいの魚を、2~3mあるようなウケを造って捕る。コイやウナギ、ナマズとかが捕れた。

自分はヤナはやらなかった。こちらはナガオとか一本釣りをやった。ナガオとは10mくらいある仕掛けで、返しのあるウナギ針を結んだ30cmぐらいの一本針を桶に入

ヒアリング日:2018.3.30

れて持って行って、現場で結んで、ヒルか、大黒メメ(ミズ)を餌にする。ちょうどフジの花が咲くころから始める。水がぬるむころだ。ナガオには20本ぐらい針を付けて、元はこれくらいの石に縛る。上に行って、糸がまわって引っかからないようにズーッと上に持って行って、川向うに石を投げ、川を横切るようにナガオを入れる。投げるほうは小さい石。夕方仕込んで明るる朝取りに行く。岩の上に置いてある石を外してズーッと辿るとウナギとナマズなんかがかかっている。うちはホテルの上、三本松のあるところから発電所の下まで。あとここから上は二軒屋の方、飼野の方はここから三本松までが、暗黙の内に漁場になっていた。仲間内のなわばりができている。

■その3か所を教えてください。[地図を広げて]…これが城嶺橋、これが堰堤です。

これが発電所か。グーと曲がってこの辺りが三本松で、この辺りから飼野のコウノベ荘の下から降りてくる、飼野の連中が。鹹川が合流しているここでも漁師がいて漁をしていた。三本松から城嶺橋のちょっと上まで。友八さんがやるのは千歳(楼)の下でヤナ。発電所でもヤナをかけた。発電所はあくまでも玉野側だ。ナガオや一本針は橋から発電所の下までにかける。ナガオは飼野の方の三本松から下の鹿乗橋の上からズーッとこっち。三本松から発電所の下はうちらで、それから向こうは二軒屋のメンバーが1本針をかけていた。

■いつ頃まで漁をやっていましたか。

中学生のころだ。今76歳になるから45~50年前まではやっていた。投網の鑑札も持っていた。個人的には昭和34、35年までやっていた。それからはこっちに居らなんだ。

このころはまだ汚いもんね。雨が降るとばーっと白く濁る、天気の良い日は眼鏡をかけて潜って、「ひっかけ」という仕掛けを使った。篠竹にウナギ針を2つ付けて一節目にくっと穴をあけこちへ出す。30cmのペロのこちに引っかかりをつける。グーと潜って、くっと引っかかるとひもが

30cmぬけてつかかると。アユなんか遊びの分でグッとくるもので、あげて、アユは流れのど真ん中を避けて岩のかどをよく上るもので、潜ってスーッと下がってくる。アユがおったなあと思うと上から1mくらい辺りからグッとひっかけ、ペロとかにかけける。発電所のところでよく潜ってやりおった。この漁を「ひっかけ」と言っていた。

当時¥1,000~1,500した木の鑑札を持っていた。まだ家にある。(鑑札は)大留の方から持ってくる人がいたよ。アユを放流している人がいた。飼野のお墓の少し上のところに砂浜があって、車を乗り入れて、樋かなんかで、アユの放流をしていたのを見た。放流するもんで金をとった。

■捕れていたアユは放流したアユですか？

アユには放流と、天然もあるんだよ。天然は下から上ってくるんだろうけど、名古屋の小田井の自動車学校の前の瀬や、定光寺の堰堤のどこでも瀬があったり、王子の上にも瀬があった。

魚道が作ってあれば上るだろうけど。多治見なんかで放流したやつがこっちに下ってきたりもするもんで。天然ものかどうか、いろいろあったんじゃないかな。

昔は川で泳いでいる時にアユが足をくすぐるほどたくさんいた。発電所の下のところ。アユなんか豊富におったよ。

■アユもたくさんいた時代があったのにどうして捕れなくなったのでしょうか？いつごろから水が悪くなったのでしょうか？

鯰川はウグイが墓の上の橋までたくさんいた。鯰川は今魚が1匹もない。あの頃はモロコやなんかをしょっちゅう釣りに行った。オイカワなんかもよくとれたよ。

それからアカハラ【注1】といって、ドウゼン【注2】みたいな、小さなドジョウみたいなもので、吸盤を持っていて、清流にしかいない。から揚げにするとうまい。サーと流れるところをチョチョッと上る。

アカハラはアカバラとも言っていた。ハゼの一種かな。20cmぐらいの大きなものもいた。ドウゼンはドジョウとは違う。ハゼみたいなもの。ムツゴロウみたいな感じの。20cmぐらいのもいたよ。おいしいんだ。カジカでもない。唐揚げにすると旨い、20cm級は二度揚げにする。ドジョウは2種いた。太くなるドジョウと小さいやつ。

魚がいなくなった原因は分からない。市民病院もできた、街もできてその排水がある。愛岐処分場もできた。原因となる可能性のある要素はいくらでもある。現に正月3が日はきれいだった。産廃の放置もあるだろう、しかし自分のところの土場はしっかり管理してほしい。世間は厳しくなった。水は知らんうちにきれいになった。昭和34年頃は潜っても水中が見えた。小学校のころはもうだめだ。それから白濁した。40年ころは全然ダメだった。見えるような状態ではなかった。

■鯰川にはやはりウグイが多かったのでしょうか？

おれは見たことがない。たくさんいたという話は聞いた。昭和の初めごろまではおったと思うよ。鯰川の河口に墓があった、その直上流に大きな落差があるが魚道がない。

そのまた上流にコメをつく水車小屋があった。お墓のすぐ横に石垣があってその横にたくさんいたそうだ。鯰川の上流もニュータウンになり、自衛隊の弾薬庫がある。前はきれいな水が流れていた。

■捕ったアユは食べていましたか？

もちろん食べていた。臭いとなって言っておられなかった、食うのが精いっぱい時代。贅沢言っておられない。アユの香りもよかった。昔は腹を出さなくても食べられた。

今はとても駄目で食えない。ウナギなんかも太かったよ。淵を潜っていると小さな穴がある。そういうところにドジョウをウナギ針にひっかけて、細い棒に縛っておいて、中に入れてウナギを釣る。

■ウナギやアユ以外に捕って食べていたものはありますか？

11月頃は毛ガニ(モクズガニ)が産卵のため一気に下る。下るときに夜に懐中電灯で探してよう食ったよ。旨かった。今はサワガニでもあまり見ない。2~3匹ぐらいだったら揚げて、スギの葉に乗せたりして酒のつまみにする。ぎょうさん食うとよ、虫がいるから腹をこわす。空揚げにしてから食うが、それでもだめなことがある。

■他にも昔のことを知っている方や、放流していた組合員はいませんか？

KMさんの息子のFさんがいる。発電所のすぐそばで

玉野ダンボールを経営している。前は飼野にいた。74歳か75歳だ。

放流はSさんがやってたけど。買い付けやなんかは行ったことがない。買い付けは滋賀県まで行ったんではないかな。トラックに積んで、バケツで流してた。放流は飼野の河原でしていた。Sさんはよく知っていた。でももう死んだ。

■庄内川漁協ではなく、玉野川漁協という組合が大正15年にできて、川地三郎さんという方が組合長だったそうです。そのご子息をご存知ありませんか？いわゆる川漁師がいたのではないのでしょうか？

川地さんが飼野に住んでいたなら、昭和の初めには何軒もなかったから、もともと飼野にいたFさんに聞けばわかると思う。第さんは漁をして、魚を自分のところでおっかーが焼いて鹿乗亭や白鹿なんかにドジョウなどを加工して出していた。

大水が出た時にヤナ場を見に行くと、ちょうど玉野のお墓があって、昔は土葬だったので、水が出たときなんかは下段の墓なんかよく洗われた。

鮎川から流れてくる水は庄内川への飲み込みが悪く、そこで水が回ってしまい下段の墓なんかよく洗われて、しょっちゅう墓の棺桶が半分見えたりした。川のすぐそばに墓があった。今は土葬ではないけれど。

■アユの友釣りをしますか？

めんどくさいのでやらない。一網打尽の方がいい。うちの前のEさんらは竹で作った竿でアユの友釣りをしていた。投網もしていた。

当時のものは、網はテグスでなく糸だったから柿渋を塗り、その上に卵白を塗った。そして竹竿に干しておく。水切りをよくするためだ。最近まで投網を打っていた。家にはまだ投網もあるし、テーナ(投げ刺し網)もある。鎖がついていて、投げると一直線になり、石なんかを投げると網目にアユが掛かる。最近では川で投網を打っているのを見たことがない。

投網の打ち方は肩に乗せて打つ方法もあるが、打ちにくいので口にくわえて投げるタイプである。

■食べるために魚を捕っていたのでしょうか？旅館などにも売っていたのですか？

Fさんの家系だけがそうだった。白鹿だとかにアユやシラハエを焼いて卸していた。Tさんが千歳(楼)の下で捕ったのを卸していた。Tさんは明治の36年か37年生まれ。生きていれば100歳越えている。

[加藤さん]

父が投網で捕ったアユを食べた。自分たちで食べる用に捕っていた。主に投網で捕っていた。

■鹿乗橋の上流にはどうやって下に降りていたのですか。

鹿乗橋上流はFさんのなわばり。生コン工場の駐車場のお墓のところから下へ降りていく道がある。あその辺の連中はみんなあそこで泳いでいた。

水野川の合流するあたりの対岸。おれらは愛岐道路へ渡る『岩割の瀬』の橋(玉野橋)を渡ってすぐ下に降りる所があり、えびす岩という岩があつておれらはそこで泳いでいた。

二軒屋の連中は発電所の放流口から上にある淀みから上流の定光寺に近いところで泳いでいた。プールもなんにもないので夏休みはみんな川で泳いだ。泳ぎ場は決まっていた。

小学校までは発電所の放水路、井桁と言っていたが、そこで泳いでいた。発電所の水が止まると予告があると、水路の石垣のところにウナギがいるので、いろいろ準備をする。水路をバケツでかいぼりして魚を捕った。

石灰をブリキのバケツに溶いてウナギのいる穴にぶつけるとウナギはキューキューと鳴いて出てくる。どこからあんな声が出るのかな。ウナギは水がなくなっても出てこないから石灰の水をかける。捕まえて田んぼの土手に投げる。S30年、中学生ぐらいのころ。井桁、農業用水の水も落ちる。

シラハエやフナなど小さい魚は水場に寄って来る。今のようにコンクリート水路でないから水たまりができるのでそこで捕まえた。

■最近では川で遊ぶとか、魚を捕ったりする人はいませんね。

親が止める。うちらはあそび場所がなかった。中学生ぐらいまで鹿乗橋で出店が出た。高蔵寺商店街で行事のセレモニーとして玉野川にスイカを流したのを拾ったことがある。定光寺の高岩なんかのガマは深くて、どえら

い大きなコイがいた。『岩割の瀬』の橋(玉野橋)のピアの脇はえぐれていて、大きなコイがいる。朝方、決まった時間にえさ場に移動する。コイは昔からたくさんいた。一時、雷魚もたくさんいて、鰻でついても皮が硬くて鰻が曲がった。食うものがないのでコイも食べていた。鯉コクとか、味噌と煮るとか。乳が出るとかで、そういうものしか食べるものがなかった。

■陶土規制のせいでしょうか・・・。

高蔵寺の玉(野)川劇場という芝居小屋があって、その入り口にKKさんがいて、そのおかあさんが網を編んで売っていた。

KTさんやKSさんは自分たちで網を編んでいた。独特の竹のへらで編む。中学生のころ失敬して竹を切って引きづって行って、それで魚籠にあたる腰かごを造ってもらった。

ウナギなんか食いついているとガマに入ってググっと引っ張る。多治見なんかで雨が降って増水すると針がなくなる。えらい損。高価な物だから。血を吸わないヒルがいる。缶詰の缶に入れておいてメメ(大黒ミズ)の代わりにえさにする。なかなか死なないのでいい。フジの咲く春先のまだ寒いころ、深く掘らなければならない。だからヒルを餌に使った。ウナギは生きたエサしか食わない。

■今後、川をどうしたいと思いますか?例えば水をもつときれいにして子孫に残したいとか。

トンネル保全をしているMさんも「瀬があるところで投網を打ちたい、協力してほしい」と言っている。KSさんは名古屋市の依頼で王子製紙のほうまで投網を打ちに行った。庄内川の魚類調査に協力していた。去年亡くなった。惜しまれる、生き字引だった。

【注1】婚姻色が出たウグイの地方名としてアカハラがあるが(梅村, 1993)、説明された特徴からするとウグイではない。

【注2】カマツカの地方名としてドウゼンがある。

(参考文献)

梅村尊二, 1993, 愛知の淡水魚類, 愛知県, 167pp.

加藤 登代子さん

ヒアリング日:2018.3.30

【プロフィール】

庄内川城嶺橋のたもとの應夢亭(おうむてい)の女将さん。昭和〇〇年生まれ。の女将さんは祖父が明治時代鉄道駅の定光寺駅を造るとき私財を投ずるなど孤軍奮闘され、少しでもお客を増やそうとこの商売を始められたことや戦後すぐは瀬戸へ行くのにも木炭車の省営バス(鉄道省のバス)に乗って行った、山を越すとき重いので乗客を降ろし男客が押したなどの話をしてくださいました。



應夢亭

■庄内川とともに暮らし、また庄内川を長く見て来た方とお伺いし、参りました。ところでこのお店では、庄内川の魚料理は。

ここで取った魚は、夏のアユです。私の小さい時ですが、アユは銀色に輝いていましたよ。

アユの大きさは子供の目ですから大きさはこれくらいでしたよ(20cm)。もう少し下の鹿乗橋のたもとで何処のおばあさんか知りませんが、シラハエを10匹位づつ串に刺して素焼きにして持ってみえました。それを甘辛く炊いて売っていた様ですよ。

■アユはここで捕ったのを買っていたのですか。

釣る人もいるし、投網を打つ人もいる。岩と岩の間にウケ(こんな大きな口で下がしぼんでいるもの、筒の様なもの。)を置いて、夕方になるとひっくり返して持ってみえました。ウナギの入る、小さな物もありましたね。

■アユはどのあたりで捕っていたのですか。ここに泊まるお客様で、釣りをする人はいましたか。

橋のちょっと上側の岩の間にウケを上手に入れていましたよ。

岩といえばお客様で、「子供の頃に遠足に来た事があるが、石や岩がもっと大きかった。」と言われる人がいますが、私は、変わっていないと思います。釣り客はなかったですね。

■ここで捕ったものを調理して出していたと言うことでですね。昔あった漁業協同組合から納入してもらっていたのですか。

いいえ、釣った方が買って来て直接持って来ましたね。その人たちは漁師ではなくお百姓をしていましたし、釣りは遊びだと思います。玉野・木附の方の方が多かったですね。

■アユ料理などいろいろお聞きします。その頃のアユと今のアユは違いますか。昔は美味しかったですか。

あのいい色をしたアユは美味しかったと思いますよ。アユを出さなくなったのはいつ頃からかという魚が臭くなったからというわけではなくアユを捕っていたおじいさんたちが歳を取ったとかいろいろでしょうね。

■そのアユは伊勢湾台風頃まではやってみえましたが。昭和34年?

もうちょっと早く無くなったんじゃないかな。今は、紀ノ川や四万十川、長良川のアユを中央市場から入っています。テレビを見ていると庄内川のアユは腹を出さないと思われませんかと言ってますね。

ここに住んでいても他の水系にアユを食べに行こうかと誘われますよ。庄内川の水がもう少しきれいになって、アユの腹を出さないでも食べられる様になって、アユでも釣っていくとかと少しでもお客様が増えればいいなと思います。

■この下流でアユの友釣り大会を6年間やっていて昨年初めて6匹釣れたのですよ。水質の改善もありますがアユの遡上など環境改善が進んでいます。ニュースでも放映されました。アユ釣りのファンは多くいつもお世話になっておりますので少しでもこの地域が盛り上がりませんかと思っています。アユ釣り大会をやり、ここで泊まってアユ談議をやるのはどうでしょうか。

友釣りですか。私の娘婿が釣り好きで、海に行くのでアユ釣りだったら近くで釣れると言ったら、娘がアユ竿は

高いんだよと言いましたよ。

■ウナギやコイはどうですか。この辺に貝はいますか。シジミとかドブガイとか。ここまで、ウナギが昇って来ますか。

うちはウナギは使っていますがこのウナギは使っていなかった。大きくなって油がのってグロテスクなので、お客様に出したことはないです。

子供たちが釣って、「おじいちゃん、買ってくれ」と来た事はあるだろうけどもらった事はありますがね。

「魚はいないでしょうね。」というお客様がいますが「コイならすごいのがいますよ。」と言うと「コイは泥水でも育つよ。」と言われました。

川魚はみなさんお嫌いですよ。アユは別としてクセがある。コイは洗いにして出すと美味しいんですけど、それに川魚を生で食べるとムシがいるからね。だから、コイは使っていません。

ここから恵那とか多治見の方に行くとコイとかアマゴなんかを養殖していますね。シジミとかドブガイとかは食べられると聞いた事はありますが。正伝池を掻い出した時にこんな貝(大きな貝)を多く見ました。

■女将さんは、ここで泳いで遊んだ事はありますか。一時は真っ白な水でしたでしょう。

夏休みは、毎日泳いでいましたよ。水がきれいでしたから。

真っ白い水の時、岩場はつるつる滑る様になってからは下へおりられなくなりました。表面に白いものがついていましたがあれはなんですかね。(シルトの様なもので、上流の陶磁器の材料?)

伊勢湾台風の時はやめていましたね。それより10年くらい前かな。戦後、すぐですね。恥ずかしくて行けなかったですね。(年齢もあるかも?)小学校では水泳禁止になりましたね。子供たちも泳がなくなりました。水が汚いからではなく、危ないからですね。

遠足に来た子供達も川の下において弁当を食べていましたから。ちょこちょこ事故があつてからは、この下へ下りる事はなくなりました。上の公園の広っぱで食べる様になりましたね。

■結構危ないですよ。私も潜りますが見えない所もある。この川に下りる時にそこ(下流側)の駐車から下りる所に階段ありますよね。上流側はどうやって下りていたのですか。

そうですね。この橋の真下では、大岩に登ってドボンと飛び込むことがありましたね。降りるところあったんですよ。家の駐車場下はどうぞうぞ下りられますよね。

城嶺橋から上流すぐの所にフェンス(ガードレール)の切れた所に階段があったのですが下の方が洗われちゃって今は下りられないですね。それから、家のもう少し向こうの方、玉川屋さんとその奥にIさんのお宅がありますがその真向かいにもう一つ階段の下りられる所がありました。近くに3箇所ありました。

■今、この付近では、泊まれる施設はここしかないですが、以前は他にもありましたか。

交通の便が悪い時はたくさんのお泊まりがありました。今は、瀬戸、多治見に来られたお客様も日帰りが多い。へたすると夕飯を食べて、新幹線を使って、東京・大阪まで帰られる方もみえますからね。お泊まりよりも食事だけのお客様が多いです。

定光寺の山号が応夢山だから名前を應夢亭とつけたいと定光寺の和尚様に言ったところ、良いと言われたのでつけました。

■今、昔の鉄道の跡が残っていて、ボランティアの人達が整備をして、それを見学に来る人達が増えたと言っているのですが、それによりこの食事をとりに来る方などお客様は増えていますか。観光を盛り上げようという動きはありますか。

うちは増えていません。食事の方は多少はね。歩かれる格好をしてみえる方はお弁当持ちですね。観光つとくにはないですね。今やってみえる方がわたしの年齢の前後の方で、跡取りさんは、ほとんど外へ出ているのでね。うちは子供が跡をやっています。家族経営が基本ですから何とか出来ています。

■庄内川の水質は全国的に見ても汚い方です。ワースト10です。今後、どの様になってほしいですか。

テレビ放送で白い川になってしまいました。当時は、白

くなっている事が景気がいいと言われていましたので、庄内川はこんな川だと思っていました、10位ですか。きれいになるのならそれに越したことはないと思います。この川でみんなが遊んでくれればいいと思います。

■このあたりに昔の庄内川を知っている人をご存知ではないですか。12年前に庄内川漁業協同組合がなくなったのですが、この漁協以前に玉野川漁協があったそうなのですがご存知ないですか。組合長は川地三郎さんといわれますが。

知っている人は亡くなりました。川地さんは知りません。この辺りには川地姓は多いですよ。定光寺ではHさんは捕っていましたが亡くなりました。奥様がコイの釣り堀をやっていると思います。

加藤 紀夫さん

ヒアリング日:2018.3.22

【プロフィール】

昭和23年2月11日生まれ。春日井市玉野で生まれ、定年退職後、定光寺の自宅(玉川屋)で鮎物展示喫茶を営んでいる。



加藤紀夫さん

■庄内川での釣りや漁などの経験を教えてください。

庄内川漁業協同組合の組合員という意識はなく、遊漁券(木の板でできている鑑札)を買って魚を捕っていた。アユについては正統派ではないのでガリを使うか、夜にぶち網(投網)で捕っていた。雑魚を釣っていると、まれにシラハエに混じてアユの稚魚がかかることがあった、天然遡上魚だったのだろう。

ウナギの稚魚(メソ)が堰堤を登り切れずに水たまりに群れていたのもこの頃、昭和30年前半のことだ。アユは中学生頃から釣れなくなった。庄内川のアユは焼くと枕ができるので美味しくないと聞いたことがある。

この枕の意味がよく解らない、腹と背に境目ができ膨らんだ腹の部分が枕の形に似ていることなのか?一度だけ会社の先輩とサツキマス釣ったことがある。定光寺の橋の下である、釣ったというより引っかけたのだが、何を食べているのかと胃の中を見た、マスも先輩の釣った尺アマゴも腹の中は空っぽだった。もともと溪流魚がいる川ではないので土岐川(庄内川上流)でアマゴ釣り大会があると玉野川(土岐川下流)まで落ちてくるのだろう。

釣りやすい魚にドウゼン(カマツカ)がある、竿を何本も置き竿にして釣っていた人がいて釣った魚はすり身にして鳥に食べさせるそうだ。

父が生きた時代は戦争が長かった。戦地から帰って玉川屋を継いだ父は店を営む傍ら道路工事に従事していた。とにかく物のない時代、そこでの玉野川(庄内川)は多くの恩をもたらしてくれた。父は捨て針でウナギ

を釣ったり、川が増水するとサデ(大きなタモ)で小魚を捕って子供たちに食べさせてくれた。叔父もアユ釣りが好きで、叔父の釣ったアユが家の食卓に上ることがあった。

叔父のテリトリーは玉野から岐阜県境近くまでだった。城嶺橋下流の高岩から橋上流の下魔の瀬、中魔の瀬、上魔の瀬と上って行き、堰堤を越して洗足、左日陰、猿渡、大滝と各々の瀬がポイントだったようだ。

祖父も、定光寺駅前でお土産屋と川魚料理を営んでいた。特にロレコ(ドンコ)という小さいハゼ(ヨシノボリ属)を甘辛く煮てご飯にかけた玉川屋のロレコ丼とウナギは絶品だったそうで、できれば食べてみたいものだ。

ほかにアユ、ナマズ、コイ、猫マタギと言われるウグイなども玉野川では美味しく食べられていた。

■当時の庄内川の様子と今までの変化について教えてください。

川の白濁は昭和40年頃が一番ひどかったように思う。それでも支流にはモロコ、センバラ、マジジミ、池にはムギツクがいた、やがて農薬が原因なのかツボ(タニシ)は姿を消していった。白濁した川で釣れるフナなどは片目がつぶれていたり、背骨が曲がっていたりと痛ましい姿だった。

漸く清流が戻ってきた庄内川(玉野川)ではあるが、汚れの質が変わってきたのか、スッポンが増えたのが気になる。

■行政への要望があれば聞かせてください。

川をきれいにしてほしい。窓からすぐ横が川なので、毎日のように川を見て育ったが、増水した時の勢いが以前よりもすごくなったように思う。昭和32年に一度裏山が崩れた。それ以降は2回ほど家に水が入ってきたことがある。洪水対策をしっかりとしてほしい。



喫茶店「玉川屋」



庄内川漁業協同組合の鑑札

加藤 福光さん

ヒアリング日:2018.4.24

【プロフィール】

春日井市玉野町19年2月5日生まれ。幼少期より舟を所有し漁をする父(ますきち)の手伝いや川遊びを通じて玉野川(庄内川の地域名)に接してきた。しばらく地元を離れたが、35年前(昭和59年)実家に戻り段ボール加工業を営む傍ら、川を見て昔の良き川に思いを馳せている。



加藤福光さん

■福光さんが小さい頃、父親について行ってよく川で遊んでいたんですか？

子供やで役に立ってないけどね。僕らの小さい頃、舟に乗せてもらって、砂利入れの時、どうせやる事がないので、舟に乗って遊んでいた。築もかけとったよ。

■父親は漁で生計を立てていたのですか？

うちの親父はね、農業兼、他のことをやっていた。どちらかという仕事の先が決まっていなから、農業ばかりじゃ現金収入がないから、川で魚をとって売ったりして、生活しとったということだね。

■どんな漁をしていたか教えてください。

何月ころかな。ウグイが産卵で上ってくる頃。船で砂利を入れるんですよ。

ウグイ川(庄内川:玉野川の地元での呼名)に上ってきたウグイが、そこで産卵するようにして集まったやつを捕る。

■産卵場を造成してウグイを増やすというよりもそこに魚を集めて捕ったのですか？

そうそう。鹿乗のちょっと上だね。石に泥がついちやうと、産卵しないもんで、産卵時期になると、親父の仲間と集まって砂利をきれいに洗って川へ沈める。

■漁に使用した舟の底は真っ平でしたか。今はその舟はありませんか？

そう、まっ平。結構大きいよ。長良川で鵜飼をやるような舟。今はもちろんない。親父は50年前に死んだるもので。僕が21の時やったね。

■その木の舟というのはもっぱら魚をとるために使っていたんですか？

そうそう、ウグイを捕るためにね。僕の記憶だと勝川のどこやらまで買いに行った記憶がある。

親父が舟買って持ってこないかんで、舟で上ってきた覚えがある。小学校とき、「舟を買いに行くからついて来い」と言われて、おにぎり持って電車に乗ってついて行った。

■凄いですね。電車に乗って舟を買いに行ったことがあるんですね。勝川からという相当下流ですよ。高貝はそんなに落差ないので魚道でもどこでも引きずり上げたのですか？

魚道が上がった覚えがある。舟を引きずり上げた。そうやって来た覚えがある。

庄内川、アユかけの人もようけ見えたで、アユが上って来るでしょう。魚道がないといくら低いといつてもいかんと思うけどなあ。

■大きなウグイを捕っていたのはどれくらい前で、それを食べていたんですか？

記憶にあるということやで、小学校の、10歳頃じゃないかな。その前にやとったかもしれんけどね。木曾川とか長良川とかのウグイなんて小さいでしょ。産卵になると真っ赤な線が入って。ここのは40~50cmぐらいあるね。大きいのは。

ウグイは女の人のお産の時にね、食べるといういいこと、食べてきたらしい。

■10歳頃だと昭和29年、60数年前。ウグイがいたってことは、ここまで海から上がってきたということですね。

いっぺん海に下って、産卵のためにあがってきたことだし。真っ赤な線が入る。産卵期になるとね。マスの系

統といっしょだわ。

■ウグイが海から上がってきたとすれば、アユの方が遡上力あるのでアユもかなり上ってきたというわけですよ。

ありますよ。天然のやつね。アユは網やでね。そんなにようけはとれなんだわ。アユは高かった。子供の頃だから金額ははっきりわからんけど。

■ウグイ川に築をかけていたということですが、もう少し詳しく教えてください。

来るときガソリンスタンドあったでしょ、あの下に本道のすぐ下に落差がある。もうちょっと下です。ガソリンスタンドの所から、今の下へ降りる道があるんだわ。小さな橋がある。その橋の上には築(ヤナ)をかけた。

■築はウグイを捕るためのものですか？

違う違う、ウナギ。ウグイ川にも沢山ウナギもいた。天然ウナギだもんね。

僕らの小さい時に、雨が降って水が増えるでしょ。落差で水がドーと流れる。するとウナギが落ちてくるもんね。夜中に見張りさせられたことがある。

夜しか落ちない。昼間は落ちないから。明かりはカンテラぐらいしかない。懐中電灯で。

■お父さんはウナギを売ってたのですか？取った魚はどこへ卸していたのですか？

売った。鹿乗橋のあたりに旅館がいっぱいあった。白鹿があり、三宅亭があり、鹿乗亭、青山荘、鳥やすがあった。鹿乗の付近では、はく鹿が一番大きな旅館だったね。芸者さんが来てやりよった。今は一軒もない。

■そこに直接に売りに行って買ってもらっていたのですか？

顔見知りやで、頼まれて行ってくると、今度いついつ持ってきて下さいとか言われ、シラハエなんかはきれいに扇みたいにして串にさして、扇にして、素焼きにして卸しよった。

■他には頼まれて納めた魚はありましたか？

コイのいる所も決まっていたもんで、コイはみやけ亭さん所へ全部。池に飼っていて、お客さんが来ると出す。

今は食べれんけど、あの当時はすぐ食べれた。昔は臭みなんてあらへんで、泥をはかせば、臭みが無い。家にも池があったでね。

湧き水の所にコイ、ウナギも泥はいちやうもんで、欲しいというまでここにとっておく。注文があると持っていく。

■昔からにコイが生息していたのですか？

まあまあいたよ。コイは。その日によって親父が、今日はコイをとるぞいえば、よせ玉って知ってみえんかなあ、赤土でねえ。お蚕のむつご(さなぎのこ)を練り合わせて、こんな玉を作って、1時間程前に川に入れておく。

網が届く範囲、魚が寄ってくるもんで、かぶせてとる。コイの時は特にね。赤土で作るの。ムツゴは臭うてね。寄せ餌というやつかな。

■一時、コイヘルベスが流行したでしょ。あれで在来のコイがみんな死んだって本当ですか？

詳しいことはよくわからんけど。

■投網とか、いろんな網は自分で編んで作っていたのですか？

雨降りとか、畑とか田んぼがやれん時、そういう時は、日雇いで行くもんで、日雇いのない時、1日中網の修理したり、新しく作ったり。

■以前、玉野川に漁業協同組合があったようですが、魚を売ったりしていた時代にはお父さんは漁協の組合員でしたか？

もちろん、そうです。親父はいろいろやつとったよ。船もつとった。

僕はそんなにやってないけど、親父は釣りよりか、投網。

■お父さんが入っていたのは、昭和26年にできて10年前になくなった庄内川漁協か、それとも大正15年ごろこの辺にあったという玉野川漁協のどちらでしょうか。

なんて言いつたかなあ？15年なら、親父は現役でやっていた頃だと思うよ。

たいてい、玉野川漁協だね。そんな大それた庄内川全体のことでないと思う。

■今、まちまちで持ち場が決まっているでしょ。これは、資源保護の思想とリンクしているんじゃないかな。昔の漁協はそうなんでしょう？

俺んとも言わねえよ。自分ところの魚をとる縄張りがあるが、あれが今、愛知用水があるでしょ。あそこから上で鹿乗のちょっと向こう、あそこから上で、ここの玉野橋のちょっと下向こう、そこまでがうちの親父の縄張りで、お互いみんな権利持ってる。ここからこっちまでが縄張りみたいなもんで、その中で親父がとりよったわけ。

■かなり難しい話なんですけど、その時の写真とかはあるとうれいんですか…。

そんなやつはないわ。投網の重りは持っているわ。一つだけある。鉛のね。家にあるよ。これが昔からの鉛【投網の先についている】。

今は鎖でしょ。今もこの形が使われている。これの大きいやつから小さいやつがある。劣化しとらんなあ。50年前なのに糸もまいとらんに劣化しとらん。



左:網針 右:投網のおもり

■玉野川漁協を知っている人は誰もいないですよ。川地三郎さんという方が初めの玉野川漁協の組合長だったらしく、子孫がこの辺にいるのではないかと探しているのですが。

おらんのじゃない。玉野川には、川地さんは大分みえるんだけど、それらしき魚をやるカワチさんは…。

■川地さんを一軒一軒、しらみつぶしに行こうかと思っ

ていて、明治時代の地図でみても番地が分からない。お寺さんに聞いてみようと思っているところです。

カワチが多いのはお寺さんの西側。川地さんがかたまっていると思う。今のおっさんは若いで、亡くなったもんで、よそから来た人だ。

■鹿乗に1軒。あと同世代の方で、ここで魚とりをした人をご存知ないですか？

親父は有名だったよ。玉野のゴウスケ、ゴウスケと言われてて、築をやってる、舟持ってるって言ったら俺んところが一番だから。

親父の友達でやってた人は、加藤そうへいさんという人もしょっちゅう来った。本人もいつか前に死んでるし…。

■もう一つ教えて欲しいんですが、ちょうどこの橋の所だと思うのだけど、これだけの短い間に渡し舟があったですね。

そうそう、すぐ下ね。4mから5mぐらいの所が渡し舟。ちょうど水野に代官所があったんですよ。橋がないもんで、この玉野まで来て、この渡し舟で渡ってこの山をずっとほらをあがって下ったところに代官所があった。

この途中に今の姫街道(名古屋～定光寺の殿様街道の別道:庄内川から正伝山の南を通して定光寺へ行く)があった。岡崎から姫様が定光寺という寺(地図を見る)。

■渡し舟が必要だったということは、橋がなかったわけですね。

城嶺橋もなかった。定光寺の橋もなかったんじゃないかな。橋があれば、定光寺から姫街道にいけるはずだから。なかったから渡し舟が必要だったと思う。川が荒れると近くの旅館に泊まっていた。後醍醐天皇のお姫様が殺された。

そこに御所内様という社が作られている。渡し舟で渡れないもんで、ここでみんな落ち武者をやるんよ。逃げてきて宿坊で泊まっておる時に、殺された。御所内様というけど、祭ってあるよ。渡し舟のちょっと上の方でね。

■後醍醐天皇で今思い出したしまいが、今の江南市に一族のお墓がある。そこに一時おった。後醍醐天皇の創建したお寺がある。曼陀羅寺っていう。

何しろこの戦いや、敗れて何人かで総勢15人ぐらいいかな。恵那の方へ抜けようとしたけど、ここで川が増水して、渡れなくて泊まっているうちに鬮討ちにあったんだ。

■こうして話を伺っていると昔は川の水はきれいだったという話ですね。子どもの頃、舟に乗って遊んだといっていました。ほかにどんな遊びをしましたか。

子どもの頃、ウグイ川によーけ魚おったでねえ。いやいや。きれいな水だもん。僕ら泳ぎに行くでしょう。学校が終わったら。日本手ぬぐいもっていくと周りにいっぱいメダカがおりよったもん。それだけきれいな水だった。

■この間、近くのある人から川の中に潜って、ヤスで突いて魚を捕っていた話を聞きました。

中学校ぐらいまでは潜って魚突きよったでね。それぐらい透明で石の中でもガマになっとったもんで、ウナギとかナマズとか沢山いた。

■他にはどんな方法で魚をつかまえていましたか？

中学校ぐらいまでは、ウグイ川で、子ども用の投網を親父が作ってくれたものがあるので、それを持ってよくシラハエトりに行ったもん。

■福光さんがよく遊ばれたのはどの辺ですか？

僕はね、西、もっと下流の方。ここはこの付近の玉野町の人が遊んだ。縄張りみたいなもの。ここは定光寺の手前だね。

裏は鹿乗か、橋の下、もうちょっと上、たかはし別荘前、すぐ下に泳ぎどころがあるんだ。そこで泳いでいた。

今道があるか分からんけど、あの(別荘)辺りは赤道(あかみち)かなんかが川沿いにあったから泳いでいた。

■この間ボートで下ったら下に深いという所と向かい側に流れが少し分かれている所あるみたいですが、生コン側に良い瀬がありました。

今はね、たかはし別荘の下へ降りようとする、小さい橋あったでしょ。あそこから川沿いに行く。ウグイ川を渡って川沿いに行くしかない。

前は河野別荘の所に降りる所があった。今、草ぼうぼう

になって行ける所がない。逆に瀬戸からくる川の合流する所かな。水野川。これ下って流れの速いところで遊んだ。

■いろんな魚がいたと思いますが、印象に残っている魚はいませんか？

僕らの時もすぐそこにお墓があるでしょ。すぐ横に瀬になっている所がある。ウグイ川ね。

うちが梁をかけていた上に所に、今は見れんけど、これくらい吸盤がついた、真っ赤なやつがいる。アカバチ。

■美味しかったのですか？その魚にはひげ生えていますか？

食べても美味しくないけど、食べてもかたいやつ、今、正月に使う煮物、ハゼ、形はあんような口をしたやつ。真っ赤なやつ。魚の恰好してるよ。生えてないと思うけどな。

食える、食えないじゃないの。ものすごくきれいなもの。小さいこんなやつでね。5cmぐらい。刺すよ。

■アカバチじゃないですか。それをアカバチって言うってんだ。庄内川上流、土岐川ではとれるみたいですね。食べたんですか？

刺すもんでハチ言うんだ。僕はね、アカバチと言って、僕らの知っている限りでは、お墓の横の瀬に行くという。

きれいな所にしかおらんでね。ちょこちょこ、おりよった。とれよったもん。飼っとくと面白れえできれいやもんで、子どもの頃にとった。美味しいじゃない。

■いつまで川で泳いでいたのですか？

中学まで。中学校ぐらいまでは潜って魚突きよったでね。それぐらい透明で石の中でもガマになっとったもんで、ウナギとかナマズとか沢山いた。その後、19歳ごろ水が白くなった。

■愛岐処分場はいつ出来たんですか？

30年ぐらいにならへん？20歳ぐらいから泳いだことない。中学校の頃までは、泳いどったね。水も汚くないし。

■当然の話ですが、息子さんやお孫さんはここで泳い

だことはないですよ。遊ばせようという気持ちにはならないですね。

まあ一ね。孫でもおれば、足首ぐらいならいいけど、それ以上は入れんね。

■小学校、中学校では川で泳ぐなど言われていると聞いたのですが、汚いからですか？危険だからですか？

危険という面もあったかも知れないけど、危険があってもなくても、水がきれいだったら嫌でも入るよな。おそらく川が白くなってからだと思うんだ。

僕らの頃はなかった(言われなかった)もん。休みになると学校が終わると遊んでいた。

■白濁していたのは戦前から思っていたんですが、昭和38年とか、そんな遅くから白濁していたのですね。

17歳ぐらいかなあ。18、19ぐらいからじゃないかなあ(昭和38年頃)僕らの小さい頃はなかった。はっきり言ってあんな白い水ではね。入ろうという気にもなれんはね。

■上から白い水が流れてくるようになったのは、昭和38年頃からですか。

そんなもんだらうね。白い水が流れるようになってから、石の下なんかにも、つまって、泥が入って、ウナギなんかおらんようになった。ナマズなんか少々汚くても平気だけど、奇形の魚が増えるようになったのは、愛岐処分場ができてからかも。白い水が流れるようになってからもね。

■奇形した魚は例えば、どんな魚ですか？

一番多いのはマナズだわ。ナマズとかコイ、フナ。ナマズがよく目立ったかなあ。

■ナマズがおかしくなったというのは、放流した魚がおかしくなっていることじゃないってことですね。

コイなんかも皮膚から白くなっちゃって、エラ呼吸ができてだと思ふ。

人間でもできる白カビみたいなもん、あれが付いたらウロコの中に土がはいっちゃ呼吸ができんがね。あれでじゃないかと思うんだけど。

ふつうは白濁水は毒じゃないと思うから川に入るはなあ。だけど工場の排水は分けわからんから止めてく

れというはね。白濁しているのはなんとかしてもらいたいですよね。

■福光さんはその後実家を離れ、名古屋暮らしを経て35年前(昭和59年)に玉野町に戻ってきた訳ですが、その当時の庄内川の様子を教えてください。

その当時、アユがもの凄くとれたんですよ。この裏で、手づかみで。

実家に戻って来て、ちょっと余裕ができてきて、庄内川、この用水を見るときもの凄いアユがおったわけ。落ちアユの時期にね。

■取水口から農業用水路に沢山のアユが入りこんできたということですか。

そうそう、あそこに堰堤があるもんで、全部こちに来よる。

本当に30分ぐらいでタライに一杯とったことがある。手でですよ。手づかみで。農業用水だもんで、水がね、こんなもんしか(膝を指して)ないわ。

■農業用水路に入りこんだアユは放流した落ちアユなんですか？

多治見でたくさん放流はしとった。それが落ちてくるんだね。愛知県はアユ放流しとらんのではない。土岐川ではアユかけのお客さんちゅうか、釣り人もようけおったもん。

見るときれいやもんで、つかもうとすると、人間が入るとアユが両横にひっついちゃうんだわ。ほんで、手でずっとやってつかまえる。タモなんかじゃすくえない。タモ破けちゃう。

■今でもここまで天然アユが来ていますが…。

来てても、この水を使って上がってればダメ。

■今のアユは多治見のアユでしょう。

そうそう、放流すると臭い。僕がここでアユをとった頃から、徐々にダメになったわ。今でも捕ってもエラとって内臓捨てても煮つけても臭くていかん。

■いつまでアユを食べていましたか？僕らは毎年毎年

食っているんだけど、今でも食べていますか？

どうやろう、30歳、もっと若い25歳ぐらいまでは、食べていただろう。昔のやつは頭から食べれて、どうもなかったけど。最近はどうも食べない。金払っても、タダでも食べたくない。臭いもん。これからも食べない。とるのが面白かったから、とりよったけど。干物にしても臭いもん。

■アユの干物、いつ頃からありますか？

アユの干物はね、20年ぐらい前やね。そんなもんと思うけどな。長良川のやつ食べるけど、おいしいもんねえ。ちょっと火を当てるだけで、酒の肴にいいね。

■最近はどこでアユとつたり魚とりはしていますか？

一切やらない。水は悪いし、おいしくないもん。ただとるだけなら面白いで。見れば取った覚えがあるからとりたいたいと思うけど、食べるのはねえ。年も年だから。

■玉野の堰堤は中電がもっていて発電していますよね。玉野に電気を供給するためという話ですか？もともと農業用水だったのを中電が全部使って発電を始めた話を聞いています。

それもあるし、田んぼに水を入れるために両方かねてやった。そう、その玉野中の発電分しかないもんで。

■水力発電だから常時発電せず、足らん時だけ送るといことですね。

そういう感じだと思うなあ。発電所を先に、堰堤からここに引くために作った訳やから、ここで分離しているんな所へ送っている。玉野用水はあと！

■あの堰堤はそろそろ100年ぐらいたつ堰堤らしい。

それくらいたっていると思う。

■あの堰堤がなくなるとかなり環境も変わってくるはずです。発電のためだけに使っていて、まかなっているなら今でもそれが必要であるかも知れない。でも、農業用水として使っているのですね。

発電は無くても困らんでしょう。

■僕らもきれいにする会40年やってきましたけど、きれ

いにするまで頑張りますので激励の言葉をいただけませんか。

激励というか、やってもらうと、これから先も小さい子や孫、ひ孫の代に川遊びができるまでにして欲しい。自然と遊ぶということは、何かにつけて良い。山にしても…。

■あと10年ぐらいは頑張りますので応援してくださいね。

出来るかな。こっちがあの世界へ行っちゃう。

川原 一雄さん

ヒアリング日:2018.2.22

【プロフィール】

昭和10年生まれ。代々、名古屋市区西に在りて、戦前から庄内川、矢田川を遊びの場、生活の場として来られた。親の代から魚捕りに親しまれており、その頃の手作り漁具を今も保管しておられ、今回の取材で紹介していただいた。

加藤 寛さん

【プロフィール】

昭和15年生まれ。名古屋市区西に在りて、子供の頃に庄内川などで捕った生き物を食べていた経験をお持ち。会社の定年退職を機に庄内川の釣りを再開され、川原さんと知り合い教えを受けられた。釣り場周辺の清掃活動も精力的に行われている。



川原一雄さん(左)と加藤寛さん(右)

■川原さんは昭和10年生まれということ、戦争の時には10歳ですか？

あーそうですね。僕らはね、集団疎開で離れちゃったんです。郡上八幡へ行ってきました。良かったですよー、集団疎開でも。魚はいっぱいいるし。あそこで約1年おったんかなあ。ほんで終戦になったね。

庄内自動車学校。あそのすぐ裏側、代々、3代か4代前からあそこへ住んどるんだでね僕らは。

あー、そう。庄内川が生活の場で魚を捕って。それでねー庄内橋は今の橋の3分の1くらいの大ききだった、幅が。それでね上があの一鉄橋式になっとったんだわ、あの橋が。こういう風になってね、鉄橋式になっとった、橋がね。あのね、図面を書くとね、こういう風になっとったんだね、橋が。略図だけどね。こういう風にあってね。

でここにねー。橋の下にこれは石、割石が積んであつたんだわ、物凄いこういう風にね。補強するために。これが昔の橋で。ほで今の堰堤は無い訳。川が真っ直ぐなんだわ、ずーっと。

■この間話を聞いたんですけども、あそこで結構泳いでいる人がいたんですか？

そりゃあそうだ。ほんとに水がきれいだったもん。あん

なもん、もう何百人であそこへもう海水浴のように泳ぎにいったんだからね、川へ泳ぎに。家から裸であそこまで行くんだわね、歩くんだわ。裸でね、パンツ一丁で走って行く訳だわ。夏休みなんかはね。ふんどうもみんなそうだよ。

同じような5・6人の仲間がおって、おーい行くぞーって呼びに、ほんで。それで行ってはねー、渴くと喉が渴くと畑があるもんだで、そこでキュウリを盗んだり、茄子を盗んだりして怒られたんだわ。コラーって怒るだけで、大人の人も。それで済んだんだわ。盗んでいくなよーってそういうことなんだったんだわ。お袋ん達もみんなおかずを捕ってこいよーって言う訳だわな。

庄内川で僕らはイナゴ取り、あれをようやったね。袋に竹筒で。やっぱり生活の場だったわね、あそこがね。僕らはあそこが遊び場だね。遊びの場所だった。

■その頃の川っていうのはもうすでに汚かったのでしょうか？

きれいーだった。ものすごくきれいだわね。それで、あの今の橋のところには鉄塔があるわね。1つ、鉄塔が。あその下に大きなイリ(水の取水口)があった。用水用の。2m角くらいのイリがね。ちょうどねー、鉄塔の下んところに。そこから田んぼに水を取るのに使った。ほいで、イリのところに、図面に書くどね、あのこんな、川がこういう風にあると、こういうイリがあるわね。

そうすつとねー川の中にこういう風に杭を打ってねー、水がここへ入るんだって。橋はここ。ちょうど鉄塔がこっちの上になるわね。ちょうど10mくらい離れたところに。ほんでねー、ここに杭を打ってね。こういう風にセギをして、ここへ砂の土嚢を積む訳。この川の半分ぐらゐまでこれを出す訳。イリ側へ水を入れるためにここへセギを作る訳なんだわ。

6月入梅の頃かな、田んぼに稲を作るために水を取るもんだで。それで秋までに撤去する訳。それを毎年作り

直す訳ね。で大水が出てもええように、水面までは作らん訳だわ、流れちゃうから。真ん中までくらいで杭打って要するに四国の沈殿橋と一緒にんだわ。そーゆー式で作る訳なんだわ。ほんでここへ水を流す訳ね。

あそこね一大水が出るとねー、川がね、物凄い材木が流れてくるんだ。切った長い材木がね。4mくらいのこう丸太が流れてくるんだ。で僕らはそれを、泳いで大水の時に取りに入るんだ、泳いで。あれに掴まる訳、材木に。材木ぐるみザーッと下へ流れて岸へ寄せて取る訳。

それをやりよった、昔はね。それを焚きもんにするんだわ、それは。ガスやなんかなかったからね。今だったらそんなもん怒られるわなあ。だけど昔はそんなもん怒られえせんわ。鷹揚なもんだったわ。

■今の川とどっちがきれいでしたか？

そりゃあ昔の方が全然。問題じゃない、今のあんなんは、青くならんからね、水が、今みたいに。かなりひどくなって、とてもじゃあないが、んなもん、傍へ寄ると臭いがする、今でも臭う、臭うでね、あれ。終戦5年くらい経ってからのかなあ、ああ。その頃に橋も作り直しとるでね。で名古屋市の下水が出来たでね、矢田川に。ほんな魚でも物凄い死によったからね。

■小学校5年生とか中学校の頃って、どういふ魚を捕ったりとか、どういふ魚がいたのか憶えていますか？

大体ほうだねえ、まあフナ、ハエシラハエねそれからモロコそれからウナギ、テナガエビ、今と一緒にだわ。それからモエビかな、小さい。それと、からシジミそれから僕らはドウピンって言った、カラスガイかな。蛇池におった。こういう水が流れる内側でしょ、そこで僕ら捕って食べた。そのぐらいおったね。

カマツカもおった。あれはね捕る方法があるんだわ。あれはね、砂の上をね、こうやって歩く。砂の上をねこうやって歩くどね、足の裏へ入った時に、ズズッと逃げようとして動くんだわな。それを今度手でつかむ。下流側に向かって後ざりする訳だわね。つま先は上流側にある。カマツカは上に向かって、頭は上のほうに向かっていくのね。で、自分の足で魚の頭を押さえるんだらうと思うんだわ。見えてね。ズズッと入るでわかるわ。ドンコって言う魚知ってみえるかな、ドンコ。あれもようおったわな。

■その時は砂が凄くきれいでしたか？

物凄うきれい。大きい石ころは無いよ。細かい砂の上だからね。ああ、そういうこと。だけど昔は浅かったね、こちから向こうまで歩けたからね、昔は。

昔はかなり浅かった。だからこちらからね歩いて行けたからね。堰堤が無かったからね。

1番深なところとはね、石が積んである付近は、やっぱ深くなる。あそこが深いんだわ。橋の上から飛び込んだ経験もある。郡上八幡でもやったし庄内川でもやったことがある。

あそこは昔、砂を取っていた。砂利や砂を。で馬車であそこから運んどうった。戦争直前までやっとなんじやないかなあ。ねーあの砂を取るの、馬車で来て持っていきよったわね。建築用で。戦中か、戦争直前までやっとなんかなあ、あれ。舟でずーっと行って、川中へ入って行って、で船頭がこうやって砂を舟へ上げて。ほんで岸へ持ってきて、岸から今度馬車に積み換えて。馬車が取りに来るんだわね、砂を。

■今、捕れた、いた魚を教えていただいたんですけど、そういう魚って捕って食べてました？

あー、食べたよ。全然臭くないよー。ほんと臭くないよ。ウナギでも蒲焼きとか。

取る方法はねえ2色あるんだわ。今で言うナガノ、ナガノ言うんだけど僕らは。マグロを釣る延縄ね。あーゆー式でやる、1つはね。はえ縄式でね。1本のはえ縄が要するに7つぐらい餌をつけるんかな、針へ、垂らす訳ね。それを、こちの方から石をつけてぼーんと向こうへ投げた訳なんだ。投げてね、舟がある訳ではないからね。

ほんで一晩入れとく訳、朝までね。そうするとウナギが食いつく訳、そこに。それと、まあ1つの方法はね、竹のへらでこうやって1本立てといて、で、ここに一本針と餌をつけて、ほんで縁へ刺して置く訳。天秤って言うんだそれをね、天秤釣りって言う訳だ。餌はね、ダイコクミズ。大きいミズね。こんな大きいやつおるでしょう。10cmくらい。あれを僕らダイコクミズって言うんだ。

蒲焼にしたり、エビを天麩羅にしたり。まあ大体そうだな、終戦直前まで食べたね。僕ら疎開に行くまで食べた。

〔加藤さん〕

それからザリガニ捕ってきて。バケツにいっぱい田んぼで捕ったもんね。僕らはお堀、昔は遊び場が名城公園、遊び場だったね。釣りもやったしね、雷魚も食べたしね。あそこもドウビンがねえ、こんな大きな。捕りましたよね、お堀で。僕らはね要するに海の魚は食べられんわさ、貧乏人だし。ほんで冷蔵庫がなかったでしょう昔は、今みたいに。で、ほとんど、要するに干物が多かった。生のやつはあんまり食べれんもん。

川で捕ったのはまず先、天麩羅で。昔の塩漬けの魚よりは、先ずは捕りたてだから。でお袋なんてなあ、おう、今日魚とってこんなかやあって言わせるんだわ。あてにしている。それでね、シジミを捕ったり、シジミはもう汁の出汁だわ。シジミがおったからねあそこは。昔はほんとにきれいだっからね。どんな魚でも、んな全然、今のようあんな水が青くならんよ。どんな冬でも。川の魚は干物じゃなくて色々、焼いたりその日にまあ処分だわな、冷蔵庫がないから。

ほんでも、今は鮎なんか臭て食べれんよ。4、5年前にね、落ち鮎を食べたんだ。落ち鮎を捕って。も一大きいわな落ち鮎。そしたらね一食べた先はええんだわ、ぬくといで。後から、ま、物凄いグツプが。困ったなあ、あれは。んだ二度とあんなことやらんこうと思って。

■学校の先生が川へ行くなって言わなかったですか？

言わなかったよ、そんなことは。やっぱ、親もそういうもん捕ってくるもんだね、生活の糧になるでしょう。でね一、僕らは、魚釣りなんかあんな竿なんか、買えんもん竹竿だわ。藪で、竹藪で竹切してしとるね、竿がなかったからね。竹竿だわ。藪から竹切ってきて、そんなの竹竿。竿みたいなのはそんな買うもんではないからね。

親もやるの好きで、投網打ったで。投網なんかでも、今でもねえ、あの四ツ網がある。それから、あの、ウナギを捕るウゲって言うんだね、僕らは、ウゲ。ウナギをとる道具、竹で編んだ。こう筒ね、竹筒ね。3本ぐらいからげてなあ。竹で編んだこういう胴のあれね、それをクツと縛って、地獄になっているわね、中で。あのドジョウも捕るんだわね。大水出るとね、水が濁るでしょう。中でヘツボを入れて、ツボを入れて振り込んでく、緑へね。川の緑や田んぼの緑。そうするとウナギが入ったりドジョウが入ったりする。

それ、今でも家にある。今、四ツ網あるし、それからそのウゲがあるし、ドジョウと言って魚入れるやつね。ピクのこと、あれを僕らドジョウって言うの。あれは親父が作りよった。



川原一雄さん所蔵の投網

■お父さんがやっぱり好きだったんですか？

おう、好きで、で僕らもついていくんだね。夜は夜で、あのカーバイトを焚いて火振りやる訳。鮎を捕るんだ。鮎捕りやる訳。鮎、それからシラハエ。

夜、四ツ網持って行ってやるんだ、夜、で、それを捕っては食べる訳だ。ついて行ってそれで、今のピクを持って手伝う訳だわな、カーバイトを。親父は投網やったり四ツ網持って行ったりして捕った。木曾川や長良川と水は一緒だよ。きれいな水、ほんとにきれいな透き通って見えた。雨が降るとね一、水が増えるでしょう。そうするとね、ウナギが物凄く捕れるんだわ、ウナギが。水が濁るとね、それはね一、1番ウナギが良かったわ、僕らはね。1番おいしかったもんウナギが。

それで秋になるとね、ほとんどやる人はいなかったろうと思うけど、僕ら川の中に潜って、手探りでね。手でね魚を捕る。昼中でもね、潜って手でこうやってズーッと。手探りで行くだわ、僕らはね、そんな時は、そうやって掴ます魚を。大きいもんそんな小さな魚はおれせん。手で触ったらね、ほんでこうやってスツツ、キュッて、魚を。要するに見えるくらい水がきれいだった。こうやってみんなメガネかけて。水中メガネ言うわね。

あの橋の下のところ魚が物凄くいたんだわ、橋桁のね。それから蛇籠。矢田川でも庄内川でも蛇籠がみんなやってあったんだね、あ一。あれはすごく良かったんだわね、あれ、魚なのためには。物凄くあそこに入

とったんだわ。あんで、あそこにねー僕の親父なんかはね、あの今言うダイコクミズをねー、この、こうゆうねー棒の先に輪っばにして縛って、ほんでずーっと来て、穴のところに入れて。そうするとウナギが食いつくんだわ。そういう釣り方もあった。それはねー針もつけずに。餌を輪っかにして。食いついて噛み付いたやつをばーっと引き寄せて・・・それをねータモで掬う訳ね。そういう釣り方もあった。樫の棒でね2mくらいあるのかな、今でも残ってるんだ、それも。みんな残してあるよ。



川原一雄さん所蔵の四手網

■魚のエピソードは加藤さんに聞いたほうがいいですかね？

〔加藤さん〕

ここ(川原さん)が先生で、僕が行ってからずーっと教えていただいた。

川で偶然会って、話するようになって一緒に鯉釣りをするようになった。自分達で捕った鯉を食べたりしたってことはないけど、岐阜の方が小鮎捕りに来ていて、僕らが釣った鯉を欲しいってことなんだわ。食べれるもんで。

で、釣ると、あ、これもっと小さいで、それと換えてくださいってことで、小さいほうがいいんだ、食べるには。小さければ小さい方がええで、それにまた換えてって。1番最後に。1番小さいやつを持って。やっぱり1週間ぐらい活かしておくんだって。それで、それから食べると言っていた。

■それっていつ頃ぐらいの話でした？

〔加藤さん〕

どうだろう。もうなるな、ちょっとみえんな。3年ぐらいになーへんかなー。僕らが釣っている時、あるでしよう上がっていく堰堤、あそこへ上ってるところへ沿って、それを岐阜の方が上の方へ逃がされるって言うことで。

ドラム缶で酸素を入れて、ブクブクで活かして。庄内川の鮎を、上へ。四ツ網みたいのもんで、そういうもんでね。結局溜まるところでねー、捕られるんだわ。で、鮎の話は岐阜へ持って行くって言うこと。庄内川の上流。

多治見に漁協があるでそっちへ持って行くって言うこと。庄内川の上は土岐川になるんでしょ。ずーっとみえたよ。最近みえてない。ずーっと見てない。メンバー2人がね、いつも来て。で、どうされるって聞いたら、上へ持って行って、逃して大きくするって言うことで。

■加藤さんは魚をとって食べたり？さっきザリガニ取って食べたって？

〔加藤さん〕

ザリガニ。ザリガニとドウビンだね。僕があそこで食べたのは。

パケツにいっぱい捕ってきて、みんな茹でて食べた。魚も食べた事ある。だって僕ら雷魚も食べたしよー。ウシガエル、あれもよう食べたよー、僕ら、ウシガエル。お堀からこっち堀川へ流れるあれが、土管がこうね、堀川からお堀から堀川へ流れる土管がこう、くらのいね、入ってける。そこん中へ入って追い込みやって、でカエルを捕まえて、食用ガエル。入江があるでしよう角に。あそこから。出る方から行くの。そこん中入ってて追い込んで。ウシガエルは腿の肉をね、焼いて食べた。

ものすぐ食べたよーあれ。捕る方法はね。田んぼに居るでしょう、よう。グワグワと鳴くんだな、あれ。で、行くとなバツと逃げるわな、あれら敏感だから。穴があつてねそこへ入り込むの。穴へね。そこへ手を突っ込む。でそこで、噛みつけへんからね。田んぼへ入ってってね。そうやって捕る。必ずその穴へ逃げ込む、あれは。

ザリガニはおいしかったよ、ほんとに。茹でたやつをそのまま、むくって。そんなお前さん、ザリガニは最高だった。ツボ捕りって、春になると田んぼへ出てくるんだわ。それを捕って、茹でて。田んぼでツボは捕る。ウナギは捕る。

ほんでウシガエルは捕る。で、みんなそれが生活だったんだよ。

■川原さんその当時の様子がわかるような写真とかはお持ちじゃないですか？

うん、こないだ調べたんだ、それをね。ないんだわ。橋のね、橋の、橋がちよこつとだけ。そんなくらいしか無いんだわ。川へみんなが親しんでいたと言う写真があるといいがなって。

あんたんとこの話を加藤さんから聞いた時に、調べたんだ、昔の写真を。あるといいがなと思って。だけど無いんだわ、やっぱり。貧乏人はそういうことやらなんで。

■矢田川の方は魚捕りに行きましたか？

行った、行った。ほんで、コボ。コボって言うのはねあのボラの子供ね。それを親父が投網で捕るんだ。

親父が、僕ら子供だから投網打てれせんからね。庄内橋の上の辺だわね。そんなあんまり上のほーおまでは行かないよ。投網で捕るんだ、それを。コボがね。川を、ポコッ、ポコッてやるからわかるんだ。そいらへんで投網をパーッて打つんだ、親父がね。コボはおいしい。あのへソがおいしい。ちょっと臭みがあるけどね。

■あと昔は鯉が結構貴重で、フナは沢山いたんだけども、鯉は今のようになかったですか？

〔加藤さん〕

いなかった。やっぱ、あれって放流した影響でしょうね。あんまりなかったよ。見なかったもん鯉は、フナはいくらでもおったね。

鯉は増えたね。だけど最近減ったね。鯉って最初放流したのかなあ、あそこで。減ってきていると思うね。そりゃ繰り返すだろうね、増えたり減ったりは。結局、上へ上っていくからね、水が出るたびに。

■今後、川をどういう風に行きたいとか、河川を管理している行政に対して、こうして欲しい、ああして欲しいと言うことがあれば教えてください。

僕らはね、川の水をもっときれいにしてやるんだわ。それだけなの、うん。今でもものすごく臭うよ、今でも。冬になると臭いがそんなもん橋の上から臭うんだもん、川の

水が。あんな水なんで、とてもじゃないけどね、鮎なんか食べれんわ。下水、それから王子製紙かな、そこが原因だろうと思うんだわ。僕らもわからんけどね、そこ迄は。王子製紙だと思うんだわ。

■あの水汚いんだけどきれいにするにどうしたらいいですか？

どうすりゃいいんだろう。だけどあそこが、あの東京の多摩川かなきれいになつてるでしょう。あーゆう風にならんのかなあと思う。

庄内川は日本でも3番目か4番目位に汚いか言う話聞くもんねえ。だで多摩川みたいに何でやらんのかなと思う。

〔加藤さん〕

ちょっと愛知県が甘いんじゃないかなあ。交通事故でもそうよ。結局もうちょっときつくしないんとかいんわね。

もっと水がねー、きれいにならんのかと思う。まあ昔までには無理かもしらんが、ねえ。せめて捕った魚がねジミとかね、食えるようにしてもらいたいと思う。勿体ないわ、あれでは。

柴田 明芳さん

【プロフィール】

昭和21年生まれ。岐阜県瑞浪市在住。土岐川漁業協同組合 前代表理事組合長。

ヒアリング日：2018.11.9

■現在の組合員数を教えてください。

340名、最高の時の1割。平成元年で2800人。30年前でそれぐらい。組合員が減ったのは魚がないからだと思う。私もアユ釣りのトーナメントの一人としてやっていたが、自分の地元で釣るよりほかの川へ行く。今でもアマゴ釣をしている人が組合員か、というそうではない。

■漁協が行っている魚の放流について教えてください。

放流しているが、うちの利点であり、欠点でもあるのは里川であるということ。源流からもう家がある。流下すればするほど、住宅地、工場、商店、そういうものがすべて建ち並んでいる。廃水などの影響か、放流しても釣れない。今年度も瑞浪市役所の裏のところに放流して、9月中頃に網を解禁したが捕れない。

アユの放流は300kg、多い時は1tちょっと放流していた。地区役員として入った時にはまだ1t放流していた。平成元年で1,500kgなので、15年前までは1t放流していた。それからどんどん減ってきた。一部、成魚放流もあったが、稚魚放流が原則。

アユ以外にはウナギ、ワカサギ、アマゴ、ニジマス。ワカサギは竜吟湖という人工のダムに放流している。あとはコイ、マブナ、ヘラブナ。ヘラブナも竜吟湖。管理者としては知らなかったが、竜吟湖の巨大ヘラブナが有名だったそう。時々30cmとか40cmのものが寿命なのか、時々浮いているのでいるのは知っていた。外来種の駆除が目的で2年ほど前に水を抜いた。40cmぐらいの座布団のようなヘラブナがいた。

ワカサギ釣りは、多い人は一日300匹以上釣る。早朝、わかっている人は釣れる時間だけ来て釣る。陸から釣る。中山道沿いからちょっと入ったところ。

■魚が捕れなくなったのは水が汚くなったからですか？

昔は陶土で真っ白だった。現在はきれいになっているが、内容は逆ではないかと思う。昭和21年生まれだが、濁った川の中で水泳していた。家に帰ってほっておくと白髪になった。

それでも当時、軍手をはめて瀬の中を半分潜りながら流れていくとアユがあたる。10回から20回で上手くつかめる。昭和36年頃はアユもいっぱいいた。私は土岐市境だったが、解禁になると両岸が竿の放列だった。3000人ぐらいいたのではないかな。前の日から場所とりでケンカだった。白い水でもアユはいた。

■当時はアユ以外にどのような方法で、どんな魚がとれましたか？

当時よくやった漁法はミャク釣り。一番やったのはドボンコ。石とかポルトナットなどを付けて、その先に針、エサをつけて、どぼんと入れて待った。竿を5本も10本も。夕食のおかずになるぐらい釣れた。

ドボンコで釣れる魚はフナ、ドウゼン(カマツカ)、シラハエ、ゲバチ(アカザ)、ナマズ。そのような雑魚がいっぱい釣れる。竿1本につき針1本。家を出るときは針と糸、なたと小刀を持って出かける。あと釣ったものを入れる竹かご。行く途中に竹やぶに入って、竹を切って、川で糸をつけて、石を拾って縛って付ける。

エサは家の畑の堆肥にミミズ。10本入れて、1本につき5匹釣れれば50匹。10~13cmのものだったが、大きいコイなどだともっていかれる。中学生ぐらいまでやった。

それとウナギの捨てバリ。同じ原理。太い糸に河原の石をしぼって、ミミズなり、ドジョウなどをつけてウナギの通りそうなところに入れる延縄(はえなわ)のこと。

■ウナギはここまで遡上していましたか？

上ってきます。もっと奥まで上る。土岐川の源流に近いところでも捕れていた。遡上して来る時、小さいのはこれぐらい。10年いて下がっていく時なのかもしれないが、現在でも大きなものは1.2mとか。流れがつかない溜め池にもいる。池に行くまで地面を這っていくのでは。

溜め池を定期的に干すと捕まえられる。私も小学校4~5年の時に、農業の溜め池で、近所のお兄さんが仕掛けをくれたので、溜め池に放り込んでおいたら次の日に太いのが釣れていた。一緒について行って釣り方を習いました。

溜め池から川までは300~400mある。おそらく田の排水路、それを伝わってくる。多い人は50~60尾捕るのではない。毎年放流しているので。放流する稚魚は九州から来る。20~40cm。年によって分からない。上がってきて10年経つと、フィリピンの何とか海溝まで行くのは。

■今でも捕った魚は食べていますか？

食べているのでは？ アユは九頭竜川や神通川に行くが、土岐川のアユに九頭竜や神通のものを混ぜて焼いてふるまったが、まったく分からない。

板取にも、地元の勤め人ですが、時間があれば網を打つ人がいて、今年も打ってくれたので、好きな人あげたけど、おいしいと言っていた。

■小里川ダムに陸封されたアユについて教えてください。

小里川ダムの下の放流していないところで今年撮影したもの。なぜこれが放流したものじゃないのかというと、放流した地点からここまでの間に私の背丈以上の堰堤が3段ある。それがオーバーするような水は出ていない。2m以上の堰堤を飛び上がるのは絶対無理。

それと小里川の管理事務所に、6月に冬に貯めて置いた水を放流するのは止めてくれと言っている。

4月5月ぐらいで大量に放水したので、その時にダムから落ちたのではない。7年ぐらい前に琵琶湖産の一部に放流した。山岡だったと思う。小里川ダムに流れ込む川。1年目のときに放流していない所にアユがいると言われた。初めは信じていなかった。見に行かなかった。バックウォーターにいるぞ、と言われた。組合員に見てもらったら確認できた。ダム直下で投網を打って100尾以上捕った人もいる。

小里川ダムの放水路の高さは何十メートルとあるが、スロープの上をぎと流れってくる。だから生き残れる。普通は30mも40mも落ちたら、ダメだと思う。

琵琶湖産アユの放流は7年前以降していない。それが残って再生産した。バックウォーターへ遡り上げてくる時に野ゴイもいっぱい上がってくる。野ゴイはアユが大好き。野ゴイ、ニゴイ、必ず食べている。アユ掛けて釣ったのはカメ、ウナギ、コイ、サツキマス。コイは中国から来た

外来種と言われているコイ。弱ったオトリをつけて、少し流れの緩いところに入れると一発でかかってくる。あいつが掛かった時にはすぐ分かる。

小里川ダムのアユがバックウォーターから本流に行っていない理由に、150mぐらい上に私の背丈よりも大きな堰堤がある。堰堤の下までは上がっている。そこから上へは行けない。それを汲み上げようとしたこともあるが、労力がかかる。

■小里川ダムのアユ活用について何か考えはありますか？

組合員以外の方からボランティアで上へ汲み上げようという話がある。ただ、大量に捕れる場所がない。堰堤も、堰堤の下が深い。浅ければ網で寄せてすくって上へ上げられるけれども。70や80の爺様がよたよたして事故を起こしても仕方がないので。

一番簡単な方法は、稚魚がある程度大きくなってから下へ流してやること。上流は川が小さい。ちょうどいい時、5月頃がいいのでは。

■魚を捕って生計を立てている人はいますか？

自家消費するだけで、職業漁師は昔からいなかったのではない。釣り好きのおじさん連中の集まりではないか。好きなおじさんはヨシノボリを捕まえていって、という話があった。それを売ったというよりも自家消費していた。アルバイト的に「ワカサギを釣って甘露煮にして売った」「こづかい稼ぎしている」という話は聞いたことがある。

■「白い濁りは改善されたが、何かがより悪くなったように思う」という理由をもう少し詳しく教えてください。

子どものころに草履を何回も流した。つるつるにコケが生えていた。まだ水が白い時に投網を打っていたが、20cmオーバーのアユが捕れた。無機質な汚れは大きく影響しないのでは？むしろ有機物のほうが大きな影響があるのでは？

例えば、浄化槽の排水とか、洗濯に使われる洗剤とかは浄化槽でも処理できない成分が過去よりも多く含まれているのではない。昔おふくろたちがやっていたのは、せいぜい四角いこのぐらいの洗剤でタライと洗濯板で

ごしごしやるぐらいだった。今は市の下水か、浄化槽を経て川に流れていく。

もう一つが鵜、ブルーギル、ブラックバスによる食害があるのでは。シラハエが多くなって来たなと思うと鵜がやってくる。

多い時には200羽ぐらいいるがどうしようもない。かつては猟友会の会員であったが、鵜を撃とうと思っても駆除できない。両側が市街地なので発砲できない。駆除ができない。

カルガモもシラハエを食べる。川の真ん中に鵜が入っている。その横にシラサギが、その後カルガモがいる。何をしているのかと思ってよく見ていると浅瀬に逃げてきた小魚を食べていた。

■カワウが増えているのでしょうか？それともカワウが魚を食べやすい場所が増えているのでしょうか？

両方。増えているのは間違いない。この辺りは河川工事が進んで両岸がほとんど吹き上っている。

川の中が、瀬、淵、があるという形が普通。瀬の中の伏流水で浄化、淵で沈殿する。今は全部がチャラ瀬で浄化されない。よどんだ流れでは逃げ場がない。50年前にハンターの資格をとったが、その当時はウなどまったくいなかった。シラサギとカモ、カイツリくらい。

■今でも子どもたちは泳いでいますか？

泳がないし、川にも入らない。一番大きな原因は護岸が進んで、川に下りるところがなくなったこと。一旦下に降りたら、大人でも上がるのがたいへん。少し下流で遊びに行った子供が深みにはまって亡くなった。そういう影響もあるのかな。浅いように見えても、急に2m以上の深さになるところがある。なだらかなんだが、局所的にえぐれたような場所がある。

■土岐まで遡上する天然アユはいますか？

三重大学が多治見で調査して7尾中2尾が天然アユだったと聞いている。玉野堰堤をオーバーフローしているときに飛び跳ねているアユがいると聞いた。前の役員が個人的に行っている。毎年(玉野堰堤の)下まではアユが来ているが、あれを越えられていない。

漁業権の管内であればいろいろと運動ができと思

うが。下流の組合はなぜ解散したのかな？その時に『きれいにする会』とうまくリンクしていけばよかったのにね。いまでも『きれいにする会』で玉野の下まで遡上調査をしていますか？いろんな堰堤で止まっていると言われている。魚道の効果がないということだね。

■玉野用水の調査をしたことはありますか？

したことはない。玉野堰堤の上流でアユを釣っていた人に見せてもらったが、アユは大きかった。水温が高いため成長が早いのだろう。いい時には27~28cmになる。今年は放流後に大湯水になってだめだったが、ここだと22~23cmがレギュラーサイズ。

■いまでも土岐川では友釣りでもアユが釣れますか？

これは友釣りでも釣ったアユ。短い竿で釣ったらしい。小里川ダムの上のバックウォーターで甥に釣らせたら4尾釣った。

これは小里川(寺下流)で釣ったアユ。9月19日に。本流は水温が高い。オトリを入れると5分もたない。今年からはオトリ屋もない。うち(漁協)の直営店みたいなものがあつたが、今年からはケガをして辞めてしまった。解禁日はオトリを自分たちで仕入れて販売する。3匹1,000円。今年には長良で捕った天然アユ。普段は養殖アユ。

■遊漁券の販売数はどれくらいですか？

遊漁券は網と竿券で分けている。竿3,500円、網8,000円、竿日釣り800円。

網の日券はない。網は8月半ばに解禁。今年8月19日。前に試し釣りをしたときには釣れた。いろいろな要因があると思うが、水温の影響が大ききように思う。山からの清水が温水プールになって出てくる。

川自体がなだらかになったので伏流水がなくなった。淵の冷却効果がない。温度が上昇するだけ。

昨年は遊漁券38名、竿と網の両方で。その前は倍ぐらい。年々減っているのは竜吟湖がだめなのが原因。その前は200~300は売れた。ヘドロが溜まりすぎて臭いがひどいので、何とかしようということで、2年目に踏み切って水抜きをやった。放流をしていないので、遊漁者が来ない。

■土岐川漁協の今後の取り組みについて教えてください。

土岐川は漁業老人組合なんです。なるべく若い方を、と思うが、一番に生活のことがある。社会的にも家庭的にもいろいろな制約がある。

アユ、アマゴ、コイ、ウナギの放流以外に思いつかない。アユ釣りを始めるのに大きな金額がかかる。誰かに道具を借りられればできるが・・・。

開催している釣り大会はマス釣り大会だけ。アユ釣り大会なんかでもできればいいが、市街地なので、駐車場がない。例えば、公共の市の駐車場とかを借りてやることも考えられるが。土岐川なんかのような小さな川ではフィールドがない。多治見市は3年くらい前から、川で遊ぶ取り組みをしている。土岐川観覧館なんかと協働して。

■放流に見合うだけの収入がないと運営が厳しいのでは？

土岐川漁協は何とか維持できています。有給職員が一名いるが、われわれはボランティア。用事があれば来なければならぬ。

役員は9人いるが、みな非常勤のボランティア。一人だけ職業があって現役の人。ほとんど引退されている。

漁協には多治見の西部、土岐市の中部、瑞浪の東部、山岡の4つの支部があり、各支部に支部長と役員が各々いる。総代会は解散した。300人ちょっとなので総会で決定する。

■環境改善に向けて、当会と協働できることがあれば教えてください。

私も今年度で終わり。新しい組合長も忙しい。今後手を広げていくには人間的に難しいと考えている。50代が1人いるが、ほとんど70近い。

下流の庄内川漁協をまた立ち上げるのは難しいのでしょうか？私は内水面漁協と海の漁協の法律を分けると言いたい。内水面は職業漁師ではなく、リクリエーション漁師である。

■行政に言いたいことはありますか？

河川工事は「止めろ」とは言えないが、「石は残してくれ」と言う。「曲がりには真っすぐにするな」、「工事が終わったら、深みを作れ、瀬を作れ」と言う。担当者はびっくり

する。中央自動車道ができた時、土岐川全川が砂の川になってしまった。

「河川工事をしたら岩は持ち出すな」、「岩を適当な所に置くように」と言ったら、2〜3年で砂が全部流れた。

いかに急流でも砂ばかりだと急流でも下は砂。緩急ができると砂が掘り起こされる。そうすると相乗作用で砂が流される。

事故防止会議が開催されるので、よく出て行って、その場で毎回同じようなことを言う。会議には国交省、県、市、消防署なども来る。私たちは「大きな木は切ってくれ」という。小さなブッシュなど、「川のそばにあるものはやめてくれ」という。木に止まった鳥からの食害を防ぐためと魚が逃げ込めるところを造るために。

■漁業権がある漁協の声は軽視されないのではありませんか。

漁業権がないことが有利になることもある。漁業権があるものが大きな声をあげると、その時はいいが、そのあとがたいへん。意見は法の裏付け必要ですから・・・。漁業権がなければ、逆に言いたいことが言えるのでは・・・。

土岐・庄内川世界アユ遺産にすればどうか、冗談ですが。いろいろな面で1年でも1日でも長く続けようと土岐川漁協もがんばっています。

長谷川 庸子さん

ヒアリング日:2018.3.22

【プロフィール】

長谷川庸子さんは庄内川漁業協同組合の組合長であった故伊澤佑保さん(以下父)のご次女(昭和31年生)である。私たちは彼を訪ねたが、時すでに遅しで、彼はすでに亡き人となっておられ(平成17年11月4日亡)また奥様(以下母)もすでに他界されていて(平成23年亡)縁者としてご息女姉妹しかヒアリングをする人はいなかった。春日井市の組合旧住所を訪ね、ついに東洋建設の山口さんにたどり着き紹介を受けたものである。以下は故・伊澤庄内川漁協組合長の思い出として語っていただいたものである。しかも誠に申し訳ないことが、以下の記録は録音に失敗しメモと記憶に、またお借りした資料に基づき作成したものである。



長谷川庸子さん

故伊澤さんは大正11年12月19日東京は小石川で生まれ、東京から秋田、札幌…と転進され、ついに名古屋で母を知り結婚された。彼は東洋建設の前身である東洋工業に勤務、春日井市篠木町に居を構えて業に専念、ついに東洋建設の社長まで昇り詰めた立志伝中の人である。

氏は昭和26年、29歳の時、仲間のSさんと庄内川漁業協同組合を設立され、そのまま組合長となられた。設立のきっかけは何かは不明である。王子製紙の汚い排水に対抗するために設立されたのであろうか。アユをトラックで木曾川や琵琶湖まで購入に行かれたそうである。26年といえば時あたかも王子製紙春日井工場が起工された年である。

建設業を母にまかせっきりにして子供の目から見ても趣味としか思えなかったそうである。師崎へ舟で行きタイ?などを仕入れたり、組合活動のため西三河や東京にまで出かけたりされていた。

ウナギの放流も始められていた。「好きなんだなあ」としか言いようがなかった。

遊漁券や鑑札の断片もあったが東洋建設のYさんの証言によると庄内川のアユは食ったことがない、庄内川の魚は臭い、食えなかったそうである。

末尾にあるお借りした資料一覧によると王子製紙から年40万円の放流委託費的なものでアユ等を購入・放流していた。また予決算を縮める案のメモを見ると総計

92万円の内69万円が繁殖保護費であった。その中には木曾川のアユ購入費、矢作川のコイやフナを購入費、ウナギの引き取り購入費も入っていた。庄内川にアユが戻ってきたのは中切の堰堤(小田井堰堤)で昭和51年6月30日であったが、その時の新聞記事や放流アユの計量・放流とそれから4年間のアユの写真もお借りしたのでもとに掲載する。アユの放流は熊野、吉根橋で行われたようだが写真を見ると白濁した庄内川への放流であった。

高校生のころ(昭和49年)父について行った時の写真を見せながら、また家の敷地に50坪の魚の形をした池を造り、色コイを飼って楽しんでいて、よくそのプールのタイルの掃除をやらされたことなど思い出しておられた。

行政に言いたいことをお聞きすると、「難しいと思うが、庄内川をきれいにしてほしい、そして思いが伝わる河川、昔の話ができる河川となってほしい。」とのこと。

最後に「アユと父の銅像を置きたいくらいだ」と…。なおこの組合は平成18年に解散した。行政に聞くと組合員が少なくなったからと言っているが、それは現象面だけで、実はいくら養殖義務の放流などが孤軍奮闘して努力しても水質が悪くては報われないので仕方なく解散したに他ならないと思えるのだが…。違うだろうか。彼がなくなって直後に組合は解散している。

組合の処理は父が亡くなってからである。私たちはこれから漁業協働組合を設立しようとしているが、故伊澤さんの思いと重なる。

【提供された資料】

- ①S63.10.12～H6.5.30大垣共立銀行の組合名義の預金通帳1冊
- ②予決算の縮めの案1年分
- ③中日新聞51.6.30の記事とS51.～54のアユの写真
- ④その他庄内川の川の写真、アユの計量・採寸の写真、県費放流?のアユの写真
- ⑤(社)日本の水をきれいにする会、内水面漁連のリーフレット



当時の資料



当時のアユの写真



中日新聞記事
昭和51年6月30日

【プロフィール】

下之色魚市場協同組合 代表理事。



服部繁治さん

■組合の現状は？

現状は、組合員が減少している。実は、新川の河川改修で魚市場の立ち退きが予定されている。

市場としても大変な状況である。これまで立ち退きの話は、尾張建設事務所が個別に進めてきており、団体としての魚市場は後回しにされてきた。これまで話がほとんどなく進んできた。一軒ずつ減ってきたという感じである。

それで、どうなっているのか、3年くらい前にこちらから県に確認した。尾張建設事務所の方が訪れて、立ち退きの話を進めたいと伝えてきた。

昨年、「防災の面から立ち退きを進めて欲しい」と市場側から自治会に申し込んだ。それを受けて、立ち退きを進めていこうということ、名古屋市と県に要望にまわった。

昨年、要望書を受け取ってもらい、改修工事に入る前の調査費の予算要求を県が行ったが、予算が付かなかった。

来年、予算が付き次第、進められることになっている。近くにある第一保育園は、立ち退きが決まっており、来年4月に北の方に引っ越しする。それが済んだら魚市場の立ち退きを進めていきたいと県は言っている。

■丸一冷蔵という大きな建物があるが、もう解散しているのだから空家になっている。

立ち退きには協力すると伝えたところ、尾張建設事務所から条件の良いことを言ってくれて、家屋なども買わせてもらうとのことであった。堤防の改修にかかわる土木

工事も県ですべて実施することや、営業の保証も行うことであった。そんなことを伺ってから1年ほど待っている状況である。

代替地については、もう営業を続ける気持ちはないとの回答が多数である。

■今の魚市場は、どのような組合の形態か。

漁師さんの関係の漁業協同組合は伊勢湾台風後に無くなった。以前は、ここでも水揚げがあった訳だが。

■お店の協同組合か。

そういうことになる。

■水質汚濁の問題や伊勢湾台風の影響で漁業権を放棄する話が出た際に、県から漁協に冷凍施設の購入を補助するなどの話があったと聞いているが。

丸一冷蔵の冷凍施設は漁業協同組合のものであった。今、言われたことと関連するかもしれない。ただ、そのあたりの話は詳しく知らない。

■丸一冷蔵は、漁業協同組合の冷凍施設を預かっていたのか。

冷凍施設を造ったという感じである。

■魚市場の子会社ということか。

そうではない。伊勢湾台風以後、本所(日比野)に業者としては仕入れに行った。中には柳橋に出ていった人もいる。市場には商売人が残った。

■今でも漁協の組合員で昔漁業を行っていた漁師の人は残っているのか。

ほとんどいない。昔はここで水揚げされた魚を、我々が漁師さんから買って販売していた。

「買い廻り」と言って船で海に出て魚の取引を行っていた。今は陸送が主体になったので、海での取引は廃れた。以前は海で「買い廻り」する人たちもこの辺りにはいた。

■遠浅の干潟があった頃には江戸前のハマグリよりも沢山採れたという話もあるが。

庄内川はハマグリが採れた。採れたハマグリを加工する貝屋が3、4軒あった。過去形だけど。「貝屋」と我々は呼んでいた。

■先ほどの「買い廻り」する人たちと同じ人か。

違う。新川の方ではシジミがよう採れたと聞いている。それで貝を加工したり、洗ったり、していた。昔、結婚式の出引物に貝殻が使われた。結構、高く売れて良かったみたいだ。

■ハマグリは庄内川のどの辺りで採れたのか。

広い範囲で採れた。昔、松陰は海水浴場だった。僕らは若かったので覚えがないけど。

■昔は市電も走っていて魚を売る行商の人もいたと聞いているが。

いましたね。

■ハマグリは養殖したものか。

いや、天然のハマグリでしょう。

■今も庄内川の河口でシジミを採っている人は、この辺の人か。

そのあたりはわからない。一時、警察から「誰が採っているのか」と問い合わせがあった。

採ったシジミを加工する工場の周辺住民が臭いがるのかわからないが批判が出たようである。それで警察から我々に問い合わせがあった。

夏場になるとシジミやハマグリなどを採ってくる人もいる。ただ場所は教えられないらしい。どっかで採ってくるらしい。

■漁師町が残っている中で、この地域の人が漁師町や昔の漁業を復活させたいと思っている人はいるか。

わからない。

■我々としては、もういっぺんやって欲しいと思っている。

ちょっと遅かったな。市場でももう10年早ければ、皆10年若いので、がんばろうかと思って取り組んでいたかもしれない。

昔、市場を改築したいので、河川もしっかり改修する必要があるのではないかとの話があった。この市場は1980年代初頭に現在の形態になった。川の方に出て敷地が広がった。前は建屋としては半分くらいであった。

まだその時は、皆元気があった。丸一冷蔵があった頃は市場の業者は冷蔵施設を使って、いろいろやっていたがダメになったので各自冷蔵庫を持ってやっている。

■「下の一色」という居酒屋があるが、市場に関係者がいると聞いている。

市場の関係者の息子さん(次男)が居酒屋をやっていると聞いている。長男は後を継いでいる。「下の一色」という名前を使っているらしいが、「まあ、いいでしょう」と思っている。

市場は一般の人も利用できる。業者も減ったこともある。魚を担いで売る「売り子」も徐々に高齢化で減ってしまった。市電に乗って売りに行った時代、バスに乗って売りに行く時代があった。ここで水揚げされた魚や各漁場などから入ってきた魚を自分なりに加工して売っている。市場は本場と同じ営業日でやっている。

一般の人は土曜日には多くの人がやってくる。私の記憶では、動力を付けた船で漁業をしていた。

小学生当時、朝起きると「ボンボンボン」と音を立てて船が入ってきていた。当然、漁師さんが魚を採ってきて、売る人たちがお客さんに売るという形になっていた。セリもあった。

■名古屋港に高潮防潮堤がなかった時代は、今の名古屋港があるあたり一帯が漁場になっていたのか。

でしょうね。名古屋港が出来ると漁業が出来なくなるので、漁業権の補償の話が出てきて、思わぬ大金が懐に入ってきたそうである。

■全国でも珍しい漁協が建設した病院である「共愛病院」の中には漁師さんが訪れる観音様があると聞いた。また、病院の理事の方が大漁旗などを持っていると聞いたことがある。病院の関係者と市場の関係はあるのか。

個人的な関係はあるかもしれないが、直接的には関係はない。漁師の組合である「漁業協同組合」と市場の組合とは関係はあったとおもわれるが、市場としては、同じ魚を扱っていても、それぞれ組織は違った。

堤防沿いに青峯さんというお地藏さんがあったが、それを病院に移転したと聞いた。

以前、河川改修で青峯堂を別の場所に移さなければならず、その移転場所が「特別養護老人ホーム 共愛の里」でおさまった。

■青峯堂は漁師が、漁の安全を祈願する場所であったのか。

そうですね。

■昔、新川の堤防の先端に灯台があったということだが、いつ頃まであったのか。

確か堤防の先端あたりのことを「せんげん岬」と呼んでいた。久しぶりに使う言葉だ。

■「せんげん」とはどういう文字か。

「千軒岬」と思う。私より10歳以上年配の理事もおる。その人たちにも聞いた方がよい。

■失礼ですが、服部さんの年齢は？

まだ68歳。

■大漁旗など、昔の漁師の道具や資料をお持ちの方はいるか。

いるかも知れない。伊勢湾台風が昭和34年にあったから、その当時、20歳だった人が今は何歳になるんだろう。

■既存の資料を読む限り、伊勢湾台風が大きなターニングポイントになったと記載されている。

そうだね。

■伊勢湾台風までは、川の水質汚染が発生していても漁業を続けようと、強い意思を持った漁師が多かったと思われる。伊勢湾台風後は、周りの人から治水を優先すべきとの声があったり、防災の面で高潮防潮堤が

必要になって、一気に漁業が衰退していったと思われる。庄内川と同じように工場排水で汚染された東京湾の江戸川などは、同じようなことが起きても、伊勢湾台風のような甚大な被害を受けていないこともあり、今でも漁業が続いていたり、漁協が残っている。伊勢湾台風被害があったことが、他の地域と大きな違いを生んだと考えられる。大きな被害を受けたため、「漁業を続けたい」や「高潮防潮堤を造るな」と言えない状況下だったと思われる。

その当時の漁師のことを考えていたら、こんなこと(漁業衰退)にはならなかった。防災や経済発展と漁業の両方がうまくいくと。銭湯が6〜7軒あった。それはやっぱり漁師さんが盛大に頑張っていたからだろう。この町には神楽が4つある。銀杏の木の通りに「観音さん」がある。観音さんは漁師さんたちの力で造られた。

■漁協が研究所を造ったり、名古屋の台所と呼ばれるくらい漁業が栄えていたのは凄いなと思う。

■市電がすぐ魚市場の近くまで走っていた。

市電も私鉄で、この下の一色の人が出資して造った。最終的には市のものになったが、電車に乗って魚を担いで売りに行っていた。

昔は市電に乗って、中日球場に野球を見に行っていた。当時は、地元の魚だったが、それが段々、台風で止められちゃった。

■昔の写真を見ると、カレイやクルマエビなどがたくさん獲れていたように思うが、遠浅の海に棲むものが主だったのか。

私の思い出は、カニですわ。

■ワタリガニ(ガザミ)のことか。

そう。夏場になると茹でたカニを縁側でよく食べた。「本町通り」では夕方になると、漁師さんが獲ったものを売るわけだ。そういうものをおやつ代わりに食べていた。

カニはおやつだった。カニ食べにくいから、親に食べさせてもらっていた。それでも当時わが家は貧乏だったね。

■高級なカニが食べられるなら。

「本町通り」で見たのはカニとかカレイだった。川(新川)がカーブしているところに沿って漁船が付いていた。数は分からないが、すごい数だった。

■我々の活動として漁業の再開を目指しているが、今の魚市場は、船が横付けできたり、積み荷を上げたりできる構造になっているのか。

船を付けてはいけない方向になっていると思う。今でも少し船が係留しているが、あれは内緒でやっているもの。行政が見て見ぬふりをしている。以前は川に竿を立てて、船がたくさん係留していたが、今は指導があってだろう、少なくなった。

■今も漁港の扱いか。

いや、そうではない。漁協は解散しているから。

■かつては、ここも漁港だったはずだが、いつの段階から漁港ではなくなったのか。

伊勢湾台風の後からだと思う。漁師が漁業権を放棄したと同時にだと思う。

■伊勢湾の方に漁に行かれていたと思うが、川の方に関心はなかったか。川の漁に行かれることはなかったか。

やっとなったと思う。シジミなどは採っていた。アユなどは扱っていない。ここはシジミとカキをやっとな。カキとシジミの殻が山積みになっていた。

漁師さんと買い廻りの人は、みんな大きな船を持っていた。私の小さい頃は、買い廻りの人たちが、すごい力があつた。それが陸送に代わって衰退していった。漁師さん、買い廻りさん、小売業者さんがいた。

■三重県の本曾川河口でハマグリなどを獲っている桑名の赤須賀漁協さんとは交流があるのか。

聞いているのは、伊勢湾の海上で津島の漁師さんと会うことがあり、そのお付き合いから津島神社の御裾分けで浅間神社が出来たと言われている。そのような繋がりがある。

■庄内川漁業協同組合との繋がりがあったのか。わからない。

■浅海利用研究所があったと聞いた。場所はどこか。あった。場所は共愛の里の新しく建ったところである。

■県がつくったのか、漁協が資金を出して設立したとも聞いている。

わからない。公的なものか一度調べてほしい。【注】

■当時、漁協が研究所を造ること自体凄いことである。共愛病院は漁師さんが出資して造った。いろいろ問題もあったようだが。

■当時、庄内川の水は白くなかったか？

白かった。私の記憶では真っ白であった。白い魚も出てきた。

■戦時中は白かったか？

戦時中は知らない。ただ、その頃は海水浴をやっていたから、透明だったのではないか。

■いつから白くなったのか。

上の工場が出来てからではないか。瀬戸物の関係もあるかもしれない。

私の10歳上の姉は、海水浴の記憶がある。海水浴場の東側には一色中学校があった。そこに一色のみなさんは通った。ハマグリなども採れた。

先輩の話では、歩いて渡れたと聞いたことがある。庄内川も直線化されて流れ(河道)を変えている。今の三日月住宅のあたりを流れていた。それが自然の流れだった。

■最近、新川はかなりきれいになるように思うが、そのように感じているか。

きれいになったと思う。釣り人も来るようになった。

■有名な軍需工場が無くなった。真っ黒な水を流していた。目に見えて良くなった。何歳頃に透明な海水浴場で泳がれたか。

うちの時、川で泳いでいかんと言われておった。そうでもなくとも泳いでおった人はおった。事故があったりして、余計に禁止されるようになった。

■当時、汚水を流す工場に漁師さんが押し掛けることがあったと言われているが。

私が小学校4～5年くらいまでは、まだここで泳いどった。ゴミはあったけど。それ以後から泳げなくなった。

■昭和34年頃とすると、伊勢湾台風前くらいか。1957年というと、王子製紙の工場が出来てから1年くらい。王子製紙の名前が具体的に出来ることはあるか。

出ない。

■明らかに王子製紙の排水が原因であっても、他の排水と混ざっているのだから、非を認めず、漁師に対して補償金ではなく、見舞金という形で対応している？

知らされていない。一番分かっている漁師さんも陸に上がってしまった。

■名古屋港管理組合の元職員の話によれば、はじめは名古屋港に工場を建設したかったらしい。名古屋港管理組合は断固反対したらしい。とうとう春日井まで行ってしまった。

知らない。

■商店街と漁師町はつながりがあるか。

当然あったでしょう、今は薄れている。

■漁師町は三角地帯だけか。6軒ほどある銭湯やノスタルジックな漁師町を残そうという声はあるのか。

そのような動きはない。

■銭湯はまだ営業しているのか。

営業している。

■今も残っているだけでも素晴らしい。今後、河川改修があるとはいえ、これだけ歴史のある魚市場や漁師町であることを踏まえて、何らかの整備のやり方があるのではないか。

河川使用料が196万円が高い。

【注】2016年の愛知水試研報21の井野川仲男さんの寄稿によると「下之一色漁業組合を物語る事例として大正13年浅海利用研究所を設立し、県水産試験場が同研究所内に設置した養殖研究所と共同で、ノリ、カキ養殖の研究を推進した。(県水産試験場は下之一色漁業組合の浅海利用研究所そのものを養殖研究所に位置付けたと思わせる資料がある。)」とある。



下之一色漁業協同組合・浅海利用研究所の写真が入った絵葉書



下之一色漁業協同組合が中心となって設立した共愛病院



閉鎖される予定の下之一色魚市場

坂野一博さん

ヒアリング日:2018.3.7

【プロフィール】

藤前干潟クリーン大作戦実行委員長、NPO法人藤前干潟を守る会理事を務め、藤前干潟の保全活動に取り組んでいる。



坂野一博さん

■庄内川の漁業の話など伺いたい。

昔みたいにノリが採れるような川になるといい。子どものころ父親がオゴノリを採っていた。

■どんなノリですか。

オゴノリは茶色いノリ。私が小学生のとき、父(清吉、大正4年生れ)が、焼玉エンジンの船を持っていて、勤めながら半農半漁していた。

■どのあたりに住んでいたのですか。

私が生まれたのは新川「日の出橋」の下流右岸100メートルくらいのところ。4歳くらいに庄内川左岸側の多加良浦(甚兵衛通り)に引っ越した。

■船は水害用のものですか？

違う、エンジンがついていた。父親は櫓も棹も操れた。伊勢湾台風の際は船で棹差して遺体の回収も手伝っていた。

藤前活動センターを建設したとき、環境省が我が家に「昔の藤前干潟」の取材に来た。高羽さん(私の叔父貴)や辻敦夫さん(NPO法人藤前干潟を守る会の理事長)と父親もいた。それをDVDにして藤前活動センターと稲永ビジターセンターにおいてある。

父は9年前に亡くなった。魚やワタリガニを結構獲っていたようだ。藤前干潟の沖の方には石倉があり、体力のある人はそこでウナギをたくさん獲って儲けたと聞く。父は体力がなかったのでやれなかったといていた。

石倉は、玉石を積んで、周りに網を張り、干潮時に玉石をのけてウナギを獲るので体力がいる。

小学校の頃、庄内川でアオノリを採って食べていた。中川区下之一色の犬飼さんが、アオノリができないとアサクサノリはできない、といていた。

庄内川で父がガサガサや投網で魚を獲っていた。新川と庄内川の河口部は中堤が開いていて船が通れた。兄等は高校のマラソン大会で導流堤を走っていたと聞く。昔、新田開発したところは堤防の内側に大川(塩抜き用)が掘ってあり、雨で溜まった水を潮の干満を利用して海に出していた。

5年前程に新川でゴミの調査をした時にゴカイが沢山いた。ゴカイは、土の層が黒くなるころを好む。嫌気性と好気性の境のところで。今、藤前干潟のゴカイは少なくなった。2000年の東海豪雨で土砂が積もってから特に減ってしまった。シートやごみの下に隠れているゴカイは、清掃活動で隠れるところがなくなり、かわいそうに思ったりする時がある。

■お父さんが魚獲りをしなくなったのはいつ頃ですか。

昭和37年ころやめた。船を買う人がいて船も売った。小学校6年生頃、庄内川にミズクラゲが沢山いた。子供たちで、そのミズクラゲの投げ合戦をしていた。新川では犬の死骸が流れ着いてしばらくすると、またあつたところに流れ戻ってきていた。

川にゴミを捨てると、また自分のところに戻ってくるといふことだ。父は入院する前まで、田んぼの用水路で魚獲りをしてた。モロコ、ハエなどが獲れた。藤前干潟では、小さなハゼを四つ手網で獲っていた。

父親ではないが、日光川の水閘門付近では、今でもウナギのシラスを獲っている人がいる。また、新川には今も昔もシジミがいる。

■今やっておられるゴミ拾いについて教えてください。

多くの人に川とかかわってほしい。今活動しているのは港区の庄内川・新川の流域の学区の人だけだが、上流の中川区の学区の人たちにも参加して欲しいのだが

中々難しい。

■行政は？

行政だけでは無理。

■ごみを捨てなければいいのでしょうか。

ごみを捨てる人は少ない。ゴミ拾いは民と官と企業、それに学校と一緒にやっている。私たちの会でアユとシジミの調査の話をしてほしい。

■今年は7月29日に二枚貝の調査をする。名城大学付属高校生も毎回参加している。

それに参加したい。

■弊会の冊子です。

貴会は、会員130人、40年以上続いている、こんな立派な冊子も作っている、すばらしいですね。

■川のイベントにそこで釣りをしている人が参加してくれるといいのですが・・・。

地域の人がいると心強いですね。

■河川協力団体に入っていますよね。

藤間干潟クリーン大作戦実行委員会で入っています。ヨシの調査を6年前からやっていますが、ヨシ原が衰退しています。

去年はドローンを使って中部大学のU先生に調査いただいた。大阪の高槻市「鶴殿」では、高圧線付近をヨシが新芽を出す前の2月末頃に刈って燃やしている。

小学生のころ母がヨシズ作りの内職をしていた。ヨシズ製品の長さは1.8メートル。琵琶湖ではヨシは刈って燃やす。ヨシは刈ると大きくなる。昔は3メートル程あったと思う。今の庄内川では2メートル程の長さだ。

■川のボランティアをしていて行政の対応はいかがですか。

庄内川河川事務所、環境省、名古屋市、愛知県にはご協力いただき、感謝しています。

ところでシジミやアユは庄内川の水産資源？

■そうです。

庄内川、新川でシジミをとっている人がいる。新川のウナギはシジミも食べている。腹を裂くとシジミが出てきたと聞く。焼夷弾が新川に多く残っていた。東海豪雨の後、潜水士が潜って引き上げていた。

新川と庄内川の水質は庄内新川橋の付近でCODは新川6mg/L、庄内川8mg/L、流れは新川の方が早い。

透視度は新川80cm、庄内川70cm、新川は藻が多いが庄内川は少ない。これは10年間調査した結果です。新川と庄内川ではハゼの色が違う。

堀川で堀川1000人調査隊の服部さんが企画される上下流交流会で船に乗った時、フジツボがどこまでついているかを見たところ、河口から「山王橋」付近までついていた。

日光川の水閘門では、水門にフジツボがしっかりついていた。フジツボの下にカキがつく。ブルーシートにも着く。

宮田 照由さん

【プロフィール】

矢田・庄内川をきれいにする会の、初代事務局長、2代目会長。昭和22年生。



宮田照由さん

俺は、旧守山市大字瀬古字川西で生まれた。庄内川と矢田川に囲まれた場所です。

親父がこの地に住み始めたのは昭和15年だと聞いた。そのころの庄内川は葦がいっぱいで見えないほどだったの水はうまかった。また水分橋からは庄内橋や矢田橋まで見えたと言っていた。

そして俺の子供のころ庄内川と矢田川はこの地域の子供の遊び場になっていた。親父は水分橋の上下流で川砂を採る仕事をしていて、川の中州から河川敷をトラックで運び川砂を上げるのだが、そのトラックすら子供の遊び道具となった。また庄内川には、土岐石と呼ばれる江戸時代から珍重された石が流れてきて、河原にはいつも人がいた。

夜になると大黒ミズを筒状になった「さかいげ」という道具でウナギも捕った。それは食糧となった。俺は小学校の頃新堀川でナマズを釣った。エサはミズ、竿は竹ののび竿【細い竿の意】、また、堀川の主と呼ばれる人がいて、アユウナギを捕っていた。親父の百姓仲間であった。堀川にはシジミやカラス貝もいたし、田んぼにはドジョウやフナもいた。堀川の取水口を「肝試し」と言って潜ったこともある。

王子製紙が来て庄内川が臭く汚くなった中3のころ(昭和37年)仲間5人ぐらいで泳いだ。「畜生、これは何なんだ、もうこの川で遊べんなあ」と口々に言った。これが庄内川で遊んだ最後の思い出。今思えば庄内川は生活の糧であり、俺を育ててくれた川でもある。

そのまま庄内川のことを忘れていたが、妻の実家(長

ヒアリング日:2020.1.20

野県下伊那郡根羽村)のある矢作川の源流に行き、透き通ったきれいな川で魚を釣り、昔庄内川で遊んだことを思い出した。そのことを近所で釣り好きだった丹羽さんに話し、二人で釣りに行くようになった。

「なぜ庄内川は汚れたのか」「誰が庄内川を汚したのか」「もう一度庄内川で魚を釣れるようにできないか」・・・我々はきれいな庄内川を知っている。しかし今のこどもはきれいな庄内川を知らない。我々の時代に汚したのならきれいにして次代に引き継がなければならない。そんな思いから庄内川を見つめなおしてみた。

昭和30年代の高度成長期に王子製紙が春日井市に来た頃、また上流からの陶土の問題、生活排水に含まれるリンの問題、庄内川の堰堤の下では泡が立ち風で吹き上がり舞っている状態だった。

王子製紙は真っ黒な水を地蔵川に排出していた(現在は暗渠で八田川に排出)。そこでまず「王子公害をなくす住民の会」に参加し空気と水での住民運動を始めた。そして昭和49年12月「矢田・庄内川をきれいにする会」が発足した。

子供のころ俺を育ててくれた庄内川、しかし汚れてしまった庄内川、多くの人に見てもらいたくて釣り大会をすることにした。思惑通り水分橋には500人を超える人が集まり反響もすごかった。背骨の曲がった魚も外来魚もカメもいた。「こんな汚れた川なのに生き物は頑張っているんだなあ。」と思った。

そして会員は増え、溪流釣りクラブ「山彦会」を結成した。「川の汚れは心の汚れ」の看板も立てた。会発足から事務局長だった俺は13年後会長になった。「アユの楽園」「ホテルの里づくり」をうたい「アユ100万匹遡上大作戦」を掲げ「アユの友釣り大会」を行うまでになった。しかし庄内川がきれいになったわけではない。庄内川と八田川の色は違う。冬になると八田川からは湯気が立っている。

つい最近まで全国ワースト10に入っていた。国はこの統計をやめてしまった。けしからん。

昭和53年度魚追跡調査

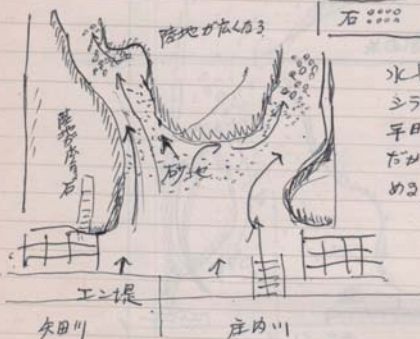
晴天

S53. 3月18日 6時~8時 宮田・阿部

雨量が少なく平水より少ない。投網打も船入らず

シラハエ、モッコ、フナ、カマツカ、など確認

52年度に比べ川の流水が変化



水量が少なく川の流水変化。
シラアワが立ち川には悪化が有る
平日朝8時頃より水は比較的少く
たが 10時より15時より開始
める。

晴天 3月24日 7時~8時 宮田

水温9°C 前日の雨で水量多く中州に渡れず

左岸で投網打も船入らず

ニオイ 13cm 採捕 ツクフキ 11cm 氷分橋下流水道管下で採捕

魚追跡時期

3月~4月 川の水温が13°C~18°C位に上昇

時期 日没時夜5時~7時

川の水温と海水が平行温度となる時

53年3月24日朝10時提出。特別採捕願。愛知県 水谷氏
丹羽 宮田(明)

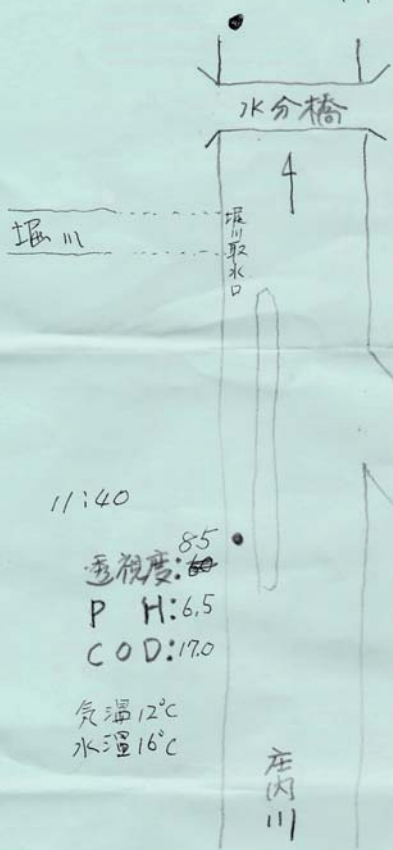
2019. 12. 20
环评

天気:晴、気温:13℃水温:

11:20

透視度: 80
P H: 7.0
COD: 4.0

気温12℃
水温12.5℃



11:00

透視度: 100
P H: 9.0
COD: 4.0

気温14℃
水温10.5℃

11:40

透視度: ~~60~~ 85
P H: 6.5
COD: 17.0

気温12℃
水温16℃

10:45

透視度: 61cm
P H: 6.5
COD: 40

気温13℃
水温22℃

小野天下

現在の水分橋付近の水質。きれいにする会・事務局長の小野さんに頼んで調べてもらったそうです。王子製紙春日井工場の排水は八田川方面から来ます。



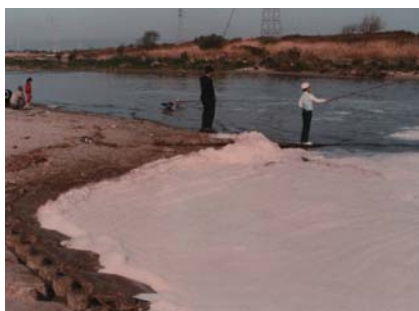
昭和50年頃の矢田川三階橋下流の堰堤。堰堤を落ちた水で泡ができて、風に吹かれて飛ぶ光景が日常的に見られた。



昭和40年頃、地蔵川にたれ流しにされていた王子製紙春日井工場の大量の廃水。現在は暗渠となり、八田川に排水されている。



住民が川に目を向けるよう看板を100本作成し、川に立てる運動をした。100本目の看板は当時の本山・名古屋市長と立てた。



昭和50年頃の庄内川。川に流される生活排水で泡ができて、水面を白く覆っていた。



昭和51年9月2日、庄内(II)橋下流において投網で採捕したアユ他、約10年ぶりに確認された天然アユであり、新聞でも報道された。



昭和51年に庄内(II)橋下流で確認されたアユのハミアト。

【プロフィール】

昭和12年生れの82歳。庄内川下流中川区にお住まい。釣りなど漁を経験した場所は沿海、志摩、中北勢、西濃、尾張、西・南・東三河、知多・渥美半島、浜名湖など広範囲にわたっている。子供のころは家から歩いて片道1~1.5時間、中学時代自転車で1~1.5時間、勤め人になったら公共交通で1.5~2時間、自動車(バイクを含む)に乗るようになったら2~3時間のところまで足が延びたとのこと。漁の対象は旬のもので今のように優れた道具などないので自作のものを使用、見様見真似。ボラ、ズイ(クロダイの2歳以上、1年物はチンタと呼び今はチヌと呼ばれる)、ハエ(シラハエ・フナともに小物はハエと呼び大きくなると呼び変えオйкаワのことをシラハエと呼びフナの当歳を新ハエと呼んだ。)、コイ等内川釣りやドジョウのかいほりが得意だったとのこと。

■庄内川は相変わらず汚いし捕った魚は食えない。我々は庄内川の水質改善の活動をしている。そこで庄内川で3世代にわたって暮らしをし、漁業もまた遊んだ先輩たちを訪ねて話を聞き、庄内川の昔あった姿を取り戻そうとしている。庄内川の水質環境基準の類型は今はDで、BODにして8である。どう思われますか。

ただね、口挟んで悪いが8というのは結構昔もそんなもんだった。

昔はきれいだった、今は汚いかというけどね、水清ければ魚棲まずというでしょう、昔に居たというのは8でも魚はいるということ。

【注】この点氏が昔は8程度だったというのはその通りと思われる。今はBOD3~5程度である。類型Dで8以下というのは庄内川ではすでに達成している。

■魚が食えるのにはC以上でないと…。コイとかフナは大体C、BOD 5位、ホタルは3位ですね。

そうだよ。

■魚が無事棲むという水質はBで、そうするべきではないですか。

そんなにしたら昔の魚はいなくなる。それは上流のアクエをはじめアマゴなど中流以上の清流と呼ばれる区間のことで、釣師的には海釣り・内川釣り・清流釣りがあり、汽水より塩分が濃い(辛いともいう)のが海、潮が薄い(甘い所や真水の所を内川、流れがなく湖沼・閉塞された河川、排水操作によって流れの起きるところも内川)ところもあり、地域、地形によってさまざまである。

■伊勢湾はこの頃きれいになりすぎてノリやアサリが採れなくなったと聞いています。

わしも同感だ。

■でも県環境局はまだ汚いと言っています。

きれいになりすぎたというのはおかしい。それは行政

が数値的に基準を決めてのことで生物の生息条件ではないし、行政・議員・学者等の設定で差がある。

漁協が、去年なんかアサリがなぜこんなに減ったというに漁協は市民から非難を浴びないように、赤潮、苦潮だ、貝毒だと言って自然現象のせいにしてしようとしている。

わしはこんな話は気に入らん。3年前から休漁になり浜へは入れない。でもわしは去年三重県の御殿場から伊勢湾沿岸をず一つと幡豆。蒲郡、果ては渥美の福江まで行って勝手に浜へ入って穿って調査をした。そこのじいさん、ばあさんに声をかけた。わしの結論は漁協が誤った指導をしとると思う。

去年一番すごいのを発見した。爪が3本ある機械を浜辺へ乗り入れてわと走ってひっくり返して土壌の改良をしていた。渥美の漁協事務所のすぐ裏の浜だ、高木というところだ。

土壌の天地返しはいいことだが自分の体に合った深さの手かき掘りくらいがアサリ、ハマグリになどに良い。半年後に現場チェックに行ったら貝長10~20mmの殻がわんさと打ち寄せられている、圧死したと思われる姿が多数あった。

【彼の事前のメモを読んで…】

■ここにごみの回収は行政のやること、必要なら施設の建設もすると書いています。賛成です。

各地の排水機場の様子と堤防アンダーパスの様子を行政・議員・市民は見て考えるべきだ。堤防を走っているとゴミだらけ。回収は川ばかりやっている、なぜ道路もやらん。

堀川や中川運河は市が水質モニターを入れて調査している。調査結果がフィードバックされているか。わしは自転車に乗っている人の意識改革と道交法への組み込みが必要と思う。環境の迷惑行為だから、ポイ捨て禁止を言うだけでなく、道交法の厳守事項に入りたい。

■昔の魚の捕り方はどんなふうでした？

チヌ(クロダイ)というが1~2年物をこころではチンタという。それ以上をチヌという。このことを知っている人は少ない。

ドジョウのかいぼりをやれるような場所はもうあまりない。庄内川からこっち。今、水路は3面張り。昔は土のままの溝、田んぼがず一つとあるでしょう。

用水と排水の2系統があって春から夏にかけては用水路、秋になるとさいが排水路のほうに仕掛ける。3方に囲いのある4つ手網と囲いが全くないタイプがある。

今も小屋に持っている。庄内川水系の用水路から分かれた水路(米野、郷中、稲葉地の主要幹線のこと)にバサーッと張って3面張りじゃないから、真ん中にたるみができる。逃げ遅れたのは下へ行く。逃げたいのは勝手には逃げると、持続可能な漁業をやっていたわけよ。

今は3面張り一網打尽に捕ろうとする。子供なりに水の流れる量だの速さをこれくらいが掻い出すためにちょうど良いと推し量る。

草が生えているが根こそぎ抜いて、川底の土は軟らかいのでちょっと失礼して田んぼの土を積み上げて盛る。もちろんこの土は後で田んぼに返す。早くやらなきゃと。どんとんとバケツで水を掻い出す。水が来るときもやる。場所も何回かやると水量やそういうのでここだとわかる。今は場所がない、あったらでかける。犬山から岩倉にかけてはたぶんあるだろうとみている。

昔の水路は底を張っていない、今の水路は底を張っている。赤星学区(大治町との境)の区画整理はうまく考えてやっている。底は昔ながらの土、横は柵板を区画整理をやりだした3年前からやっていた、建設会社H組が一角を請け負ってやっていた。大したもんだと思っていた。

名古屋市の生物多様性センターの人たちは入鹿池からの五条川と犬山頭首工からの宮田用水の交差するところに希少種がいっぱいいるから残せと言った。

大治町と富田町千音寺地区の区画整理の場所でUさんが内緒でチャッチャッとやったら貴重種がいっぱい見つかった。モロコ、ヌマカイというもの、センバラなど、特別天然記念物もある。(タイリクバラタナゴかも知れない。詳しく調べている。)

モロコの釣り方で独特の釣り方をするものが仲間にいる。ドジョウまでシママミズで釣る。今はクーラーボックスだが当時は竹のかごを首から下げてかまぼこの板を

のせといて2~3mくらいの竿で土堤を静かに歩いてチョンチョンとやる。そのころザリガニはあまりいなかった。今やったらザリガニが釣れる。

【注】以下新川・五条川の支川や戸田川・蟹江川など日光川の話題も流域関連ということで掲載した。

■希少種を守るということでセンターが調査をしたということですか。

それに協力するために一緒に入った。愛知瑞穂大学の先生のKさん(巻貝探しの指導者)はあまりいなかった。(多様性センターの顧問が相談役をしておられた、彼からあそこには出入りはするな、声をかけるなど言われた。要は地権争いがあって反対派と賛成派がいがかみ合っていた。

イタセンバラでなくタイリクバラタナゴはおる。戸田川のドン詰まりのところ(県管理の2級河川の最上端)から2つに分かれている。そこから上は準用河川で西側を流れているのはみんな道路の下に入っていて坂を上って行って今整備しているところに来る、これが木曽川系、東側は五条川系でずーと行くと新川に沿って流れている萱津用水に行く。萱津用水系と宮田用水系。そこにもいた。

最近おるのは戸田川の上流だけ、ヌマカイとかそういうものが棲息している。つまり去年の夏の二枚貝調査で戸田ゆたか台2丁目と戸田5丁目の境の近鉄のガードの下になってる、誰も立ち入れないようなところにヌマカイがいた。そういう環境条件をよく知っているからKさんを案内できた。彼はすぐに飛んできてちょっとした田んぼがあるだけの3面張り水路なのになぜいるのか不思議に思っていたようだ。戸田川から大分離れているところに用水路があり一時期汚れていた時だがコンクリート水路の中を2つに分けて用廃分離がしてある。きれいな水を田んぼへ入れるために・・・。

■いろいろ魚を捕ったあとのことを聞かせてください。食べたりしていたのですか？

もちろん食べるために捕っとる。臭いというわけではなく、水が汚れているから食べなくなった。

伊勢湾台風でガラッと変わった。まずいとか汚いとかというわけではなく、昭和34年以前にある程度汚れて来とった。ウグイなんか山のほうはせいぜい30cmほどだが、

こころのは50～60cmだでね。最近は取れない。上流は水がきれいだ。しかし小さい。

秋に、ハゼ釣りをやっているとうグイがかかる、下るウグイは大きいわけ。庄内川は今でもいる。昔大人がウグイは船頭のクソクイ(糞を食べるの意)と言ってウグイはまたの名を猫またぎと言って猫も食べない下等な魚としていた。

釣り対象魚としては引きが良いので人気だった。エサもサンマヤイカのハラワタを丸ごと使った。

■下ると下らないのがありますね、下るのは大きくなる。庄内川の堰堤で投網に時々入ります。

子供ころ大蠍螂橋(今の橋の下流100m、木造)で水あたりになっていて堤防が削られるのでガラガラの石が入れてあってその近いところで刺し網を張って鉄パイプかアングルでトントンと石を突くと飛び出すして刺し網にかかる。

外さずに網ごと丸めて一色に持っていく。

■いつごろですか？

伊勢湾台風前にやっていた。蒲鉾にする、白くて小骨が多いのですりつぶすからカルシウムが多い。ウグイの蒲鉾ではない、ウグイを蒲鉾に使っていたということ。ボラ、ハゼ、コイ、食べるために捕った、シジミもそう。

■今はすごく臭いですね。

宮田さん(当会会長)たちもやってるが、いの1番にやったのはこのわしだ。

■下流では家庭用ではなく商業的に多く採っています。あれはどこに持っていくのでしょうか？

○漁協と聞いとる。それが矢作川のシジミに化けちゃう。

■矢作川のシジミと混ぜている？

そういうことになるだろうな。そうでなくっちゃ。貝殻を含め消えてなくなる??

一時期、碧南火力ができるときに漁業補償をした、わしはその建物ができる前にアサリ取りに走って行った。あの時の3～4年の間だ。

■その○漁協の組合員がここに来てシジミを採るのは許されるのでしょうか、調査目的?で特採申請をしているのかも？

わからない。ちょっと話ができるが○漁協の漁業権を持っている舟はちょっと地域ボスが声をかけて新舞子、東海市、太田川などに舟を係留させてもらう、組合員同士でお互いのできる、そこから軽4で、知多半島を船で回るのは大変だ、衣浦大橋を渡っていくルートがある。つまり船から車に積み替える。

わしの知っているYさん(多度川で川を中心にまちづくりの指導をした河川の先生)のグループの学生たちがちょうど水質調査をしていたところにわしがカヌーに乗っていた。

川の真ん中の水が欲しいといったので採ってあげた。真ん中の水は子供のころ泳いだころと同じくらいきれい。なんも変わらぬ。色にしても臭いにもなんも変わらぬ。口の中へ入れてちょこっとコクンと飲んだ。この水なら昔の水と同じという。みんなは岸边からバケツで水を汲むだろう、岸边は底泥が巻きあがって汚れている、真ん中はきれい、間違いない、

魚なら今でも食べる、貝は臭い、今のシジミはだめだ。犬飼さんの同期のゲートボール仲間の連中たちが言うにはシジミは真っ黒な煮汁が出る。そんなシジミなんか誰が食えるかと。

真っ黒という表現は少しオーバーかな。庄内川等のシジミは合成洗剤、石鹼のにおい、新川は油臭い、それも機械油系だ。わしが調査を始めてしたとき、パーッと皆に話した。それから宮田さんたちも始めた…。何倍に薄めたら食えるか!の実験をした。結果8倍であれば味噌を入れればなんとか飲める。倍率はどうやって計ったか学者が聞いてきた。シジミと残った殻も半分にし、またその半分、またまたその半分という風に3回した。殻は2、3回煮ると薄まるが殻も減らした。2倍、4倍、8倍と変えた。

■シジミのうまみも消えるのではありませんか？

消えちゃうね。初めから8倍と決まっているなら7倍の水を加えることになる。

いつ頃かな?万博のころ、20年前のこと、この話に庄内川事務所の方(調査課)が興味持って聞いてきた。漁師の持つる江戸時代の一色の古地図を見て学者らしく

官庁らしく名古屋港でもハマグリが採れるのですかと聞いてきた。わしは頭から否定した。

「鳥」屋さんのAさんが竿を挿したらハマグリが寄ってくとと唆したのでさあ実験!だと。これはエッチな話で竿は男性、ハマグリは女性を指すとの冗談話を真に受けて誰かがやった。

実験を始める前にAさんは竹を立てただけ。わしは反対した、後で藤前干潟に竹の網代網を立てた。潮の流れごとに砂が移動して寄り付いてマウンドができた。

地元のHさんが怒ってフジツボで体を傷だらけにして撤去した。ハマグリが湧いてくると言ってやったんだ。

名港のゾーニングの地図の導流堤の先端に書いてあったことを実際にやった。庄内川の零点のところだ、今でも残っている。あの竹杭はそれこそ危険だし有機物を供給している。

元になっている江戸時代の絵図面は漁師の作ったもの、およそのゾーンが表現されているだけ、ここはカレイ、ハマグリ、シジミがいるゾーンだと書いてある。導流堤の先端もそのようになっているが実際には塩分の関係があった今ではあり得ない。

ここでいう塩分濃度はこれ大事なこと。昔一色の人にはシジミをたくさん採った、今は何でおらん?水も川も元へもどったでしょう。川底もそう違っているわけではない。塩分が薄くなったのでは?

子供のころは万場大橋あたりで左官に使う上質な砂が採れた。舟が満潮で入って潮が引くとdeenと座ってスコップで採っていた。砂にこんな小さなシジミ(Φ3~5mm)が入っていてそれを乾いた砂に見つけるとヤマトシジミ特有のつややかできれいな茶色を子供同士で喜んでいた。

大正橋周辺には瀬戸からの白い砂がくる、8月の末になると上へあがって甲羅干して砂の上でコロコロと寝転がり雲母がしっかり着く。手ぬぐいを肩にかけて恰好良くない黄金バットだと言って遊んでいた。また川へ飛び込むときれいになる、あのころ晒し木綿でできていた手ぬぐいをバンバンと払うと乾いちやう。

これは調査する必要があるということとシジミの稚貝が南陽大橋辺りでしか見られないのでエステム(水質改善調査の大手会社)から塩分計をわざわざ借りてきて、昔潮干狩りをしていた場所と深さの条件を合わせて

測定調査をした。大正橋下流まではこんなシジミがいた。ヤマトシジミがおった。うーんと先へ行くと塩分が濃いかからシジミはいない。塩分が濃いから。確かあそこまではシジミがいた。そういうことを知って塩分調査をやって結局明德橋と南陽大橋との間に0.5%の値を測定した。南陽大橋がまあ0.5%、新川は流域も小さく入る真水は少ないので塩分がもちょっと上流、両郡橋あたりまで来ている。

シジミをとっている人の捕る場所を見ているとわかる。庄内川は名四橋まで来るがそれから来ない、つまり上流はおらん。新川系は国1までは上らないが。日出橋まではくる。

わしの子供がネットで調べてくれたが、名古屋市の上水は大治浄水場から50万 m^3 /日、12キロの間の左岸に下水処理場がかたまっていて上から中村、岩塚、打出、明德、宝神と5つもあって60万 m^3 /日排水している。(塩分調査時は露橋処理場が改修中で本来中川運河へ落ちる分が岩塚と打出で負担していた。)

■今、下水は70万 m^3 /日です。

なんで10万 m^3 /日の差があるか、これはお父さんたちのビール、子供らのジュース、牛乳だ。また下水管の地下での漏水も結構大きいらしい。だから凄いや量の真水が庄内川に入っているわけだ。

シジミの生息域が4kmぐらい下流に移った。これが結論!このことを中部地域づくり協会で“石”爺のこどもたちとわしらの仲間が活動発表したことがある。

■名港が深くなり庄内川の藤前干潟で急に10mも浅くなり塩水くさびが底のほうから入ってこないのではいでしょうか。

庄内川の水位は変わらないが川底を掘っているのだからそれは違う。庄内川の川底掘削は4~5mだし、ハゼが卵を持つ1~2月のはじめころハゼは自分で穴を掘れないから14~5mの深さにあるアナジャコなどの穴に産み付ける。ハゼは塩分には大丈夫、2年物は結構塩分に強い。

■確かに庄内川の普段の流量は10年間かけて10 m^3 /s以上に増えてきています。昔は5~6 m^3 /s。木曾川が

ら上水が入るので増えるのです。

調査課の人に塩分調査の話をしたら、深さはどれくらいか、干潮が満潮のときかとジャンジャン質問してくる。満潮の時にシジミを採りますか？どこで採ります？干潮でも水の残っているところで採るでしょうなどと実際に採るような場所で測定をしたと答えた。

彼らは自分らの設問の誤りに気付いたようだ。わしは今も現場・現物主義で、さきのハマグリのように世間様に名の通っている人の話とわしの話では若干の違いが時々発生している。

■アユの稚魚が海へ下って行きますが、川の入る先の塩分の薄いところ、海の沿岸です。木曾川の河口の塩分資料は名港管理組合の資料にもあります。条件の代わっているときにすべて網羅して調査をしているかどうかわかりませんが・・・。

そんなもの潮干狩りをやるところでやるわさ。アユとシジミとでは条件が違うのは当たり前だわさ。

アユも自前で調査することが大事だよ。何種が何匹を調べるとともに、個人でどうしたらよいか考えたらその調査を続けて記録を残すこと、行政や企業が悪いというだけでなく自分でできることを少しずつやっていくことがわしの信条だ。例えば隣の自治体行政には双方干渉しないルールがある。当の自治体住民に働きかけることを大切にしたい。

■すいませんね、実地に自分で調べるなんて。

誰に指導されるまでもなく、気が付いたらやっていた。ウナギもそう、塩分調整というのか体力調整というのか、上流の人もウナギ捕りの人も水が悪いとかいろいろ言うが・・・。

12月～2月河口・川尻にきてカワウの観察をしたことがある。カワウが1番犯人だと思う、彼らは集団で追い込み漁をやる。

ウナギを保護しようと思えばカワウが来ないようにすればいい。昔は一色には漁船が400杯ほどあって舟を出すのは昼のほうが多い。漁船が走るとカワウが飛び立つ、ウは追い込み漁ができない。最近では舟が出ないのでそれができる。カワウの追い込み漁は集団でやる。泳いで背中が水面すれすれの深さまで沖から岸に向かっ

てくる、岸辺ではサギの連中が足のヒザ節の深さで逃げてくるウナギやアユの稚魚を捕る。

彼らが毎日生きるため食べる量は親魚の重量とシラスの重量で比較すれば答えは大変な量になる。釣り師も狩猟免許を取ってカワウを退治したい。

ウナギは大昔から捕っている。ハーモニカ長屋みたいな独身寮にいたころ庄内川の白いウナギを何本も食べた。

昭和30年代、庄内川が白濁していた時代、松川橋と龍泉寺との間でダイコクミミズで仕掛け釣りをよくやった。在来カメもたくさん捕れた。

■白ってどういうことですか？

昭和32、3年のころ、白泥がウナギのヌルヌルにつく！洗っても今のような青いような色にはならない。

毒ではない、味もそんなに変わらない。松河戸橋左岸を龍泉寺のほうへ行くと用水路がある。あのあたりのところで仕掛けてウナギを捕った。

龍泉寺下に淵がある。そのころ何でも書けるマジックインキがはかった、クサガメ、イシガメー今みたいにアカミガメなんかおれへんーを捉えて背中に「オレのカメ、サワルナ」と書く。バケツに一杯採り、防火用水槽の中にどぼどぼと放り込んだ、あくる日になったら首がぎょえーとなって皆死んでいた。強いカルキが原因。ボーフラが湧かないようにカルキを入れていたのだ。

ウナギの捕り方は、昔は竿を使うかチョビとか捨て針を10mごとに一晩おいておく。竹に巻き付くのは仕掛けが悪い。糸にはぐるぐる巻く、それはメソ。サイズが大きいとそんなに巻かない。自分も苦しい。

■下流この辺ではどうですか。

2つある。ウゲはシジミをつぶしたエサを入れて麻ひもでつながっているものを舟から20～30mごと川に沈め、一晩おいたら上げる。

もう一つの漁法のウナギカキは大潮の干潮の前5日間ほど、水のあるうちに泥の多い場所で泥を掻く。道具の見本を見たがウナギカキは何種類もある。桑名や弥富の木曾川河口では水が高くても使えるもの、ここんとこに細い針が2本ぐらいついてる、それをずぶっと入れて舟の横で支えておいてゆっくり舟を進めながら川底を掻くと

重みがきて舟のスピードがおちる、手ごたえが伝わる、そこをぱっと上げる。ウナギに傷がつくので安い、高くは売れん。でもたくさんとれる。潮の干満と関係なくとれる、この場所は半月後にまた来る、なわばりではなく場所を知っているということ。

もう一つはこの辺では人間が川に入って搔くが、潮の引いたときは重くてやれない、夏場干潮時まだ水のあるうちに搔く。今はウエットスーツ、昔は木綿や麻の半纏を羽織ってやっている、冬場はやれん、夏場にやる、しかし夏は暑くてえらい。ウナギを入れる桶がわきの下の深さになるようにある程度深いところでやる。業としてやっているのだから暑さ対策をやる効率第一だ。かかったら桶のふちに刃を反転させてコンと打ち付けると振動でスルリとウナギが桶内に落ちる、その間1秒もないような瞬間だが獲物の大きさを判断して小さいものは桶でなく川の方へ落として逃がしてやる。

昔愛知ジャイアント、今は愛知機械工業の大きな煙突が立っていた。飛鳥から漁を終えて船が帰ってくるときそれを目標に上ってきて近くまで来ると今度は一色の両郡橋のたもとと左岸にある銀杏の大木があった。

そのたもとにM漁網があった。今は200m上流の反対側に移った。まだある。Mさんは今は自分のところしか残っていないという。でも手作りの漁網屋さんを自分の代でやめると言っていた。犬飼さんと一緒になって昔の漁法の石倉漁を復活しようと組んだことがあった。

しかし怪我したらどうする、危ないとか、何を教えるんだ?と干潟で環境関係の活動をしている人たちの反対にあってやめた。

石倉漁は特別な網がある、囲うだけでなく下から潜れんように下がきつく、重く出来ておってウナギが逃げ出そうとして網にポンとぶつかるとこの袋が深いんだ、それを作ってくれんかとM漁網に相談に行ったら、先代は作っていたが、わしゃ(息子さん)よう造らんといい。あそこは四つ手網でも漁業者の使い勝手よく工夫された網を作るので有名だ。

遊び半分で使う網ではない。四角になっていて網の三方が囲ってあって、側面が長くて奥の壁が短くなっている。網を裁断するとき先代はちょっと余分に網があるが、ここらへんのとこが切り口がこうなっている、糸がず一つと、太い糸がある。網を上げると、ここんとこに袋が

できるようになっていて、追い込まれた奴がポンとぶつかった時に膨らむようになっている。

■投網と同じ?

いや違う、体験と工夫と依頼者の求めをよく聞いてやる。今はあかんよ、機械的に作っている。材料費を削ろうと無理なつくりをしている。

わしはMさんと知り合いではないが犬飼さんはMさんをよく知っている。犬飼さんはセンターに自作展示してあったようなやつを使ってチャカチャカと網を造った。

場所は、藤前干潟の東の先端の前。1回だけ仕掛けたがウナギが3匹捕れた。これはいいなあ、うまそうとセンターのUちゃん、カニのトレードマークを頭につけている若い衆がビデオカメラを持ってきて撮影した。

10年ぐらい前だが今も残っているだろう。わしは子供を遊ばせることは教育に良いと思ったが、すぐ反対する人もいた。

暑い時期肩まで水に浸かって浮力で少し軽くなった石を2人で次の中心を示す竹の根元に反動で抛る、80個余り、つまり具合もちょうどよい。夫婦や兄弟2人コンビでやるのだから手ごろだ。

石は台風で壊れた堤防の玉石で今は付近の水中にあるのをかき集めた。ひと夏置くと石はフジツボが付くので掃除が必要。みんな冬場に掃除をした、きれいにするほどよく入る。また大きな石ほど隙間ができて大きなウナギが入る。平べったい石はウナギの寝心地が悪い。

ハゼ、ドンコ、エビなどウナギのエサが石の中にはいっぱい来る。下にはゴカイ、中間には横エビもいる。生物多様性を子供たちに教えるのにちょうどよい。

今回は石を土囊に2、3個入れて持ちやすくして階段のちょっと上流で手ごろな範囲で石を拾い集めて海岸の波返しの上に置く。日を改めて軽トラで運搬して堤防をずーと回って作る場所へ降ろす。昔は田舟にいっぱい間で合った。舟の浮力を利用することも環境教育の題材になる。石倉は今もあるのかわからない。

■行政に対する注文はありますか?メモの庄内川の将来について豊かな生態系環境の復活のため行政に言いたいこととして泥干潟をもっと砂質化してほしいと書いてありますが、これはどういうことですか。

今は川には有機物や浮遊物をたくさん流しすぎて流れが淀んでるところで沈殿する。

昔は裸足で川へ入ると泥は踝までしかなかった。上がってくる時足をじゃじゃっと振ると泥がとれて、草履でも下駄でも帰れた。

今は向う脛まで泥の中に入る、足を振ったとて泥はくつついて取れりゃせん。川底が砂質になるとそするとさいが生物もぐっと増える。土壌の感触で分かる。これはわしらが身をもって知っている。昔と今の川の底質の変化だ。砂質化してほしいということだ。底生生物(ゴカイの仲間)はヘドロっぽいところよりやや粘土のような硬さのある所の方が数多くいる。つまり自力で巣穴を難儀して造ったのに潮流が運んだ泥で埋められてはたまったもんじゃない。

参考上台風以前は藤前海岸より沖は何もなく水平線が見えたから波に泥が流され砂質が多かった。防潮堤ができて埋立てが進み貯木場もでき、一番顕著に分かるのが西4区の造成後の底の様子で深い泥場になっている。

■舟の舟揚場みたいところで川に入ったら泥に足を捕られ草履を失いましたが…。

あそこは昔漁船が通っていた滞筋だ。市の宝神処理場ができた時そこを避けるため排水口を川岸ではなくコンクリート管で川の滞筋の手前まで出したため、排水口の周辺に反転流が発生したため流れが変わりヘドロで埋まってしまった。足が取られる、だから入るときその排水口に近いほうからは沖に出られない。水上機の滑走路跡、わしらはカタバルト(発進路、永徳スリット=切り口とも呼んでるが、昔の人は堤防の切り口と呼ぶことは嫌っていた。)と呼んどんよ、そこからなら西に行ける。

行政はしょっちゅう代わっていく。また今の行政は威張っている。昔と違う。市民はそれぞれ意見が違う、そんなことはわからぬというようなものの言い方をする行政は嫌いだ。

昔、大蟻螂橋よりもう少し上流、今のボートハウス辺りから下流右岸は少し曲がって張り出していたその先端の水衝りから下流に畑地があり、父が子供のころ畑を守るため松杭と小石で階段護岸(高さ1尺、巾4尺5寸×

数段)を造る仕事に駆り出され、子供は小石を運び入れる作業をした話をしてた。

東海豪雨後の直線化のためこれを撤去することになった。当時の第一出張所長と一緒に現場を見て計画を説明してくれた。抜いた松丸太を記念に欲しいと言ったらきれいに洗ってくれた。

もう一つ、明德橋で環境学習センターを造ろうと200万円ほど予算化してくれた。所長は2、3代変わった、5年以上前のことである。しかし舟揚げ場だからと言って地元消防団が反対しモノにならなかった。Eボートやカヌーなど階段護岸昔ながらの轆轤を使ってより上の広場へ上げる。また泥汚れを落とすための水が必要で手繰りポンプの設置だったが他の工事の方へ回った。

階段護岸は環境教育の屋外説明用を目指していた、あの200万円は惜しい。地元住民が要らないと断ったそう。

このほか行政が議論・検討した内容やメンバーはネットだけでなく新聞等で公開すべき、また議論は広く公開して沿川住民とともにやることなど。

藤前干潟には協議会があつて機能しているが一色地区での河川に関する協議会はない。子供会役員~町内会理事までしばらくの間経験したが漁師根性や政党のかかわりなど勉強したこと多々あり、新住民と地域ボスの存在など難しいこともある。

【平成29年1月18日NHKで放映されたミニボートの危険性対策について氏は一言を持っている。それは以下のとおり。

今のゴムボート、プラスチック、ファイバー製いづれも全長3m、2人乗りのミニボートは転覆しやすく這い上がり難くて危険である。その原因は船底の形状にあるという。昔の和船の良さを生かすこと、すなわち水に浸かっている部分が角ばっていることが大切。昔から農・漁業、日常の移動や運搬・建設の仕事に使われてきて安全性は証明済み。

ボートなら2人の被災者を載せ4人の大人が水に入つて押しているところ、和船(田舟)なら5~6人乗っても竹竿1本で操船できるし、漕ぎ竿を中心に軽トラより小回りが利く。竹け竿操船技能講習を夏休みに学校プールをはじめ池や川で練習させるとよいと考えている。水災害

渡辺 文夫さん

【プロフィール】

昭和12年生まれ、美濃加茂市出身。若い頃から釣り好きで、名古屋へ出てからもアユ釣りのトーナメントに参加するほど、仕事で大怪我をしてから地元の矢田川でリハビリがてらシラハエ(オイカワ)釣り、アユ釣りに親しんできた。また矢田・庄内川をきれいにする会主催の魚釣り大会の常連で、名古屋市長杯を争うシラハエの部で何度も優勝されている腕前の持ち主。



渡辺文夫さん

■渡辺さんは美濃加茂市出身ですが、いつ名古屋へ来られましたか？

昭和29年に名古屋に出てきて板金、建築関係の仕事に就きました。昔で言うブリキ屋ちゅうやつね。

魚釣りが好きだったもので、夏のアユ釣り解禁になるとね、1カ月のうちにどうだろう、少ないときで10日、多いと15日くらい川へ行っった。アユ、うん、9月いっぱいくらいまではね、アユの友釣りだね。ほとんどが自分の地元の木曽川でね。で、6月の解禁当初はね長良川の中央、中央に武儀川というところ、あそこがほとんど。で、根尾が解禁すると根尾。で7月の半ば15日過ぎるともう日本ライン、9月いっぱい、1本で入っった。それでトーナメントへ出るようになって、日本全国釣りがまくって、6時まで仕事して帰ってきて、ご飯食べて風呂入って、もう8時には、車でひとりで出かける状態です。

■随分熱心にアユ釣りをされていたんですね？

最初の2年くらいは予選で負けて帰って来っただけでね、3年、4年目頃から決勝へ残れるようになって。ま、とにかく一番遠いところは北海道。

北海道にもアユおるでね。北海道から東北からね、それから、北陸、ほれから関東、茨城の、それからね、一番多いのがやっぱり中部地区で、長良、板取、それから静岡の狩野川。ほんでね、みんな1週間くらい前から来て、川でね試し釣りやっるとるんだわね。それで、みんなクラブがあっってね、もう物凄いいんだわ。川の石ひとつひとつの

データ出しちゃうの。ワシはひとり。一匹狼。

釣りにたばけとって、仕事を疎かにしちゃって、それでも、プロに成り切れなんだわ。やっぱり子供がおる、家庭があるし。その当時は昭和40年、50年頃だわ、プロではね食ってけーへんだわ。

5歳の時まで現役でやった。59歳の5月か。屋根から滑落したんだわ。低いとこやっただけね。けつまずいて飛び込んだりしたんだわ下へ。そんな時にね、電信棒が傍にあったもので、電信棒へバーンと抱きつきに行った。抱きついたらどね、ずーんと落ちちまって右足から。

3m50くらいあったかな、高さが。そこからダーンと真っ直ぐに落ちて、で、右足の足首をくちゃくちゃにしちゃった。6ヶ月入院しとって、上飯田の第一病院へ。それで2年リハビリで棒に振って、止めたんだわね。

川原、歩けーへんもんで、この段差のところが、足首がね、こう曲がらへん。で、リハビリはまあ矢田川、あの河川敷の堤防道路の勾配のとこね。ブロックの石畳。あそこをね、上がったり下りたり、うちは住まいが矢田川の堤防道路を隔てたら川原だもん。

ほんでね、午前中歩くでしょ。ほいで昼から、ご飯食べてから、すぐ傍だもんで、ちょっと昼寝して、それで直ぐはい、そいで竿かついで、そいで長靴持って、ほんで河川敷のとこちょっと行って、1時間くらい歩いて、矢田川へ入っちゃう。17、8年前は本当よう釣れたよ。

■それが矢田川との付き合いの始まりですね。どの辺のところですか？

【地図を見ながら】

これ天神橋、これ19号、じゃあここだわ。ここに今の堰があるでしょ。名鉄小牧線・・・

下流の床止めというところ。ここに堰堤じゃないけどね、ザラ場があるんだわ。それまでが、もう毎日の釣りコース。今は、去年はほとんど行かなかったかなあ。

去年は庄内川のあの大会だけだわ、行ったのは。それを、大会があるのを知ったのはね、私の釣り友達の子がね、北郵便局のちょっと西に、あのステンレスで流し

台どとか色んなもん作っとる工場があるの。それがうちの連れだったんだわ。そこへ行った時に、チラシが貼ってあったんだわ。

なに、こんな大会があるんきゃ、おい。いつだった、11月の第一日曜だっちゅうで、おい11月の第一つたら木曾川の笠松の川開きだがや、ニジマス釣りの、木曾川の漁業組合員、皆知とるもんで。愛北から木曾川の漁業組合の組合員。

ほいで、おい丁度おみゃー、あつちとがち合うが一、いつもマス釣りの方へ行きよたんだわ。で、一回庄内川へ入ろうかって、で来たんだ。そしたらねー、まー、川の臭いで、ガツカリしちゃってね。

■今まで庄内川は入ったこと無かつたんですか？

29年に名古屋へ出てきて、1年間はわからなかったもんで、あれ、色々聞いたりして、それで、あのー30年頃から入ったんだわ。

その時は本当、きれいだっただすよ。33年くらいまでは本当きれいだっただ。

あのー松川橋、あの勝川の、あそこの下にね、昔東海電気の今のトーエネックね、あそこの会社の倉庫作ったんだわ。そこの屋根を張りに行っただ、10日間くらい通ったかな、夏に。

いつも昼休みはその庄内川で泳いどったんだわ。昼休みに、暑いもんで。ほいで、帰りがけに毛針振ってくるんだ。テンカラ。

あのー、丁度ね、あの時はね6月の終わりから7月の半ばごろまで丁度仕事が入って、ほんでもアユでも12、3cmのやつがねー、1時間くらいでねー、多い時は15、6、少ない時でも半分くらいの、8匹くらい釣れるんだわ。テンカラ。

それでね、おーいこれは、ええのがおるなーって、釣ったんだわ。ええ気になってね。それで爺さんが自転車に乗ってきたんだわ。おーい若い衆、ちょっと来てーちゅうんで、ここ料金がよー200円要るんだわって言われたんだわ。やー、ほーか、やっぱここ組合がなんにもないし聞いたが、いやーあるんだけど、みんなやらんだだけであるんだわーで、向こうの勝川橋の方のよー、住んでござる爺さんが確か春日井の人。

■これって平成18年、今から10年位前に庄内川漁協ってあったんだけど閉まってしまった。その頃からもうあったんですかね、漁協は？

どうか知らんだ。昭和の30年頃、それで味を覚えて35年くらいまで行ったけども、35年の夏は釣れなんだわ。

そしたら水がちょっと臭うんだわ。なんだろうね、どうも王子製紙から廃水が入るとるちゅう話を聞いて、おかしいな、おい王子製紙はあれもつと下だかなあと、ほいで今の八田川のどこの工場へ入るとるわね、で、そこへあの、見に行ったんだわ。

こういう訳で行ったけどよー、王子製紙の排水をここで濾過してこの八田川のところへ流し込んで、あの今の庄内川の水分橋の上へ、ほつたらなるほど川の半分、北側はコーヒー色みたいな茶色だったわ。

ほんで、たまに釣りに入るのは、あのー南側、でその時に橋のピアのあたりよう釣れたんだわ。で、ウナギもやったし三階橋でも水分橋でも、あのその当時ね、毎年土用丑の日にね、あのー鰻を扱う業者がね、川へ放流しよったんだ、ウナギを。ちょっと小さめのね、あのまんだ捌いて銭にならんぐらいの小さめのやつをね、放流しよったんだ。で、それ夜ミズ持って行ってね、夜釣りゃあお前さん、んな5本や6本、すぐ釣れよったわ。んで、釣って平安通帰ってきて兄さま好きなもんですぐ捌いたわ。食べたら、臭っさいなーおい、あかん、食べれんわこれ。

身はタラタラだし、僕ら木曾川でウナギ釣って天然ばっか食べとったでしよ。ほんでだね、ものすごい違和感あった。

■あの水分橋の辺りまでウナギは上って来てました？

うん、釣れたんだわ。天然もおったみたいよ。ワシらがね、シラハエなんか釣った時に、こんな太いウナギ持つとる人おつたで、爺さんで。んだでね、こころ養殖じゃないで、色が違うで、だから天然だなーって。

そういうことで川が汚れてきてね。もう釣り場がねーなくなっちゃったんだわ。話に聞くと矢田川の方がええ、どこの方がええって、その時は自分も車持って四駆で、あの走り回ったもんで、ほんで向こうへ行ったんだわね。そしたら、とてもやないけど釣りするあれやねーわーと思って。僕らは川ちゅうとねー、川底に石があつてデコボコしたところだ砂洲の川で釣ったことねーんだわ。

こんな流れとる川で川底が砂で、川底も見えーせんようなところで、んなー。

で、それからまー仕事で水分橋なんかはしょっちゅう行き来して、見ると、まーガツカリするような川だったね。もう泡がもうもうと立ってね。

■渡辺さんが水分橋の釣り大会に初めて参加したのはいつくらいからですか？

今から考えると20年くらい前になるかなー。こないだ整理しとったら、あの大会の時のねー優勝橋があったんだわ。

ほしたら河村さんの市長の前の市長、本山さんの後、んー、何とか言ったねあの人、あの子の時代の橋が出てきたんだ、ひとつ。で、河村さんの橋は5つくらいあった。それをみんな今処分、みんなやっちゃった。で、去年の大会のあれでも、ま、知っとる柴山(釣具店)さんのとこへしょっちゅう来とる人にやっちゃったわ。

20年前に初めてあそこの水分の釣り大会に参加した時は、もう、川へ入るも入らんもない、岸辺にたつて、そしたらプーンと臭うでしょう。

■その頃、初めの頃からきれいになっていますか？今は。

うん、前、今のワシらが33年頃に入ったでしょう。その時よりきれいだよ。透明度がある。去年のときは余計きれいだったから、雨降ったから。白川だった。

白川だったで、水垢が流れちゃってね、真っ白な川だったで。だで全然釣れーせんし。あれ連休だったでしょ。

王子製紙から廃水が入ってなかった。川へ入ったら本流も向こうの方も同じ水温だがね。

あれー、いかんなーと思って本流の方で少し毛針振ってみたら、12、3cmの、これくらいのやつが2匹釣れたわ。ちょっと小さいけどまあ一応確保しとこうと、まああそこ真ん中から向こうが勝負だから、渡って向こう、真ん中の中洲があるでしょ、あそこ。ちっとも来えへんがね。廃水の、あの水の温度がね、3℃違う。で、こっち側から入るでしょう。冷たいでしょう。ここで去年振って、なにも無いんだ。おかしいなーと思って向こうの水、手つっこんだら冷たい。本流と一緒にだがね。あれー、冷たかった。去年はね。

■渡辺さんの持参したアユの写真を見せてもらいましたが、名鉄上飯田線の味鏡駅北、そんなところでアユが釣れるんですね？

うん、新川の枝川。群れがおるもんでね、ほんで、話を聞いて行ったんだわ。ほんで行ったら、なんだあれ、アユだがや。50匹くらいの群れになつとるんだよ。このくらいの幅でずらーっと。鉄橋の落ち込み。あの、八田川がね、上を交差しとるわね。

新川はねー、私が名古屋へ来たハナ29年、30年頃からアユが新川上ってくることは知つたんだわ。

ほで、私いつも9月いっぱいまで長良川とかの友釣りは止めよったわ。で10月なると新川と今の地藏川の合流点、あそこね大潮になると水が引いてザアーと瀬になってこれくらいの浅いとこ、そこで、ガリでチャーっと引いてアユ2、3匹とって、ほんでこういう仕掛けで友釣りやる。これは大山川からの落ちアユではなく間違いなく新川を遡上してきたアユ、ワシ見とるで。この上の落差のどこをね、ピョーンピョンと跳ねて上がっていくやつが。このくらいのやつが。



新地藏川で釣ったアユ

■今でも捕ろうと思ったら捕れるでしょうか？

捕れる。捕れるけども、そんなもん魚が臭くてね。これこれこれ、これなんだわ、矢田川。

これ一番、平成20年矢田橋の下流で、初めてアユを狙った時に、1時間くらいの間にこんだけ。これがダーっと来たんだ。それがもう10月過ぎとるでもう色が来るとるんだわね。なんだこれ、おい、これ、上の、なにーあの香流川。香流へ物凄う上がるんだよ。

ほで、ワシはほんでその庄内川、矢田川のアユの遡上を見たいで、毎年、この平成5年か6年頃から、4月25日に初めて矢田川へ入るんだ。それはいつも下の方、

噴水があるでしょ、あの堰があって魚道があって、あつこの下の瀬。あそこのまづ魚道を見て、ほど魚道の脇に座って30分くらいじーっと見とるんだわ。1匹も上がれへん。ほんでシビレ切らして。釣竿持ってとるもんで、で下からズーっとゴルフ場の中の橋があるでしょ。橋まで毛針振って行くんだ。シラハエが10cmから13cmくらいのやつが70か80釣れるんだ。

もう、4月の25日じゃない、まあハエはおるから矢田川ええなと思って、で上に散歩がてら行く。矢田橋の下とか天神橋の上、それから中央線の鉄橋の、あの上とか、色々、転々と釣り歩くんだわ。

■シラハエって今凄く沢山いますよね？

去年、9月。いたんだ。だけでも大きいやつ1匹もおらん。てことは川鶺が入るし、水深が砂で埋まって浅くなっちゃってるんだわ。

で魚が逃げるところが無い。大きいやつは先、優先的に食われるわな、カワウに。ほどで普段だったらね、あれ6月の半ば頃、コイのハタキと一緒にくらいにシラハエも産卵に入るんだ、ハタキに。

そんで7月頃になるとこんな浅いところでね、オイカワがこんなやつがねバチャバチャバチャーってやっとなんだわ。

ほんでアユにはハタキには早いわな一つ、やっぱ見るとオイカワだわ。こんな15cmくらいの。やるんだわね、毎年。ハタキ。水はたくからハタキ、川底をはたくんだ、尻尾でね。こうふうにやるでハタキちゅうんだわ。

■その香流川をアユが上るのは、大体何日くらいですか？

6月はじめ頃行ってみやー。たいがいおるに。目撃できるに。その代わり恐ろしい、今どうなってるか知らんよ。

で、住宅のとこまで行くと、まーあの上は桜の並木になって、で、階段上がって、だけどススキみたいなあれが胸ぐらいまであるわね。

で、ところどころ、あれコイを釣りに来とるんだな。ほど釣り場みたいになつとるわ。

で、僕はじゃあ一回テンカラ、毛針でもやろかって、やれへんよこんな風には。

でチョボーンと上へ落として、流して、こう縦引きだわ。あれやってもアユは1匹も釣れへんじゃん。で、シラハエ

はよう釣れるんだわ。んなけどよう、シマヘビなんかがわざわざ目の前シャシャシャシャ、そりゃいやんなつてくるわ。

■アユも我々の調査では最近物凄く捕れ始めているんですよ。しかも大きいのが。

これは遡上したばっか、んだでこんなものアユでしょ、5月。12、3cmでしょ。

僕が、ほど、アユを確認したのは、1回7月かなんかの終わりがけに、雨が續いて、ほんで長良や、増水して行けなんだんだわ。そんな時に矢田川で毛針振って、跳ねるんだ、魚が。あれ、わりかし大きなやつがおるな一つ瀬の頭で。

でポツとほってチューっと毛針やったら、ガクーンてくるんだわ。ドシャーンと来て、そんでヒュッとみて、あれつ、あの当たりで魚付いとらんという訳ないがな一つ、ほれで振つとるうちに、あれちよっとおかしいな一つ仕掛けに違和感感じた。そしたら針、本から切っていった。それがアユなんだわ。まず18cmから20cm。

あ、おるわ、これー。したらどっかで群れがおるはずだ、で、こころ繩張り持つような川だないで、どっか群れがおるで、で、ずーっと向こうの、あの一香流川のあれから、ずーっと、今の天神橋やなしに下の水分橋、あそこまでずーっと川の中、ダツバダツバダツバダツバ入って、4時間かけて探したんや。ほしたらやっとな大幸のグランド前に100匹くらいの群れ見たんだ。

ほど、さあ、さー大幸って矢田橋の上、あそこですよ、ありゃ何とかしてやろうと思って、で、8.1の竿持ってきた、ほど、やってみてずーっと、竿をヒュッと出そうとしたらパーッと、もう水深がないし鳥が飛ぶ、人が来る、みんなにいじめられちゃったんで物凄く敏感なんだわ。

ほら、何も、ガリも何もこれ振れんぞ、こらー。ほど、しようがないとにかく1匹、友釣りするにも何するにもって、この流れ込んどる瀬のとこ行って、ま、せいぜい3mくらいの川幅しかあらせん、ダー流れとって。そこへあの今のチラシの仕掛け10本針つけて、アユルアーあれ上につけて、ずーっとこうやっとならカカカカーンと来るが。ほうたら、こうこう、これが来たんだ。ほど、おう、おるわいつて、平成20年だよ。

おー。ほんで、それにすぐ替えちゃって、仕掛け。まー

こんな8mの竿、ちょっとこれ、川原のほんとに5、6mも下がって釣らにゃ入りゃーへんがポイントへ。ほんで6.3の竿に仕掛けつけて、ほで、やったんだ。ほしたら2時間ばかりで来るじゃん。んで、それから病み付きになって、矢田川でやっとなるんだわ。



矢田川で釣ったアユ

■水、きれいと違いますか？あそこから地下水が湧いているという話があるんだけど？

きれいだよ。地下水でとるよ。あのねー、砂んとこポコポコポコって出るとこあるで。あの川中へ入って見ると。あれ、真ん中の方は違うけどね、へちの方からねー出るとよ。あれが昔はね、あれは川がね、土手がグリ石だったんだわ。石崖だったんだわ。それが今、ブロックでこんな風にしちゃったでしょう。あれで駄目になっちゃったんだが。石崖がねー、水が出るたびにその下がぐりーと掘れてガマンならなかなだ。ほうしやあナマズやなんか、いくらでも。ほいでねーナマズなんかねー、どえりゃあおったんだよ。

あのアイベラ釣った時に、あのへらとマブナの合の子のフナがおったんだわ、よーけ。この平成20年とか、これやっとなる時分に。

そんな時にね、大幸のね、あの野球場のグラウンドの前ところがわりかし深かった。水深ねー深いとこ1mくらいあって、まあまあ魚がおるなというところが60cmか70cmくらいあって、そこでね5.3の竿をいっぱいにつけて、で、仕掛け、普通のシラハエのような仕掛けをね、で餌だけが違うんだわ。

で、やるとね。ほりゃこんなね25cmから27、8cmのどかいアイベラちゅうやつ、あれがねー、これ。矢田川にはマブナが元来物凄うおったんだわ。

■香流川もね、地下水が大分出るとでしよう上流で。

きれいだよ。水はものすごいきれい。ほんでねー、石は真っ黒にしとるんだわ。水垢ついて滑るでねー。

だけど、もう俺は石ひっくり返してまでもよーやらんけどね。川虫を確認したいんだわ。

で、矢田川には1匹もないんだわ。矢田川はね、どんだけ上から、あれ石ひっくり返してみてもねー、おらんのだわ。いかんのだわ。ほんで、あそこでアユが垢食んだ跡は見とるんだわ。と言うことはね、プラスチックの、こういう切れっぱになったんだ。こういうのが川底にこうやって、そこに笹の葉、チャチャとついとるんだ。石のあれじゃないんだ。プラスチックとかタイヤのね、あれね、ほで、よー見るとねシラハエなんかね、

石のブロックね、あれで垢食んどの。シラハエは確かに岸辺の垢で、・・・瀬戸物のかげら、お皿のかげら、あれみんな食んどのよ。ほんで、ワシはよう、岸でこんなくらの何かの切れっ端のつるつるなやつをよー、それをよー川へ沈めたるがや。

■矢田川に結構いかれてたみたいですけど、庄内川の本流の上の方かって釣りに行かれたことありますか？

行ったよ、定光寺まで。だけどものごく水汚かったわ。そんなもん臭くてやれーへんがや。ほんで定光寺見て多治見まで行きゃー、多少土岐川になって綺麗だけでも、多治見でも川底にこんな石あれへん。

ほんでどこで釣るちゅうと堰堤で釣る。あの川底からあのブロックでコンクリで堰堤。あの一下から1つ目が2つ目の所の横たでアユ垢食んどの。ほんで、そこで沈めてね、横っ腹をね、ずーっとアユを下へ、で上へずーっと引き上げてくるんだわ。そうすると掛かるわ。ワシは木曾川とか長良川標準にするで、それで臭うわ。

■定光寺の辺りは水が白いでしよう？

白い。陶器の水なんだわ。ほんで、あこでいつも11月ごろになると土岐川、土岐津とかあの辺でニジマスの釣大会やるんだわ。ほんと、中入るとこのぐらいのヘドロなんだわ、陶器の。プーンと。長履いて入るでしょう。

ほーするとね、淀みがあるところなんか3cmから5cmくらいのね、陶土だわね、あれ。だ20年くらい前の話だよ。もう20年、25年くらい前の話。矢田川はね、そーゆー

ヘドロじゃなくて、あのなんちゅうんだ土埃のヘドロがあったわね。土埃、細かーい土の。砂が削られて、あの上へ上るとパーッと埃になって出るようなあの土の細かいの。

そういうのが沈殿したヘドロなんだわ。矢田川の汚さと庄内川の汚さではまた違うんだわなー。

で庄内川のやつは陶土の汚れなんだわ。矢田川も瀬戸川の陶土が瀬戸から来るけども。瀬戸の、俺、陶器屋の沈殿液見とるんだわ。あの、よー仕事で瀬戸へ入りよったで。ほでであれだけだね。庄内川なんかも多治見から土岐津の方、よーあの仕事に行きよったんだわ。あの加藤唐九郎さんか、あの息子さんの、あの工場なんか、よー屋根や雨どいの修理に入りよったで、だでねー。それ排水見るとねー、各工場の沈殿液あるよ。あっても雨降ると溢れて、デー――ツ。

■御用水へ入ってくる水って汚いですか？

見た感じきれいだよ。だけど御用水へ入ってくるとよー、すぐ汚くなるでよー。

猿投橋の下のあそこにコイが物凄いいおでしよー。あそこにね毎年1回はボラが上がってくるんだわ、春先に。で、ボラを引っ掛けに行くんだわ。ほん時にサンショウウオがおったんだわ。オサンショウウオ、ほりゃ庄内川の上におるでね。あのーあちらの方から。御用水におるんだよ、あのートンネルの下に。

だけど前はあそこは、何か化学工場とか鉄工所があるでしよ。今の住宅展示場。あの辺の下水があそこ入りよったけど、よう生き延びたなーと思って。雨降るとねー、石垣にあがるとるんだ、このぐらい。散歩しるとよー、よく目撃するんだ。おいサンショウウオ、あれサンショウウオだわなー、あれ。あれでも堀川へ入って、水が動くようにすりゃあきれいになるね。

矢田川のシラハエはね、15年くらい前は、この矢田川、ほんとう釣れた。それから3、4年はコイ、1年中、魚やろうと思ったらやれた。ほで、8月、9月になると、ちょこっとアユに色気出やてやるけども、それこそ一ひゅーだ。(写真)1時間くらいやってこんなもん。捕れんで、まーこんな、アユは長良やあっこ行きやええで、ほでシラハエはね、4月25日に毎年きちっとその日に入るだわ。

ほで、12月の27日まで、あのーシラハエ、矢田川へ。ほとんど毎日のように行きよった。それはアユを、遡上

を確認するために入るんだわ。

■釣った魚はどうするんですか？

シラハエは釣る片っ端から放流だわ。ほで、釣って、ほで、あのー散歩しとる人んらが、あつ、大ー大きな魚が釣れるねって、アユなんか釣つとるでしよ。これって食べれますでしよ、これアユでしよ、アユだよーって。へえーここにもおるのーって。よろしかつたらあげますよって、したら喜んで持ってかっせる、みんな。ほんで食べて美味しかった言わっせるんだわ。だけども、後で、言うの忘れたけども、ここの魚はエラとハラワタは出さないかんよって。そうしないと、ちよつと食べて、ええとは言えんから。結局、あのね、焼き方次第ではおいしいよ。

■渡辺さんシラハエも含めてですけど、あんまり食べたことが無いって言うことですよ、まずいから。こっちに來てすぐぐらいに川で釣ったやつを食べたことありますか？

シラハエも1回食べたことある。13cm、14cmっていうやつをね。毛針で釣ったやつ5匹くらいね。火にパーッと焙って、ほで、あのー甘露煮みたいにして甘辛く煮て食べたけども、あのー、シラハエそのものは、そう変わらないうねえ。木曾川や長良川のあれでも。ただ、ほろ苦、あれ苦いでね、あの腹が。あのハエは。

最後に、これ参考のために、これシラハエのね仕掛け。毛針、ワシは1年中これ使つとる。これみんな自分の手巻き。既製品じゃないよ。自分で巻いた毛針。これでアユも釣れる、これで。これ万能、どこの川でも通用するわ。これ10本か11本になつとるわ、色々。で、黄系統のね、ここはゴールド系統の針に来るんだ。で、ゴールド、これは赤と白と黒だけね、チョコチョコツ、チョコツチョコツとおかしな色を混ぜたんだわね、こういう風に。



毛バリ仕掛け

まとめ

今回、庄内川がきれいだった頃、庄内川が豊かで生活の一部だった頃を知る、18人の語り部から貴重な話を伺うことができた。「矢田・庄内川をきれいにする会」は45年間活動を続けてきたが、昔の庄内川を知る会員は殆どいなくなりました。

庄内川をきれいにする活動を次世代に託すため、まとめとして18人の語り部から伺った庄内川のかつての姿を集約し記録に残す。

■庄内川の水質について

異口同音に、庄内川の水は本当にきれいであったと話を聞いた。

少なくとも昭和20年、終戦の頃まではきれいな水が流れ、小田井から下流の水底や岸辺は真っ白な砂地で、水を飲んだこともあるという証言があった。人によっては、昭和30年頃まではきれいだだったという話もあった。

それが汚れ始めたのが、終戦から5年ほど経ってから。下水処理場もできたとし、昭和34年の伊勢湾台風の前には汚れて臭うようになってきた、昭和38年春日井市の製紙工場ができる前から水質が徐々に悪くなっていったという話もあった。

昭和38年頃庄内川が白濁し、泥が入って魚が減ったとの話があるが、川が白いことが景気の良い証拠ととらえる人もいたようだ。

土岐川では水が白い時代にもアユがおり、無機質な汚れは影響が少ないのではないかと、浄化槽の水や洗剤は自然の力では処理できない成分が多いのではないかと話も出た。

昭和40～44年頃が一番汚れがひどいという話がある。生活排水や下水処理水、陶土による汚れに加え、春日井市の製紙工場の排水が一気にとどめを刺した可能性がある。

逆に、昭和50年頃からは徐々にきれいになってきたようである。【注1】、【注2】、【注3】ちなみに、矢田・庄内川をきれいにする会の設立は昭和50年5月である。

庄内川の水質が悪くなった要因として、治水のために川全体が直線化し、チャラ瀬が多くなったことをあげる方がいた。川は瀬、淵、伏流水があるのが本来の姿であるのに、それが無くなり浄化されないし、魚が隠れる場所が無くなりカワウの食害もひどいという意見であるが、

全く同感である。

■庄内川での遊び

水がきれいで、底質が真っ白な砂ということで、真っ先に水遊びがあげられる。中川区松蔭(大蟻螂橋の辺り)には現在の海水浴場のような本格的な水泳場が設けられていたという記録がある。

また、小田井周辺でも何百人も水泳をしていたという話が聞けた。アイスクリーム屋さんが並ぶほどの盛況ぶりだったようである。

庄内川橋の橋脚には花崗岩の石が積んであり、橋脚の周りは底がえぐれて2～4mの深さがあり、上級生たちが石の上や橋の上から飛び込んでいたという話である。

下之一色の辺りでも終戦の頃まで水泳をしていたようである。

しかし、時には事故も起こり、小学校で水泳禁止になるなど、子供たちはだんだん川から離れて行った。

土岐川の方では子供たちが川から離れたのは、護岸のため川に降りる所が無くなったのも原因の一つという話があった。

水泳や魚捕り以外の遊びとしては、昭和35・6年頃庄内川橋の上流100m程の所に7～8隻のボート屋があったという話、川原でイナゴ捕りをしたという話があった。遊びでもあり食材捕りでもあった。

■庄内川で捕れた生き物(魚を中心に)

皆さんから名前があげられた生き物は以下の通り。アユ、ウナギ、コイ(昔は少なかった)、フナ、ナマズ、シラハエ(標準和名オिकワフ)、モロコ、ドジョウ、ライギョ(標準和名カムルチー)、ソウギョ(今ではほとんどいなくなった)、ドンコ(標準和名のドンコではなくヌマチチブのことを指すのかも知れない)、スナグジ・ドウゼン(標準和名カマツカ 庄内川ではスナグジ、土岐川でドウゼンと呼ばれた)、ロレコ(ヨシノボリの仲間と思われる)、ウグイ(現在の庄内川では少ないが、かつては海から遡上し春日井市鍼川(ウグイガワ)で産卵するウグイが多かった模様)

上流部ではゲバチ・アカバチ(標準和名アカザ ナマズの仲間と毒棘を持つ)、また支流の溜池にムギツク

やイタセンバラがいたという話もあったが未確認。

下流～海域ではボラ・イナ・コボ(いずれも出世魚ボラの成長に合わせた呼び名)、スズキ・セイゴ(いずれも出世魚スズキの成長に合わせた呼び名)、チヌ・チンタ・ズイ(標準和名クロダイ)、コハダ(標準和名コノシロ)、シラウオ、ハゼ、ダツ、サツキマス(下之一色 最後の漁師犬飼氏の話では年5～6回、1匹ずつ捕れた程度) 魚類ではチョウセンキンギョ(標準和名チョウセンブナ)の名前もあげられた。その名の通り朝鮮半島～中国大陸原産のスズキ目ゴクラクギョ科の魚で、戦後しばらくまではこの辺りにも生息していたが、現在は新潟・茨城・長野・岡山の限られた水域に生存。名古屋近郊ではシナキンとも呼ばれていたらしい。

アユにそっくりでアユよりおいしいアイという魚の名前も出たが、別種ではなく特別な時期に環境で育ったアユのことと思われる。また、アカハラ・アカバラという、大きくなると20cmくらいでハゼに似た唐揚げにするとおいしい魚を教えてくれた人がいたが、種類はわからなかった。

甲殻類ではモクズガニ、サワガニ、テナガエビ、モエビ(標準和名スジエビ)、ワタリガニ(標準和名ガザミ)の名前があげられた。

貝類ではドウビン(標準和名スマガイ)、ヤマトシジミ(下流)、マシジミ(上流・淡水)、ツボ(タニシ/種類不明)、オオノガイ(河口部～海域)、アサリ、ハマグリ、カキの名前があげられた。

その他捕まえて食用になった生き物としてウシガエル、アメリカザリガニの名前があげられた。スッポンは最近になって増えてきたとの話があった。

海藻類(海域)では海苔(養殖)、オゴノリ、アオノリの名前があげられた。

■魚の捕り方

ナガノヤナガサと呼ばれる、いわゆる延縄(はえなわ)式の漁法でウナギやナマズ、コイ等が捕られた。餌はダイコクミズ・ダイコクメメと呼ばれるドバミズやヒルが使われた。

ウナギはその他、土管やウネ・ウグと呼ばれる筒を使った漁(シジミやツボを入れて臭いでウナギをおびき寄せる)、ウナギカキ(河口部の泥の中に潜んでいるものを

舟の上からひっかける道具を使う。

生業・副業として行われた模様)、石倉(これも河口部で、玉石80個ほどを積んでおき中にウナギやエビ等が入った頃を見計らい、回りに網を張った上で石を除けて行う漁。石にフジツボが着くと入り込むウナギが減るので冬場に石の掃除を行う等 大変労力のいる仕掛け)、かいぼりでウナギのいる穴に石灰を溶いた水をかけるとキューキュー鳴いて出てくるといった荒技や、棒の先に釣り針をつけずに糸に通した餌を付けウナギが食いついたと同時に引き寄せて掬うといった高等テクニックもあった。

アユは友釣りや引掛、投網、テナーと呼ばれる刺し網、川の落ち込みに仕掛けるウケや築(ヤナ)で捕られていた。定光寺の千歳楼の辺りのウケや築ではアユの他、コイやナマズも捕られていたようである。

ウグイは春日井市鰯川(ウグイガワ)が庄内川へ注ぐ辺りに産卵場として舟で砂利を敷き、海から産卵のために遡上した40～50cmもあるウグイを舟から捕らえていた。その舟は勝川で購入し上流まで川を遡って持ってきたそうである。当時は堰も少なく川に変化が多く水温が低かったため漁の対象となるほどウグイが遡上・生息していたようである。

下流～海域ではシラウオ漁が庄内川の端から端まで3枚の網で仕切って行われたこと、エビ流し網漁なども行われたが、そうした網は下之一色町に当時数軒あった網屋さんが製造していた。また下之一色の漁師さんが大きなジョレンを舟で引いて貝を捕っていたという話もある。

その他、素朴な漁法では四手網(子供が夏休みに店で買って使うものから、コイを捕るための2m四方の大きなものまで多彩)や素潜りしての手づかみ、スナクジ(カマツカ)捕りのユニークな方法として裸足でつま先を上流に向けながら下流へ後ずさりして行くど魚が足裏へ潜り込むのでそれを手づかみするという方法も教えてもらった。

土岐川ではドボンコと言って、石やボルトを錘代わりにしたブッコミ釣りも行われていた。

漁具はドヒョウ(ピック)や投網等を手作りしている人もあったそうである。また玉野(春日井市)でも副業で網を作り売る人がいたという話があった。

■魚料理・食文化

鹿乗橋から定光寺にかけて料理旅館が何軒も建っていたということである。語られた店名は、白鹿、鹿乗亭、三宅亭、青山荘、鳥やす、應夢亭がある。これらの店では庄内川で捕れたアユやコイ等が供されたようである。

アユは地元の人たちが遊びで釣ってきたものを買って求めたものが多く、特に職業漁師がいたという話は聞かれなかった。

コイはウケや築で捕まえたものを店の池で活かしておき、客の求めによって料理されていたようである。

應夢亭の現ご主人の話では、庄内川のウナギは大きく脂がのってグロテスクなため、他から仕入れていたそうである。また、鹿乗橋のたもとでシラハエ10匹ほどを串にさして扇形に素焼きにし、甘辛く炊いて売っていた人もいたとのこと。

ウグイは女の人のお産の時に食べると良いということでも、良く食べられていた。下流～海域では蒲鉾の原料にも使われていたそうである。

祖父が川魚料理店を営んでいた方は、ロレコというヨシノボリと思われる魚を甘辛く煮てご飯に乗せたロレコ丼があったことを記憶されていた。この店ではその他ウグイ、アユ、ウナギを出していたとのこと。

下流域では、ボラ(イナ・コボ)は多少臭みはあるが、その独特の香りが尾張の人に親しまれボラ雑炊などで食べられていたとの話があった。(ボラの腹と背骨を抜き豆味噌、柚子、ネギ、シイタケなどを入れて焼いたイナマンジュウという郷土料理も愛知県海部郡南部や名古屋市中南部で今に伝わっている)

子供が川で捕ってくる魚は、冷蔵庫などなかった時代、貴重な鮮魚として天婦羅や焼き物などの食材として食卓に上っていた模様だ。

今の庄内川の魚の味はどうだろうか。今回の聞き取りでは、「きれいな他川のアユと混ぜておいても区別できない(土岐川)」、「今でも焼き方次第ではおいしい(矢田川)」、「エラやハラワタを除いてもとてもじゃないが食べられたものじゃない(庄内川中流)」、「魚なら今でも食べられるが貝は駄目(庄内川下流)」という意見が聞かれた。【注4】、【注5】

■庄内川の漁業協同組合

過去から現在まで庄内川水系の漁業協同組合は4つ存在した。最も古い組合は大正15年にできた玉野漁業協同組合で、春日井市以北のいわゆる玉野川を範囲とする組合であったようだ。【注6】当時の状況を詳しく知る方はいらっしゃらないが、職業漁師はごくわずかで、組合員各自が川の持ち場を決めて魚捕りを楽しみ自宅の食材とした他、一部を料理旅館等に卸していた話があった。

下流～海域には下之一色漁業協同組合があった。魚介の漁や海苔、カキ養殖が盛んに行われた。下之一色には「名古屋の台所」と呼ばれる下之一色魚市場(100年以上の歴史を持つが令和3年3月に閉鎖予定)があり通常の「競り」ではなく「買い廻り」と言って舟で海に出て魚の取り引きを行うようなことも行われ、市場の周辺ではハマグリ等の貝を加工する「貝屋」も3、4軒あったそうである。

また、全国的にも珍しい漁協が設立した病院「共愛病院」や研究施設「浅海利用研究所」まであったが、昭和34年の伊勢湾台風がこの地域に甚大な被害をもたらしたため治水優先の機運が高まり、昭和38年高潮防潮堤建設工事による漁業補償を受け解散された。

上流には現在も続いている土岐川漁業協同組合がある。一時は3000人近くの組合員を擁したが、魚も減って、平成30年現在の組合員数は当時の1割ほどに留まっている。昭和36年頃、川の水が白くなってもアユはいっぱいいた。ウナギは放流もしていたが、川から300～400mも離れた溜池でも捕れた。魚が減ったのは治水で川に変化が無くなったためと、カワウが増えて食害がひどくなったせいと思うとのこと。

4つめの組合は庄内川漁業協同組合【注7】で、昭和26年に設立され平成18年に閉鎖された。組合長の井澤氏は東洋建設の前身である東洋工業の社長まで務めた人物であるが、放流魚の買いつけに自らトラックを運転するなどしていたことを、今回インタビューしたお嬢さんから教えていただいた。

当組合の設立の経緯は不明であるが、昭和26年は春日井市にある製紙工場の起工の年に当たり、予想される汚水に対抗するため井澤氏が一念発起した可能性も考えられる。それを裏付ける証拠となる・ならないは

別にして、毎年製紙工場から組合に対し相当額の寄付金が支払われていた。水質が悪くなり庄内川からアユの姿が消えてしまったが、再確認されたのは当組合が存続中の昭和51年6月30日小田井堰堤でのことであった。

なお、当組合の解散は井澤氏の逝去直後のことであり、やはり庄内川漁業協同組合の存続は組合長であった井澤氏の執念・努力によることが極めて大きかったことが伺われる。

■行政に伝えたいこと

孫や曾孫の代にも川遊びができるようにして欲しい。自然と遊ぶということは何につけても良いという意見、小さい子供が遠くへ行かなくても川で遊べるようになれば良い、「よい子はここで遊ばない」ではなく、「よい子はここで遊びましょう」にしたいという意見に代表されるように、水質浄化と合わせて子供が安全に川に親しむ環境整備を望む声が強かった。

土岐川漁業組合長からは、今、行政や産業界は内水面漁業の元栓をじわじわ締めて、消えて行くのを待っている状態であるが、本来、海と内水面の漁業を同じに考えるのはおかしい。内水面漁業はレクリエーションの漁業として対するべきという意見があった。

行政に対しての意見ではないが、元名古屋港管理組合の大石氏からは、かつて「名古屋港を考える会」で「矢田・庄内川をきれいにする会」の丹羽会長(初代会長)を講師に招いたところ目からウロコが落ちたという話があった。その後、自分たちの利害だけでなく市民の味方になって活動しようと決意し、これが「いっせい行動」のはじまりにつながったそうである。

■最後に

川は誰のものだろう。かつて川は、そこに棲む生き物のものだったが、それらの生き物を食料として利用し、また水自体を飲料水、農薬用水、工業用水に利用する人間や企業に支配されてきた。

人が住む平地はもともと水害の跡地であり、川が社会生活と密接になるほど治水が重要になってくる。とりわけこの地域は昭和34年の伊勢湾台風という未曾有の災害を経験しており、都市河川である庄内川水系にお

いて治水が重要なのは誰もが認めるところである。

しかし、都市河川の役割として市民の憩いの場としての重要な役割を忘れてはならない。

かつての庄内川は、今回語り部の人たちが話のあったように、きれいな水が流れ、多様な生き物により生態系がつけられた豊かな川であり、市民の生活の一部であった。

しかし、生活排水が流され、陶土の濁水が流され、製紙工場の排水が流され、また、治水のみを目的とした川の直線化や変化の喪失によって自浄能力すら衰えた川となり、いつしか市民から忘れ去られてしまった。

我々「矢田・庄内川をきれいにする会」は昭和50年に設立し、半世紀近く活動して来た。この間庄内川の水質は確かに改善してきたものの、庄内川の水質は全国の一級河川中ワースト10から抜け出せない状態である。

平成30年度「健康と環境を守れ!愛知の住民いっせい行動」において河村名古屋市長は庄内川の水質浄化を求める要望に対して「泳げるような川にせんといかん。全力投球しますわ」と宣言し、春日井市にある製紙工場とも話し合う約束をしてくれた。我々にとって、何とも力強い宣言・約束である。

一方、庄内川の水質基準(類型)を決める愛知県では令和元年度に類型見直しを行うことになっている。実に24年ぶりの見直しである。

庄内川中流域の現在の類型はAA～Eの6段階中下から2番目のDである。河村名古屋市長の「泳げる」ための類型はAに相当し、かなりの乖離があるが、担当行政の愛知県環境局、愛知県環境審議会水質部会とともに後追いの類型見直し、つまり既に達成している類型しか指定しないという姿勢である。こんなことではいつまで経っても水質は改善されることはない。

2019年度に見直された庄内川水系の水質環境基準図を冒頭「はじめに」に示す。庄内川はやっとD類型がC類型に見直された。

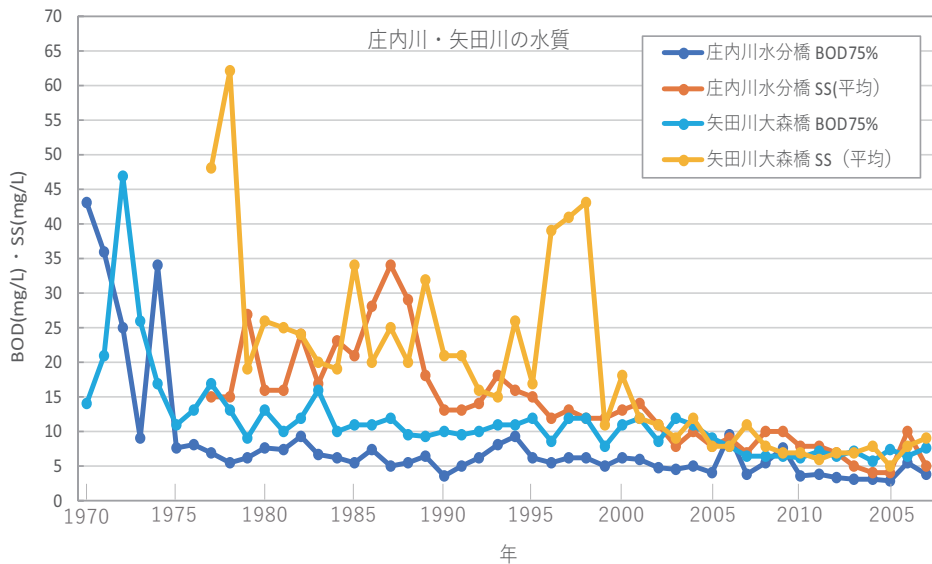
また、伊勢湾の水質を保全するため流入する汚濁物質の総量規制があり、例えばCODは26年度実績で産業排水からのCOD29t/日(対象海域に流入するCOD総量は79t/日)であるところ、このまとも度何度も登場する春日井市の製紙工場が許容される最大のCODを排出すると、その4割を占めるという試算がある。

もう一度問う、川は誰のものだろう、怠慢な行政のものでも、排水を流す一企業のものではない。そして忘れてはならないのが、憩いの場としての市民の権利である。

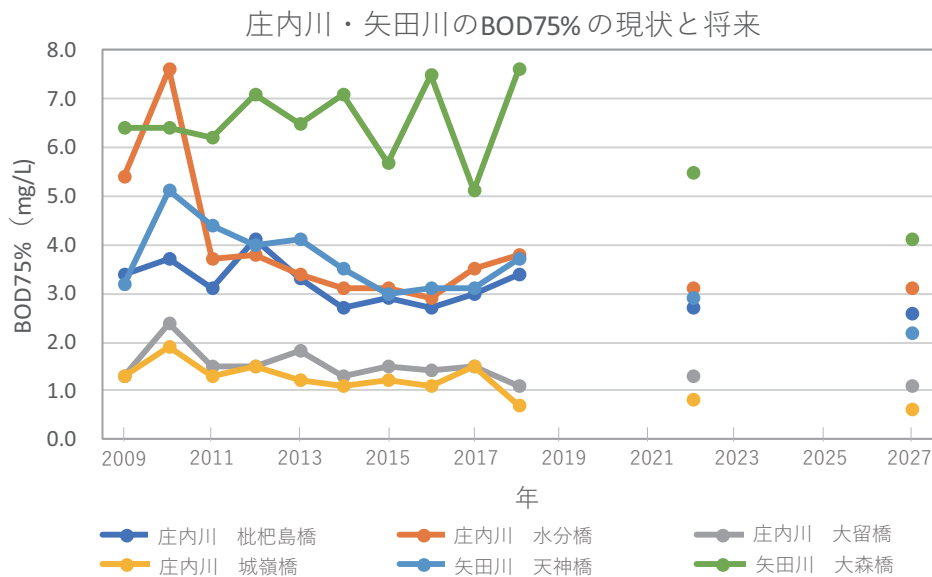
今、世界的に「Sustainable Development Goals (SDGs:持続可能な開発目標)」への取り組みが行われている。直接的な「川」に関するゴールはないが、庄内川についても、行政、企業、市民がそれぞれの立場ばかりを主張し、いがみ合うばかりでなく、次世代のために手を取り合って環境改善に取り組んでいけたらと、切に願うばかりです。

【注1】水量は水質を規定する重要な要素である。その流況は、国土交通省のデータで2002年～2017年の平水量、低水量は庄内川・枇杷島で15.5m³/s、11.6m³/s、矢田川・瀬古で2.3m³/s、1.8m³/sである。100km²当たりの低水量はそれぞれ1.1、1.6m³/sと大きいと思われる。低水量はほぼ75%値となる。

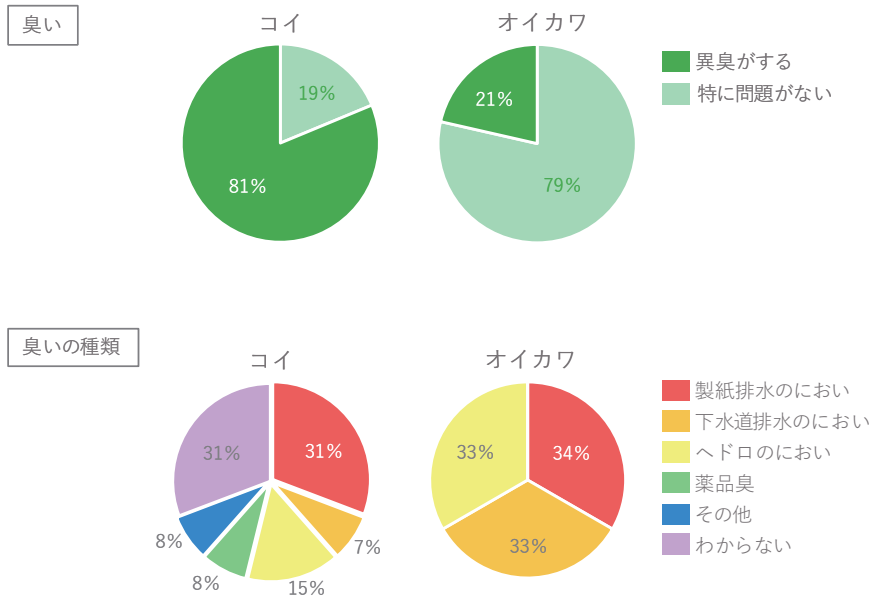
【注2】庄内川・矢田川の水質



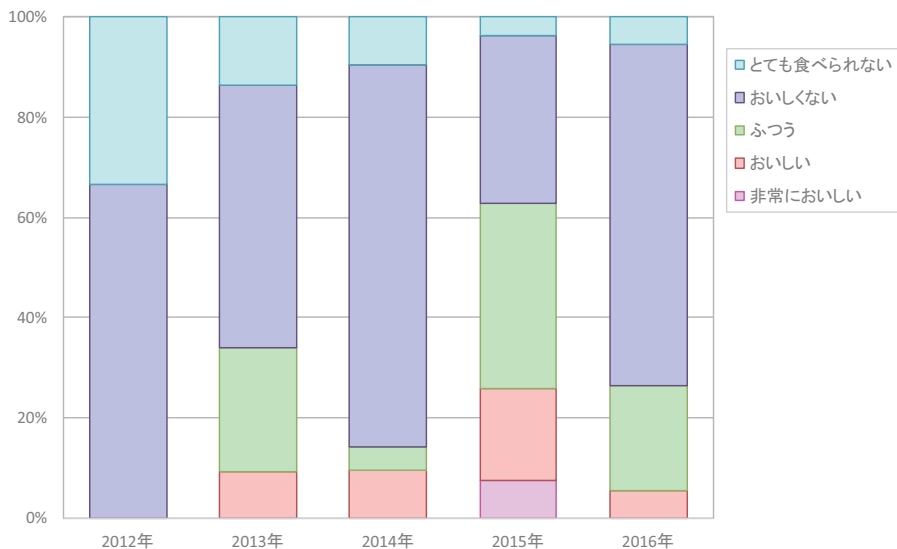
【注3】庄内川・矢田川のBOD75% (mg/L)現状と将来は愛知県環境審水質部会に県環境局が2019.11.13に示したものを。



【注4】2019.11.3第45回庄内川魚釣り大会での食味調査結果抜粋



【注5】庄内川河口・二枚貝調査でのヤマトシジミ食味調査結果抜粋



【注6】1910年の明治漁業法による沿岸村ごとの地先水面占用または江戸時代からの慣行占用の漁業権と思われる。文献を見ると五条川などでは尾張藩の漁場という形で漁業権なるものがあつたようである。また海では徳川家康が区画業漁業権なるものを認めた例もあつた。

【注7】S44.2. 17県水産業協同組合要覧によると、昭和26年9月1日設立。組合員数568名～264名(正568～200名、準471～23名)、役員数11名(理事8名、監事3名、理事に川地参司さんも)。漁業権:第5種アユ、コイ、ウナギ、フナ、オイカワ。漁場は庄内川、鮫川、蛇が洞川。S60.3 第7次漁業センサスによると庄内川水系では280名の組合員が年間30～89日漁業に従事。漁獲魚種別ではアユ45人、コイ65人、フナ80人、ウナギ60人、その他30人である。またアユ放流量はS55-H2の記録によると200kg～272kgであつた。

庄内川漁語り部集 編集委員会(文責)

宮田 照由

間野 静雄

池田 正明

及川 理

小野 天下

佐久間 元成

溝口 敏明

本守 真人

庄内川の語り部 -次世代に伝えたい、きれいだったあの頃-
令和2年3月発行
発行：矢田・庄内川をきれいにする会

公益財団法人 河川財団による河川基金の助成を受けています。



河川
基金